

文化史ノート



古典古代の文化

文化の特徴

ギリシア文化は、オリエント先進文明を受容しながらも、ポリス社会の共同生活を背景に、人間的性格の強い、合理的で現世肯定的な文化である。

ヘレニズム文化はアレクサンドロス大王の東西融合政策とギリシア人の盛んな東方移住の結果成立した融合文化である。東方移住で人口が減少したポリスが衰退し、専政体制が採用されてポリスの政治的役割も低下したため、ポリス帰属意識が喪失し、世界市民主義<コスモポリタニズム>と個人主義が時代思潮となった。

地中海に覇権を打ち立てた前2世紀頃から、本格的に先進のギリシア・ヘレニズム文化を受容し始めたローマは、精神面ではギリシア文化の模倣に終わり、またギリシア人が多く文化面で活躍した。「武力で征服されたギリシア人が、文化ではローマ人を征服した」(ホラティウス)。しかし大帝国維持のための法整備や土木建築の実用面では独創性を発揮した。またキリスト教を国教とすることによってヨーロッパ世界にキリスト教がひろがることになったことも重要である。「ローマは三度世界を征服した。剣・キリスト教・そしてローマ法によって」(19世紀ドイツの学者イエーリング)

宗教【ギリシア】

- ・人間的な神で特定の経典や特権的神官層が存在せず
→人間的で現世肯定的なギリシア文化の背景
- ・1. _____ 神…オリンポス 12 神の中心。四年に一度の2. _____ の祭典
- ・3. _____ 神…太陽神。予言の神。4. _____ の神託
- ・5. _____ 女神…知恵と戦いの神。アテネの主神→パルテノン神殿のアテナ女神像(フィディアス作)
- ・デュオニソス神…酒と豊穡と演劇の神

【ローマ】

- ・ゼウス = ジュピターのようにギリシアの神と自民族の神を同一視
- ・イランより6. _____ のような密儀宗教流入→一方でキリスト教誕生し拡大

文学【ギリシア】

- | | |
|-----|--|
| 叙事詩 | ・7. _____ (前8世紀) …最大・最古・盲目の詩人で口承叙事詩として創作 |
| | 『8. _____』…トロヤ戦争の英雄叙事詩 |
| | 『9. _____』…トロヤ戦争の英雄オデュッセウスの帰還の物語 |
| | ・10. _____ (前7世紀) …平民で、平民台頭の世相を背景 |
| | 『11. _____』…貴族を批判し、労働賛美(ギリシアにおいては例外的) |
| | 『12. _____』…ギリシア神話を体系づける |

- | | |
|-----|------------------------------------|
| 叙情詩 | ・13. _____ (前6世紀) …レスボス島出身の女流恋愛詩人 |
| | ・アナクレオン(前6世紀) …酒と女性を賛美した叙情詩人。後世に影響 |
| | ・ピンダロス(前5世紀) …オリンポス祭典の競技者を賛美 |

◎前5世紀に発達。隣保同盟間の祭典やオリンポスの祭典に際し、野外劇場で上演

◎三大悲劇詩人

- | | |
|-----|------------------------------|
| 演劇詩 | ・14. _____ 『アガメムノン』 |
| | ・15. _____ 『オイディプス』…ペリクレスと交友 |
| | ・16. _____ 『メディア』 |

◎喜劇詩人

- | | |
|-----|--|
| 演劇詩 | ・17. _____ …平和主義者、保守主義者で時事的・政治的風刺劇 |
| | 『18. _____』…ペロポネソス戦争批判 |
| | 『雲』…ソクラテスをソフィストの代表として批判・他の作品に『女の議会』『蜂』 |

1. ゼウス 2. オリンピア 3. アポロン 4. デルフォイ 5. アテナ 6. ミトラ教 7. ホメロス 8. イリアス 9. オデュッセイア
10. ヘシオドス 11. 労働と日々 12. 神統記 13. サッフォー 14. アイスキュロス 15. ソフォクレス 16. エウリピデス
17. アリストファネス 18. 女の平和

【ローマ】

◎三大詩人…1_____帝期で2_____文学の黄金時代

- ・ 3_____『4_____』…ローマ建国の叙事詩。ダンテ『神曲』で導師として登場
- ・ 5_____『叙情詩集』…サッフォーやアナクレオンの影響
- ・ 6_____『転身譜』…ギリシア神話の変身物語を集成。他に『愛の歌』

◎散文

- ・ 7_____…カエサル政敵。雄弁・名文家。ラテン語散文を確立。『国家論』『友情論』

哲学【ギリシア】

自然哲学

◎小アジア沿岸の8_____地方の9_____中心。万物の根源（アルケー）追及を特色

前6世紀

- ・ 10_____…ミレトスの人。イオニア自然哲学の創始者。万物の根源を“11_____”。日食予言
- ・ アナクシマンドロス…ミレトスの人。万物の根源を“無限（トアペイロン）”
- ・ アナクシメネス…ミレトスの人。万物の根源を“空気”
- ・ 12_____…万物の根源を“13_____”。ピタゴラスの定理
- ・ 14_____…万物の根源を“変化”とし、象徴を火。「万物は流転する」

前5世紀

- ・ アナクサゴラス…アテネで活躍のペリクレスの友人。太陽を燃える石と断言
- ・ 15_____…万物の根源を“16_____”とする唯物論

ソフィスト

◎直接民主政を背景に弁論・修辞術教授の職業的教師。アテネで活躍し在留外国人が多い
懐疑主義的で普遍的真理を否定し、主観の絶対を説く→詭弁に

- 前485頃-前415頃…17_____…18_____（知恵有る者）でペリクレス時代に活躍

三大哲学者

- 前469頃-前399…ソフィスト批判し普遍的真理の实在主張。
19_____…対話法で無知を自覚させる。「汝自身を知れ」→衆愚政下のアテネで処刑
- 前428-前347…21_____説（現実とは完全不滅の真実イデアの影）
20_____…哲人政治をシラクサで試み、失敗・22_____の学園創設・『国家論』
- 前384-前322…ギリシア最大の体系的哲学者。リュケイオンに学園。『形而上学』
23_____…24_____の師・イスラム哲学に影響→スコラ哲学に影響

【ヘレニズム】

◎世界市民主義と個人主義の思潮のもと、個人の心の平安に関心

犬儒（キュニコス）派…ディオゲネスが代表。世俗的栄華を否定

25_____派…26_____創始。禁欲による心の平安を説く

27_____派…27_____創始。心の平静を快楽とし、快楽を主張

【ローマ】

◎ストア派…実践哲学として発展

- ・ 28_____…ネロ帝の師
- ・ 29_____…ギリシア人解放奴隷。死後弟子が『語録』
- ・ 30_____…哲人皇帝。『31_____』（ギリシア語で記述）

◎エピクロス派

- ・ 32_____…『物体の本性』共和政期で、近代の唯物論に影響

◎新プラトン主義…世界の創造を超越的絶対者の流出（自己展開）と説きイスラームのスーフィズムに影響

- ・ プロティノス（3世紀）…新プラトン主義の大成者

1. アウグストゥス 2. ラテン 3. ウェルギリウス 4. アエネイス 5. ホラティウス 6. オウィディウス 7. キケロ 8. イオニア
9. ミレトス 10. タレス 11. 水 12. ピタゴラス 13. 数 14. ヘラクレイトス 15. デモクリトス 16. 原子 17. プロタゴラス
18. ソフィスト 19. ソクラテス 20. プラトン 21. イデア 22. アカデメイア 23. アリストテレス 24. アレクサンドロス
25. スtoa 26. ゼノン 27. エピクロス 28. セネカ 29. エピクテトス 30. マルクス＝アウレリウス＝アントニヌス 31. 自省録
32. ルクレティウス

歴史

【ギリシア】

1. _____『歴史』…2. _____戦争を物語的記述。“歴史の父”“エジプトはナイルの賜物”
3. _____『歴史』…4. _____戦争を批判的記述

【ローマ】

5. _____『歴史』…政体循環論。ギリシア人で小スキピオの教師。第三次ポエニ戦争見聞
6. _____『ローマ建国史』…アウグストゥス帝に仕える
7. _____『8. _____』…ガリア遠征の報告、古ゲルマン・ケルト人研究の重要史料
9. _____(1世紀中頃-2世紀初)
・『10. _____』…ゲルマン人を称え、ローマ人を諷める。古ゲルマン研究史料
・『年代記』…共和政思慕。ネロ帝のキリスト教徒迫害を記録
11. _____(1世紀中頃-2世紀初)『対比列伝』…ギリシア人でギリシアとローマの英雄対比
12. _____『教会史』…最初の教会史家。コンスタンティヌス帝に仕え、神寵帝理念

美術

【ギリシア】

彫刻…人間の肉体の理想を追及

- ・ミュロン…躍動する肉体を初めて表現
- ・13. _____…ペリクレスの友人。14. _____神殿の再建監督。15. _____女神像製作
- ・ポリクレイトス…「槍をかつぐ人」などオリンポス祭典の競技者像
- ・プラクシテレス…前4世紀にアテネで活躍。「ヘルメス像」。ヴィーナス像製作で有名

建築

- ・16. _____式…簡素で荘重。パルテノン神殿が代表
- ・17. _____式…優雅。渦巻き式柱頭。アテネのエレクティオン神殿
- ・18. _____式…繊細。ヘレニズム期に流行

【ヘレニズム】

彫刻…調和・均整よりも肉体を写實的に、あるいは官能的にとらえる

- ・「19. _____」…ミロ島出土の女性裸像
- ・「20. _____」…トロヤ戦争のエピソード（トロヤの神官がアテナ女神の蛇に絞殺）を題材
- ・「瀕死のガリア人」…ペルガモンの出土

【ローマ】

建築…アーチ形式の使用特徴で公共建造物建設、市の中央の21. _____(広場)に公共建築

- ・円形闘技場<ローマの22. _____> o 神々を祀る万神殿<23. _____>
- ・24. _____…勝利した将軍を迎える
- ・カラカラ浴場…カラカラ帝建設の浴場主体の一大娯楽施設
- ・25. _____街道…ローマ最古の板石舗装道路
- ・26. _____橋…フランス東南部に現存する代表的水道橋

1. ヘロドトス 2. ペルシア 3. トウキディデス 4. ペロポネソス 5. ポリビオス (ポリュビオス) 6. リウィウス 7. カエサル
8. ガリア戦記 9. タキトゥス 10. ゲルマニア 11. プルタルコス 12. エウセビオス 13. フェイディアス 14. パルテノン 15. アテナ
16. ドーリア 17. イオニア 18. コリント 19. ミロのヴィーナス 20. ラオコーン 21. フォルム 22. コロッセウム 23. パンテオン
24. 凱旋門 25. アッピア 26. ガール

科学

【ギリシア】

1 _____ …小アジア出身の医学の父

【ヘレニズム】

◎エジプトのアレクサンドリアの2 _____ (王立研究所) 中心

3 _____ (ユークリッド) …平面幾何学“幾何学に王道なし”

4 _____ …シラクサ出身。浮体の原理。第2回ポエニ戦争でローマ兵に殺害

5 _____ …大地球体説で、地球の周囲(子午線)の長さ測定

6 _____ …地球の自転・公転。地動説

【ローマ】

7 _____ …ギリシア人。小アジアで活躍。『地理誌』

8 _____ 『博物誌』…博物学者で百科辞典。ウェスウィオ火山爆発時にポンペイで殉職

9 _____ …ギリシア人。『アルマゲスト』で天文学を集成

→イスラム世界を経て中世ヨーロッパに影響。10 _____ 説を採用。世界地図製作も有名
ガレノス…ギリシア人医師。解剖学。マルクス＝アウレリウス＝アントニヌス帝の侍医

ローマ法

…ローマが後世に残した最大の文化遺産で十二表法に始まる

…裁判官の判決例や、法律家の解釈なども法としての権威を認められる

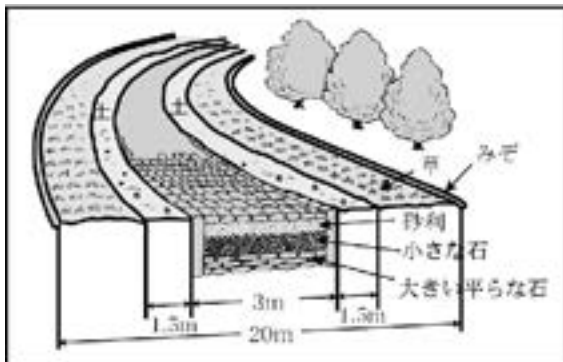
○ 11 _____ 法…共和政・帝政初期に作られた、市民権所有者に適用される法

○ 12 _____ 法…カラカラ帝の全自由民への市民権拡大により、帝国全住民に適用される法

13 _____ …勅法集・学説集・法学理論で構成のローマ法の集大成の法典

…14 _____ 帝が編纂命じ、15 _____ ら編集

【アッピア街道】



「全ての道はローマに通じる」ローマは、征服した土地の支配維持のためにも、ローマ軍団の交通のために軍道の建設に熱心であった。ローマの主要道路は、大地を1.5-3メートルほども掘り下げ、一番下に大きめの割石や切石で路床を造り、その上にまず小石や碎石を混ぜたコンクリート、次に砂利や石灰を混ぜたコンクリートと重ね、最後に切石で舗装して造られた非常に堅固なものであった。

1. ヒッポクラテス 2. ムセイオン 3. エウクレイデス 4. アルキメデス 5. エラトステネス 6. アリスタルコス 7. ストラボン
8. プリニウス 9. プトレマイオス 10. 天動説 11. 市民 12. 万民 13. ローマ法大全 14. ユスティニアヌス 15. トリボニアヌス

中世の文化

文化の特徴

800 年のカール大帝の戴冠によってビザンツ帝国から自立し、成立した中世西欧世界は、皇帝権と教皇権を中心とするキリスト教共同体であり、中世文化はキリスト教を中心とし、担い手もキリスト教の聖職者であった。その結果新約聖書の言葉として聖職者の共通語となったラテン語が学術語・公用語として用いられ、民族や国家などによる文化の地域差があまりない、普遍的性格が強い文化となった。その西欧文化が飛躍的に発展するのは、12 世紀ルネサンスによってである。11 世紀の温暖化と、三圃制農業や有輪犁など農業技術の進歩によって拡大に転じた西欧世界は、レコンキスタや十字軍によって先進のイスラム文化やビザンツ文化と接触し、イスラム世界やビザンツ世界に保存されていた古典古代の文化を学び、イスラム世界で発展した幾何学や錬金術など自然科学の基盤を導入することで、文化的な成長を遂げる。また、この頃から俗語で歌われ、文章化されていた騎士道物語などの英雄叙事詩や、南仏や南独の宮廷を遍歴して恋愛を歌った吟遊詩人などのように、教会を離れた文化も発生した。

神学

◎学問の中心“哲学は神学の婢”

◎1_____

・カール大帝による文芸復興。修道院を中心にラテン語など古典古代文化再建の努力

・2_____…イングランド出身。カール大帝に招かれ、アーヘンへ。

◎3_____ルネサンス

・十字軍とレコンキスタ、両シチリア王国の建国で先進イスラム文化とビザンツ文化流入

・カスティリヤ王国の4_____征服→5_____語のアリストテレス文献などの翻訳→ユダヤ人の翻訳官も活躍、スコラ哲学発生に影響、数学・錬金術・医学など自然科学の基盤

・両シチリア王国の都 6_____…アラビア語とギリシア語文献の翻訳拠点

◎7_____哲学

・アンセルムス

スコラ哲学の祖で、神などの観念が事物に先行する 8_____論を唱え、信仰を重視

→「信ずるために知ることを求めず、知らんがために信ず」

・アベラール…個々の事物が先に存在するという 9_____論を唱え、实在論と 10_____論争

・聖ベルナルド（ベルナルドゥス）…シトー会の全盛期を築きアベラール（アベラルドゥス）と論争

・11_____…アリストテレス哲学導入『12_____』でスコラ哲学大成

・13_____…確かな認識は経験や実験でえられるとし、経験を重視のイギリスの学者

・ドゥンス＝スコトゥス…意志の優位を唱える

・14_____…名目論を唱え、理性を重視し、スコラ哲学を解体

大学

◎教会・修道院（パリのサン＝ヴィクトールやシャルトルの司教座附属学校）を母体に 12-13 世紀発生

・アルプス以南は学生、以北は教員中心にギルド的共同体（ユニヴェルシタス）で運営

・四学部（神学・法学・哲学・医学）と七 15_____（文法・修辞・論理、数学・音楽・幾何・天文）

・16_____大学…11 C 末成立の北イタリアの西欧最古の大学。17_____部有名

・18_____大学…12 C イスラムの影響を受け南イタリアに成立。19_____部有名

・20_____大学…12 C フランス。21_____の最高権威、アベラール、トマス＝アクィナス活躍

・22_____大学…12 C イギリス。パリ大学を範。神学中心、14C ウィクリフ活躍

・23_____大学…13 C イギリス。オックスフォードより分離。神学中心

・ナポリ大学…13 C 南イタリア。神聖ローマ皇帝フリードリヒ 2 世が創設

・24_____大学…ドイツ語圏（現在はチェコの首都）最初の大学。神学

→15C 初 25_____が総長、教皇庁からの離脱唱え、チェコ語の聖書翻訳など試みる

1. カロリング＝ルネサンス 2. アルクィン 3. 12 世紀 4. トレド 5. アラビア 6. パレルモ 7. スコラ 8. 实在 9. 名目 10. 普遍
11. トマス＝アクィナス 12. 神学大全 13. ロジャー＝ベーコン 14. ウィリアム＝オッカム 15. 自由科 16. ボローニャ 17. 法学
18. サレルノ 19. 医学 20. パリ 21. 神学 22. オックスフォード 23. ケンブリッジ 24. プラハ 25. フス

建築

- ◎1 _____ 様式…ドームと2 _____ の壁画が特徴
- 3 _____ 聖堂…ユスティニアヌス帝が再建
 - 4 _____ 聖堂…「ユスティニアヌス帝と廷臣」のモザイク画、ラヴェンナに所在
- ◎5 _____ 様式…10 C 末発生。石造りの平天井で壁面で重量支持→荘重。十字架状の構造
- 6 _____ 大聖堂…イタリア、斜塔で有名
- ◎7 _____ 様式…12 C 北仏で発生。曲面天井→大きな窓を可能
→尖頭アーチと8 _____ を特徴
- 9 _____ 大聖堂…ライン流域都市でローマ植民市に起源
 - ノートルダム大聖堂…フランス、パリの代表的建築物
 - サン＝ドニ聖堂…フランス、パリ郊外でフランス王の墓所。ゴシック様式に改築

文学

- ◎英雄叙事詩や騎士道文学
- 『ベオウルフ』…7-8 世紀成立。古代英語で記述の最初の英雄叙事詩
 - 『10 _____』…ドイツ。ブルグンド族の英雄ジークフリート主人公
 - 『11 _____』…フランス。カール大帝のイスラム遠征が舞台。
 - 『12 _____』…イギリスと北フランス。ケルト人の伝説の王アーサー主人公
 - 『サガ』『エッダ』…北歐ノルマン人の神話英雄叙事詩
 - 『アベラールとエロイズ』…中世ラテン文学の書簡文学
- ◎13 _____ が俗語で、騎士の恋愛叙情詩などを宮廷や広場で吟じる
- ドイツではミンネジガー、南仏ではトルバドゥールと呼称

* 古代から中世への転換期

- ◎古典古代文化の紹介
- ボエティウス…東ゴート王国の宰相で『哲学の慰め』を著し、古典古代文献のラテン語訳も行う
 - グレゴリウス（トゥールの）…『歴史十巻』でフランク王国初期の歴史を伝える
 - イシドルス（セビリヤの）…百科事典『語源』を著し、西ゴート文化の粋を伝える
- ◎七王国期のイングランドでキリスト教文化（ノーサンブリア文化）発展
- 聖パトリック…5 世紀にアイルランドにキリスト教布教、独自の修道院文化
 - グレゴリウス 1 世…6 世紀末よりベネディクト派修道士を派遣し、イングランド布教開始の教皇
→アイルランド教会とローマ教会の布教競合で、人材・学識・書籍のイングランド流入
 - ベーダ…『イングランド教会史』…七王国期イングランドのノーサンブリア文化を代表
 - ボニファティウス…イングランドからフランク王国に渡り、ゲルマニア各地に修道院を建設
 - アルクイン…カール大帝にまねかれ、カロリングルネサンスの中心

近世西欧の文化 I

文化の特徴

ルネサンス（フランス語で「再生」の意）は古代ギリシア・ローマ文化（古典古代文化）の復活を目指した文化運動である。古典の復興と研究を通じて、現世を肯定し、自我に目覚め、自分の目で物を見、自分の心で物を考える人間像を追求した人文主義を指導理念に、14-16 世紀に展開した。十字軍以来の東方貿易で富を蓄えた都市の富裕層が存在したイタリア都市で発生し、ビザンツ帝国からの移住者と、シチリア島から流入した先進イスラム文化に助長された。14-15 世紀はフィレンツェが中心で 15 世紀にコジモ＝デ＝メディチが開いたプラトン＝アカデミーにはフィッチノやピコ＝デラ＝ミランドラなどの人文主義者が集った。16 世紀前半はローマ、16 世紀中期以降ヴェネツィアが中心となった。

しかしイタリアのルネサンスは、神聖ローマ帝国とフランスのイタリア戦争の舞台となってイタリア都市が荒廃したこと、商業革命以降世界貿易の中心が大西洋岸都市に移ったことなどにより衰退する。そしてイタリアより約 1 世紀遅れて始まったアルプス以北のルネサンスは、絶対王政の成立とともに、絶対主義時代の宮廷文化へと転換していく。しかし、17 世紀にピューリタン革命、名誉革命が起こり、立憲王政が確立したイギリスでは、市民文化も成長。18 世紀になると、理性に信頼をおいて絶対王政の矛盾を攻撃する啓蒙思想の時代がやってくるのである。

文学

【ルネサンス文学】…人文主義（1 _____）による古典古代の再生と社会風刺

◎イタリア… いずれもフィレンツェにゆかりの人

- 2 _____『3 _____』…14 世紀。4 _____方言で記述し、国民文学の祖
→案内人にヴェルギリウスとベアトリーチェ
- 5 _____『カンツォニエーレ』…14 世紀。トスカナ語叙情詩の傑作で、恋人ラウラへの思慕
→6 _____主義運動の指導者として、ラテン語・ギリシア語研究も有名
- 7 _____『8 _____』…14 世紀。トスカナ語小説の傑作で、聖職者など風刺
- 9 _____『10 _____』…道徳と政治を分離、「獅子の勇気と狐の狡知」を説く

◎ネーデルラント

- 11 _____『12 _____』…腐敗した教会を風刺し、宗教改革を準備
→ギリシア語原典より新約聖書を研究し、宗教改革に刺激（宗教改革には中立）

◎フランス

- 13 _____『14 _____』…ほら話と猥談による笑いで社会を風刺
- 15 _____『随想録（16 _____）』…人間観察のモラリスト、ユグノー戦争の世相を背景

◎イギリス

- 17 _____『18 _____』…14 世紀ボッカチオの影響
- 19 _____『20 _____』…16 世紀。“羊が人間を食う”と第一次囲い込み批判
→エラスムスの友人で、ヘンリ 8 世の大法官となるも、離婚に反対し処刑
- スペンサー『神仙女王』…16 世紀の叙情詩人。エリザベス女王賛美
- 21 _____…『ハムレット』『リア王』『マクベス』『オセロ』の四大悲劇
→他に『ヴェニスの商人』等喜劇や『ジュリアス＝シーザー』等史劇

◎スペイン

- 22 _____『23 _____』…騎士階級風刺。最初の近代小説

【絶対王政】

◎フランス古典主義文学…ギリシア・ローマの詩劇を範。ルイ 14 世時代

- 24 _____『ル＝シッド』…悲劇作家
- 25 _____『フェードル』…悲劇作家
- 26 _____『タルチェフ』『守銭奴』…喜劇作家

1. ヒューマニズム 2. ダンテ 3. 神曲 4. トスカナ 5. ペトラルカ 6. 人文 7. ボッカチオ 8. デカメロン 9. マキアヴェリ
10. 君主論 11. エラスムス 12. 愚神礼讃 13. ラブレール 14. ガルガンチュアとパンタグリユエルの物語 15. モンテーニュ 16. エセー
17. チョーサー 18. カンタベリー物語 19. トマス＝モア 20. ユートピア 21. シェイクスピア 22. セルバンテス 23. ドン＝キホーテ
24. コルネイユ 25. ラシーヌ 26. モリエール

◎イギリス市民文学…市民革命と市民階級の成立背景

- ・ 1 _____ 『 2 _____ 』 …17 世紀ピューリタン文学。共和国書記で革命擁護、王政復古後執筆
- ・ 3 _____ 『 4 _____ 』 …17 世紀ピューリタン文学。革命軍兵士から復古後聖職者
- ・ 5 _____ 『 6 _____ 』 …18 世紀。無人島漂流者の物語。市民階級の価値観肯定
- ・ 7 _____ 『 8 _____ 』 …18 世紀。漂流者の寓話。徹底的な社会・人間批判

建築

【ルネサンス】

◎ルネサンス様式…丸屋根（ドーム）と列柱が特徴

- ・ 9 _____ 大聖堂…フィレンツェ。10 _____ 設計でドームが有名
- ・ 11 _____ 大聖堂…ローマ。12 _____ 設計。ミケランジェロが縮小施工
→教皇ユリウス 2 世の事業開始→レオ 10 世の贖宥状→宗教改革の原因に

【絶対王政】

- ◎ 13 _____ 様式…17 世紀。豪華華麗 14 _____ 宮殿…ルイ 14 世建立
- ◎ 15 _____ 様式…18 世紀。繊細優美 16 _____ 宮殿…フリードリヒ 2 世ポツダムに建立

美術

【ルネサンス】…人間の肉体美の再発見と遠近法による絵画技法の確立

◎イタリア

- ・ 17 _____ 「聖フランチェスコの生涯」…13 世紀末より活躍
- ・ マザッチョ…ブルネレスキ（建築）ドナテルロ（彫刻）と遠近法を開発
- ・ 18 _____ 「 19 _____ 」 「 20 _____ 」 …メディチ家の庇護下フィレンツェで活躍
- ・ 21 _____ 「 22 _____ 」 「最後の晩餐」
→万能の天才、最後はフランスのフランソワ 1 世の宮廷画家
- ・ ドナテルロ…ルネサンス前期を代表する彫刻家
- ・ 23 _____ …絵画で「天地創造」「最後の審判」。彫刻で「 24 _____ 」 「ピエタ」
- ・ 25 _____ 「聖母子像」「アテネの学堂」…ダ・ヴィンチ、ミケランジェロと並ぶ三大画家

◎ネーデルラント

- ・ 26 _____ 兄弟…油絵の技法開発。肖像画と宗教画
- ・ 27 _____ …ベルギーの国民的画家。農民を描く

◎ドイツ

- ・ 28 _____ …「四使徒」など宗教画・重く沈んだ画風
- ・ 29 _____ 「ヘンリ 8 世像」「エラスムス像」…イギリスに渡り活躍

【絶対王政】

◎バロック絵画

- ・ 30 _____ …スペインで活躍のギリシア人、肖像画。宗教画「聖母昇天」
- ・ 31 _____ …スペイン宮廷画家「女官たち」
- ・ 32 _____ …バロックを代表する画家でネーデルラントの外交官でもあった
- ・ 33 _____ …ルーベンスの弟子でイギリスで活躍「チャールズ 1 世像」
- ・ 34 _____ …オランダ盛期の市民生活を描く。光と影の強調「夜警」
- ・ 35 _____ …17 世紀オランダのデルフトの画家、風俗画を代表、光と色の調和

◎ロココ様式

- ・ ワトー「シテール島への船出」…貴族の宴会風景などを描く
- ・ ブーシェ「ポンパドゥール夫人」…貴族の肖像画や神話画など

1. ミルトン 2. 失楽園 3. パンヤン 4. 天路歷程 5. デフォー 6. ロビンソン＝クルーソー 7. スウィフト 8. ガリバー旅行記
9. サンタ＝マリア 10. ブルネレスキ 11. 聖（サン）ピエトロ 12. ブラマンテ 13. バロック 14. ヴェルサイユ 15. ロココ
16. サンスーシ 17. ジョット 18. ボッティチェリ 19. ヴィーナスの誕生 20. 春 21. レオナルド＝ダ＝ヴィンチ 22. モナリザ
23. ミケランジェロ 24. ダヴィデ 25. ラファエロ 26. ファン＝アイク 27. ブリューゲル 28. デューラー 29. ホルバイン
30. エル＝グレコ 31. ベラスケス 32. ルーベンス 33. ファン＝ダイク 34. レンブラント 35. フェルメール

近世西欧の文化Ⅱ

文化の特徴

現世の価値を肯定したルネサンスの精神は、現世の探求に人々の関心を向けさせ、東方のイスラム世界の知的刺激とあいまって自然科学が発達し始めた。特に17世紀は科学革命の世紀となる。

一方、ウィリアム＝オッカムによる信仰と理性の分離は、理性によって世界を把握しようとする哲学の神学からの分離をもたらした。その方法論に、演繹法を取る大陸合理論と、帰納法を取るイギリス合理論が現れ、両者はドイツ観念論の創始者カントによって批判的に統合される。

また、主権国家体制への移行が進み、国家の役割が重要になるにつれ、国家や公共をめぐる議論が盛んになった。国王は王権神授説で武装して皇帝権や教皇権からの自立と国王主権の擁護を図ったが、それに対しキリスト教思想を援用しつつ自然権の思想が説かれ、社会契約説は国民国家の思想に道を開いていく。

科学

◎ルネサンス三大発明…原型は中国の宋

- ・ 1 _____ …騎士階級の没落加速
- ・ 2 _____ …14世紀イタリアで改良され、大航海時代準備
- ・ 3 _____ …15世紀中頃 4 _____ (13世紀高麗のものが世界初)
→製紙法の普及と相まって宗教改革や新思想の伝達に大きな貢献

◎天文学の革命…地球球体説、地動説によるカトリック教会教義からの解放

- ・ 5 _____ …16世紀地動説。ポーランドの聖職者
- ・ 6 _____ …16世紀地動説と汎神論を主張し火刑となったイタリアの学者
- ・ 7 _____ …17世紀望遠鏡で天体観察し、地動説。物体落下の法則
- ・ 8 _____ …17世紀。遊星運行の法則で地動説を数学的に実証

◎科学革命…17世紀以降科学知識の体系が確立“知識は力なり（F＝ペーコン）”

- ・ 9 _____ …17世紀仏。確率論。圧力に関する法則
- ・ 10 _____ …17世紀英。血液循環立証
- ・ 11 _____ …17世紀英。気体力学でボイルの法則
- ・ 12 _____ …17世紀英。万有引力の法則『13 _____』微積分法、光の波動説否定
- ・ 14 _____ …18世紀仏。燃焼実験で質量不変の法則、革命期に徴税請負人の過去理由に処刑
- ・ 15 _____ …18世紀仏。星雲説。宇宙進化論
- ・ 16 _____ …18世紀スウェーデン。植物分類学
- ・ 17 _____ …18世紀英。種痘法

哲学

◎イギリス経験論…個々の経験や実験を重視→ 18 _____ 法

- ・ 19 _____ 『新オルガヌム』…個々の具体的事物の観察から出発する帰納法
- ・ 20 _____ …哲学では唯物論主張
- ・ 21 _____ 『人間悟性論』…認識の源泉を感覚と経験とする経験論哲学
- ・ 22 _____ 『人性論』…懐疑論をエッセーの形で発表

◎大陸合理論…感覚や経験を排し、数学的な論理的思考を重視→ 23 _____ 法

- ・ 24 _____ 『方法序説』[我思う、故に我在り]…一つの真理から推論を展開する演繹法
- ・ 25 _____ 『パンセ』…カトリック信仰に立つ合理論で「人間は考える葦」
- ・ 26 _____ 『エチカ（倫理学）』…汎神論で自然そのものを神とみなすユダヤ人哲学者
- ・ 27 _____ …単子論（モノイド論）で科学と宗教の統一をはかる、数学で微積分法

◎ドイツ観念論…イギリス経験論と大陸合理論を批判的に統合

- ・ 28 _____ 『純粋理性批判』…批判哲学で人間の認識の限界をさぐる

1. 火薬 2. 羅針盤 3. 活版印刷術 4. グーテンベルク 5. コペルニクス 6. ジョルダノ＝ブルーノ 7. ガリレオ＝ガリレイ 8. ケプラー
9. パスカル 10. ハーヴェー 11. ボイル 12. ニュートン 13. プリンキピア 14. ラヴォワジエ 15. ラプラス 16. リンネ
17. ジェンナー 18. 帰納 19. フランシス＝ペーコン 20. ホッブズ 21. ロック 22. ヒューム 23. 演繹 24. デカルト 25. パスカル
26. スピノザ 27. ライプニッツ 28. カント

社会思想

王権神授説

君主の権力は神から授けられた絶対のものであり、いかなる制限も受けないとする思想
エウセビオスの神寵帝理念や、その影響を受けた皇帝教皇主義などに由来

◎思想家

- ・ 1 _____ …16 世紀 2 _____ 戦争に際し『国家論』で 3 _____ を説いた仏の政治学者
- ・ フィルマー …17 世紀チャールズ 1 世に仕えた英の学者。『族父長論』
- ・ 4 _____ …17 世紀ルイ 14 世に仕えた聖職者で 5 _____ 説の代表、国家教会制度確立

◎体现者

- ・ ジェームズ 1 世 …著作に『自由なる王国の真法』
- ・ ルイ 14 世 …朕は国家なり

自然権思想

国家およびその法に先立ち、個人に本来的に備わり、侵されることのない諸権利を 6 _____
日本では天賦人権・基本的人権とも称す

- ・ 7 _____ …17 世紀自然法に基づく国際法の必要を説いた「国際法の父」
『 8 _____ 』 …公海自由の原則
『 9 _____ 』 …10 _____ 戦争の悲惨から国際法提唱

社会契約説

社会・国家形成の原理を、自然権を有する個人間の契約に求める学説

- ・ 11 _____ …清教徒革命期、12 _____ に立ちながら絶対王政擁護
『 13 _____ 』 …人間の自然状態を「万人の万人に対する闘争」
→国民は社会契約時に自然権を国王に譲渡
- ・ 14 _____ …名誉革命を弁護・アメリカ独立革命に影響を与える
『 15 _____ 』 …16 _____ (政府を取り替える権利) を主張
→政府は国民から自然権運用の信託をうけた代表で主権者は国民とする

啓蒙思想

人間や自然に対する合理的・科学的認識による理性の力で、人類の普遍的進歩を図る
絶対主義体制の矛盾とカトリック教会による思想統制を批判し、18 世紀のフランスで開花

- ・ 17 _____ …18 _____ の必要を説く
『 19 _____ 』 …イギリスの立憲政治賞賛し三権分立主張
『ペルシア人の手紙』 …フランスの社会批判の風刺小説
- ・ 20 _____ …特権階級・カトリック教会批判； 21 _____ と交流
『哲学書簡』 (イギリス通信) …イギリスの制度紹介：中国の科举・朱子学も賛美
- ・ 22 _____ …フランス革命に最も影響；「自然に帰れ」をモットーとしロマン主義の先駆
『 23 _____ 』 …自由平等・主権在民、人間の自然状態を称賛しホッブズを批判
『 24 _____ (民約論) 』 …直接民主制主張
『エミール』 …教育論
- ・ 25 _____ …『 26 _____ 』 編集の中心の文学者；ロシアのエカチェリーナ 2 世と交流
- ・ 27 _____ …『百科全書』 編集の協力の数学者・哲学者；総序文執筆
- ・ レッシング …『賢者ナータン』 で宗教対立に寛容を説いたドイツの啓蒙主義者
- ◎ 28 _____ 主義 …国富の源泉を農業とし、 29 _____ (なすにまかせよ) で自由主義経済主張
- ・ 30 _____ …仏：『 31 _____ 』 を著し経済学の祖。ルイ 15 世の宮廷外科医
- ・ 32 _____ …仏：ケネーの弟子でルイ 16 世初期の財務長官

1. ボーダン 2. ユグノー 3. 主権 4. ボシュエ 5. 王権神授 6. 自然権 7. グロティウス 8. 海洋自由論 9. 戦争と平和の法
10. 三十年 11. ホッブズ 12. 社会契約説 13. リヴァイアサン 14. ロック 15. 市民政府二論 16. 抵抗権 17. モンテスキュー
18. 三権分立 19. 法の精神 20. ヴォルテール 21. フリードリヒ 2 世 22. ルソー 23. 人間不平等起源論 24. 社会契約論 25. デイドロ
26. 百科全書 27. ダランベール 28. 重農 29. レッセフェール 30. ケネー 31. 経済表 32. テュルゴー

近代西欧の文化

文化の特徴

18世紀末から、産業革命（工業化）と市民革命の二重革命によって近代社会が成立していくと、文化の担い手として市民が登場する。市民（ブルジョワ）文化の時代の幕開けである。文化思潮としては、理性を尊重した啓蒙の時代に対する反発もあって、19世紀前半は感情を重視するロマン主義の時代となる。また、国民主義に民族主義の要素が加わって、民族国家の建設が求められたため、人類に普遍的な価値観を追求した啓蒙主義と対照的にロマン主義では民族的伝統が重視された。しかし、ウィーン体制が崩壊した19世紀後半になると、現実を軽視しがちであったロマン主義に対する反発もあって、現実を直視しようとする写実主義や自然主義が文学において盛んとなり、19世紀末には一転して耽美主義や象徴主義が登場した。絵画では、19世紀末になると、ルネサンス以来の遠近法によって規定された絵画手法と決別する最初の試みとして、印象派の運動が起こる。

そして第一次世界大戦によって、近代社会の価値観や、科学と進歩に関する決定的な疑問が生じると、新たな価値観を模索する試みの中から、様々な現代芸術が登場するのである。

一方、第一次世界大戦後、いち早く大衆消費社会の到来を迎えたアメリカ合衆国では、ジャズや映画などの大衆文化が花開き、世界に影響を与えていく。

近代文学

疾風怒濤

18世紀末のドイツで起こった文学革新運動、シュトゥルム＝ウント＝ドランク

啓蒙主義の理性偏重に反対し、社会の旧習や世俗的道德を批判、個性尊重と感情の解放を主張

- ・ 1 _____ …ドイツを代表する文豪で若き日に 2 _____, 成熟して 3 _____ へ
『 4 _____ 』友人の婚約者に恋愛し、主人公は自殺。青春文学の傑作
- ・ 5 _____ …ゲーテと並び称されるドイツの国民的詩人、疾風怒濤から古典主義へ
『群盗』主人公は強盗団の首領となって社会変革をこころみる

古典主義

疾風怒濤を主張したゲーテやシラーが移行、ギリシア・ローマの芸術を範とする

知性と感情の調和した理想的人間像を重視

- ・ 1 _____ …ヴァルミーの戦いに、ここから、そしてこの日から世界史の新しい時代が始まる
『 6 _____ 』悪魔メフィストフェレスと契約したファウスト博士の伝説に取材
- ・ 5 _____ …ワイマールに赴きゲーテと友情を結び、共に古典主義を確立
『 7 _____ 』三十年戦争の皇帝軍司令官ヴァレンシュタインの野心と没落
『 8 _____ 』百年戦争で活躍したフランスのジャンヌ＝ダルクを描く歴史劇
『 9 _____ 』スイス独立運動の伝説の英雄に取材

ロマン主義

啓蒙主義の理性偏重と人類共通の普遍的価値の主張に対し、感情と民族的価値の尊重を説く

19世紀前半の民族主義の台頭に影響。過去賛美の伝統主義と、人間性解放や社会変革の両面性

- ・ 10 _____ …ドイツ = 11 _____ を代表する詩人、初期ロマン派を形成
『青い花』夢で見た青い花を求め旅に出て、青い花に面差しの似た少女と出会う
- ・ 12 _____ …改宗ユダヤ人で愛を歌う叙情詩人であり、体制を批判する革命的民衆詩人
『歌の本』青年期の詩集 音楽性豊かな恋愛詩、ドイツ歌曲の傑作に歌詞として採用
- ・ 13 _____ 『グリム童話集』で口承説話を集成、音韻研究から比較言語学の方法論確立
- ・ スタール夫人 …ドイツ = ロマン主義をフランスに紹介 ネットケルの娘
- ・ 14 _____ …フランス = ロマン主義の指導者 第二帝政を批判し亡命
『 15 _____ 』大革命以降の激動の時代を、社会の犠牲者への人間愛で描く
- ・ 16 _____ …イギリス = ロマン主義の代表的詩人。 17 _____ 戦争に参加
『チャイルド＝ハロルドの遍歴』青年の異国遍歴をえがく長編物語詩

- ・スコット…イギリス = ロマン主義の詩人・小説家で歴史に題材
『湖上の美人』湖上の小島に住む美姫をめぐる勇士たちの恋と武勇の物語詩
『アイバンホー』リチャード1世の時代を背景に勇士アイバンホーが活躍する歴史小説
- ・1 _____ …アメリカのニューイングランドの出身でニューイングランドの歴史に題材
『2 _____』1640年代のボストンのピューリタン社会を姦通罪を犯した女性を通じ描写
- ・ホイットマン…アメリカ・ロマン主義の民主主義詩人で物質万能の世相を批判『草の葉』
- ・マーク=トウェイン…アメリカの国民作家で南北戦争後の社会を“金ピカ時代”
『ハックルベリー=フィンの冒険』西部のほら話の伝統の上に口語体の国民文学確立
- ・3 _____ …ロシア・ロマン主義を代表 ロシア国民文学の創始者 デカブリストに共感
『4 _____』プガチョフの乱に取材した歴史小説

ロマン主義の理想・感情重視と現実の軽視に対し、醜悪面も含めて現実を描写することを主張
ウィーン体制崩壊と産業革命の進展による社会の変化を背景

- ・5 _____ …フランス6 _____ の先駆者、青年期にナポレオン戦争に参加
『7 _____』副題は「1830年代史」王政復古期の世相を背景に青年の野心と挫折
- ・8 _____ …フランス写実主義の先駆者、作品群によって社会総体の再現を意図
『人間喜劇』『ゴリオ爺さん』を含む諸作品の総称で、独立した作品が他の作品と関連
- ・9 _____ …フランス写実主義の確立者「ボヴァリー夫人は私だ」
『10 _____』副題「地方風俗」田舎医者妻の不倫と自殺
- ・11 _____ …イギリスの下層社会を哀歎を持ってリアルに描き社会の不正を指摘
『二都物語』フランス革命時代のロンドンとパリを舞台 『オリヴァ=トウイスト』孤児主人公
- ・サッカレー …イギリス上流社会を風刺、ディケンズと19世紀イギリス文学を代表
『虚栄の市』上流社会の虚栄と俗物根性を批判
- ・12 _____ …ロシアの小説家・劇作家 社会や人間の醜悪面を笑いと涙で描写
『死せる魂』死んだ農奴の権利を集めて詐欺を計画する人物を通じて社会の病理を摘出
- ・13 _____ …大地主の家に生まれ、ロシアの知識人の苦悩を描く
『14 _____』農奴制下のロシア農民を写実的に描写し、農奴解放に影響
『15 _____』既存の価値を否定する「16 _____」の子の世代と父の世代の対立
- ・17 _____ …ロシア写実主義の大家で人道主義的見地から日露戦争にも反対
『18 _____』ナポレオン戦争を背景に壮大な人物群像の物語が展開
- ・19 _____ …人間存在の根本問題を追求したロシア文学の世界的巨匠
『カラマーゾフの兄弟』神と人間の根本を思索した世界文学の傑作

写実主義をさらに徹底し、遺伝学など自然科学の成果を小説に導入することを主張
科学技術の進歩を礼賛する当時の社会風潮を反映、ゾラが理論化

- ・20 _____ …21 _____ を理論化、22 _____ でドレフュス擁護、「私は告発する」
『居酒屋』居酒屋に集うパリの下層民衆の生態を描写
- ・23 _____ …フランスの作家で写実主義を確立したフロベールの愛弟子
『女の一生』不幸な女性の生涯を冷厳に描き出す
- ・24 _____ …デンマークの作家で女性の解放を描く
『人形の家』夫の人形ではなく自立した人間たらんとして家を出るノラを主人公
- ・25 _____ …『令嬢ジュリー』などで知られるスウェーデンの小説家・劇作家

1. ホーソン 2. 緋文字 3. プーシキン 4. 大尉の娘 5. スタンダール 6. 写実主義 7. 赤と黒 8. パルザック 9. フロベール
10. ボヴァリー夫人 11. ディケンズ 12. ゴーゴリ 13. トゥルゲーネフ 14. 獵人日記 15. 父と子 16. ニヒリズム 17. トルストイ
18. 戦争と平和 19. ドストエフスキー 20. ゾラ 21. 自然主義 22. ドレフュス事件 23. モーパッサン 24. イブセン
25. ストリンドベリ

美の形成と享受を最高の価値とし、芸術のための芸術を主張
自然主義に反対し、道徳的功利性を排除し、生活も芸術化

- ・ 1. _____ …アメリカの文豪ポーに影響を受けたフランスの詩人・美術批評家
『悪の華』 象徴主義の先駆、近代詩の出発点
- ・ 2. _____ …イギリスの 3. _____ の小説家・劇作家
『サロメ』 預言者ヨハネの首を要求するヘロデ王の養女サロメに取材した戯曲
『ドリアン = グレイの肖像』 主人公の美青年ドリアンの代わりに肖像画が醜悪に

内面の情動を象徴（シンボル 鳩＝平和 など）を用いて表現
音楽的表現を重視し、20 世紀の現代詩の出発点となり、絵画や音楽にも影響

- ・ 4. _____ …フランスの詩人で音楽的韻律の詩の技法を確立
- ・ 5. _____ …フランスの天才詩人『イリュミナシオン』『地獄の季節』
- ・ マラルメ …ポーとボードレールの影響から出発し、フランス現代文学の先駆

現代文学

反戦・反ファシズムを主題とした文学で第一次世界大戦の反省が原点
自然主義に反発、人間存在の内面を問うドイツ表現主義などの手法

- ・ 6. _____ …フランスの小説家で反戦・反ファシズムをつらぬく
『ジャン = クリストフ』 音楽家の主人公の成長を描く教養小説・大河小説
- ・ マルタン = デュ = ガール …フランスの小説家で『チボー家の人々』でノーベル文学賞
『チボー家の人々』 第一次世界大戦を描いた歴史小説
- ・ 7. _____ …ドイツの小説家でナチスに反対してアメリカに亡命
『魔の山』 スイスの結核療養所を舞台に主人公の青年の成長を描く教養小説
- ・ 8. _____ …ドイツの作家で叙情的内面的作風・一次大戦を批判しロランと交友
- ・ ブレヒト …ドイツの劇作家でナチスに反対し亡命
『三文オペラ』 ジャズの楽団の起用と意図的な荒唐無稽の物語で、演劇の伝統を革新

現実を徹底的に否定しようとしたダダイズムから発展、シュルレアリスム
9. _____ の精神分析学の影響を受け表層意識下の“無意識”を重視

- ・ ブルトン …フランスの詩人・小説家でシュルレアリスム運動を指導。代表作は『ナジャ』
- ・ アラゴン …共産主義に接近しシュルレアリスム離脱。人民戦線支持、レジスタンス参加

人間の内部の心理の動きや意識の流れに焦点をあて、その描写を主眼とする小説
フロイトの精神分析学とも呼応し、無意識の領域まで探査

- ・ ジイド …フランスの作家で思想遍歴後、社会主義批判『狭き門』
- ・ ブルースト …フランスの作家で『失われた時を求めて』は心理小説の代表傑作
- ・ ジョイス …アイルランドの作家で『ユリシーズ』で文体実験と言語技術の極致を示す

漸進的社会主義を主張するイギリスのフェビアン協会関係の作家など
社会主義リアリズムを唱え、労働者の立場に立った創作を行ったソ連の作家

- ・ 10. _____ …イギリスの劇作家でフェビアン協会の創設に関与
- ・ ウェルズ …『タイムマシン』など S F 文学創始 フェビアン協会に所属し、文明批評
- ・ ゴーリキー …『どん底』で社会主義リアリズムを創始したソ連の作家
- ・ 11. _____ …スペイン内戦に参加し『カタロニア讃歌』、ロシア革命風刺の『動物農場』、『1984』
- ・ ショーロホフ …『静かなるドン』ソ連の社会主義リアリズムを代表する作家

アメリカで第一次世界大戦に参戦し、幻滅した世代の作家、ロスト = ジェネレーション

- ・ 1 _____ …『武器よさらば』一次大戦『誰がために鐘は鳴る』スペイン内乱
- ・ スタインベック…『怒りの葡萄』農民の苦しい生活を描く
- ・ フォークナー…『サンクチュアリ』架空の南部年代記

理性で捉えきれない人間存在の不条理を描写

実存主義の哲学の影響

- ・ 2 _____ …『変身』実存主義文学の先駆とされる
- ・ 3 _____ …『嘔吐』レジスタンスにも参加したフランスの作家・実存主義哲学者
- ・ 4 _____ …『異邦人』人間の不条理を描いたフランスの作家

SF 小説やファンタジー小説の技法も駆使、マジック・リアリズム、メタフィクションなど

- ・ トールキン…『指輪物語』イギリスのファンタジー小説
- ・ ガルシア = マルケス…『百年の孤独』コロンビアの作家でノーベル賞受賞

近代の科学

◎自然科学，実験科学の成果が技術開発に転用，第二次産業革命の背景に

- ・ 5 _____， 6 _____ …独， 7 _____ の法則：内燃機関の発明に道
- ・ 8 _____， マックスウェル…電磁気の研究：電動機・電信・電話・電気製品などの発明に道
- ・ ヘルツ…独，ヘルムホルツの弟子でマックスウェルの電磁気理論より電磁波を実験で確認
- ・ 9 _____ …独， 10 _____ の基礎：化学肥料や，化学繊維の発明に道
- ・ ソルヴェイ…ベルギー，化学でアンモニアソーダ法で炭酸ナトリウムを発生→ガラス工業
- ・ 11 _____ …独， 12 _____ の放射線発見
- ・ 13 _____ …英，1859 年『14 _____』・進化論→社会進化論に影響
- ・ 15 _____ …オーストリア，遺伝の法則
- ・ 16 _____ …仏，低温殺菌法→ワイン・乳製品の長期保存を可能に・狂犬病予防
- ・ 17 _____ …独，結核菌，コレラ菌発見
- ・ 18 _____ …夫仏，妻ポーランド，ラジウムの発見

近代の技術

◎科学の成果を応用，第二次産業革命の基盤，運輸と通信の技術革新は世界の一体化を推進

- ・ 19 _____ …スウェーデン，ダイナマイトの発明→ノーベル賞の創設
- ・ 20 _____ …米・自記電信機
- ・ 21 _____ …米・電話機→電話会社設立
- ・ 22 _____ …伊・無線通信→通信会社設立
- ・ 23 _____ …米・蓄音機，白熱電球，映写
- ・ 24 _____ …独・内燃機関（軽油エンジン）
- ・ 25 _____ …独・内燃機関（ガソリン機関） - 自動車の発明→ダイムラー社発展
- ・ ジーメンス兄弟…独・電気メッキ・電動機（電車）・ガラス製造→ジーメンス社発展
- ・ クルップ…独・鉄鋼と大砲生産→大兵器産業で死の商人
- ・ ベッセマー…英・製鉄炉の新技術確立→独のクルップ社や米のカーネギー社に採用
- ・ 26 _____ …米・20 世紀初に世界初の飛行機

1. ヘミングウェイ 2. カフカ 3. サルトル 4. カミュ 5. マイヤー 6. ヘルムホルツ 7. エネルギー保存 8. ファラデー 9. リービヒ
10. 有機化学 11. レントゲン 12. X線 13. ダーウィン 14. 種の起源 15. メンデル 16. パストゥール 17. コッホ 18. キュリー夫妻
19. ノーベル 20. モーリス 21. ペル 22. マルコーニ 23. エディソン 24. ディーゼル 25. ダイムラー 26. ライト兄弟

経済思想

重商主義

国富の源泉を金銀とし、金銀獲得のため、産業・貿易への国家の保護・干渉を主張
初期の重金主義（直接的な金銀の獲得目標）から貿易差額主義へ移行

- ・トマス＝マン…英：東インド会社理事，貿易差額主義で輸出の奨励と輸入の抑制
- ・コルベール…仏：ルイ 14 世の財務長官，王立マニュファクチュアなど産業育成

重農主義

国富の源泉を農業とし，農産物の自由取引や農民の減税など主張
レッセフェール（なすにまかせよ）を標語に重商主義による経済への政府の介入批判

- ・ 1 _____ …仏：『経済表』を著し経済学の祖。ルイ 15 世の宮廷外科医
- ・ 2 _____ …仏：ケネーの弟子でルイ 16 世初期の財務長官

古典派経済学

国富の源泉を国民の生産労働とし，重農主義から自由主義経済の思想を継承
イギリス中心で商品交換と分業を理論化

- ・ 3 _____ …英：ケネーなど重農主義者と交流し， 4 _____ 創始
『 5 _____ 』 「みえざる手」と市場経済を評価，分業による生産効率上昇を主張
- ・ 6 _____ …英：食糧生産重視の視点から穀物法に賛成
『 7 _____ 』 食糧生産と人口増の関係から貧困を説明
- ・ 8 _____ …英：比較優位説から国際分業を重視し，自由貿易を主張，穀物法に反対
『経済学及び課税の原理』商品価値を労働量に求める労働価値説はマルクスに継承
- ・ J. S. ミル…英：功利主義者。コントの実証主義を導入し古典派経済学を大成

歴史学派経済学

イギリスの古典派経済学（自由主義経済学）の自由貿易の主張に反対し，ドイツで提唱
民族の歴史的特徴と経済的発展の特性を重視し，後発国の保護貿易主張

- ・ 9 _____ …独： 10 _____ の祖，ドイツ関税同盟結成に尽力
『政治経済学の国民的体系』古典派経済学の自由貿易論を批判し保護関税を主張

近代経済学

1870 年代の限界効用説出現以降の，歴史学派経済学とマルクス主義を除く経済学の総称
経済学に数学的モデルを導入

- ・ ワルラス…限界効用説で，一般均衡理論の体系を確立
- ・ 11 _____ …英：限度内での政府の経済への介入を認める修正資本主義を理論化
『雇用・利子・及び貨幣の一般理論』景気対策として公共投資を重視

歴史思想

19 世紀

ロマン主義による「民族」への関心を背景に「自国」の歴史研究がドイツ中心に発達

- ・ 12 _____ …独：史料批判の方法論で近代歴史学を確立
- ・ 13 _____ …独：普遍的なローマ法重視を批判し，法は民族固有として歴史法学主張
- ・ マルクス…弁証法的唯物論による発展段階説と階級闘争史観が歴史学に影響

20 世紀

西洋文明中心史観や，歴史の直線的な発展史観に対する疑問

- ・ 14 _____ …独：『西洋の没落』第一次世界大戦後，西洋合理主義への疑問
- ・ アナル学派…仏：事件中心の歴史学に対して「社会史」の重要性，ブローデルら
- ・ レヴィ＝ストロース…仏：『悲しき熱帯』文化人類学，構造主義

社会主義

財産権不可侵を前提に自由な経済活動による利潤追求を目指す資本主義経済が拡大すると、財産による新たな階級（クラス）の固定化など様々な問題が生じた。それに対し、資本主義が生み出した諸問題を、共同体重視の方法で解決しようとした諸思想の総称を社会主義と、ここでは仮に定義する。

空想的社会主義

自らを「科学的」と称したマルクス主義が、先行する社会主義の諸思想を命名
現実認識が不十分で理論は空想的であるとマルクス主義が批判したことが名称の由来

- 1 _____ …英：工場主として労働者の環境改善→米で共同社会建設の試み
一般工場法の成立や、労働組合、協同組合運動に影響を与える
- 2 _____ …仏：アメリカ独立革命に参加のフランス貴族。合理的産業社会を構想
実証主義のコントは弟子。スエズ運河建設のレセップスやナポレオン3世にも影響
- 3 _____ …仏：生産協同組合的組織による理想社会建設を提唱し、協同組合運動に影響

無政府主義

国民国家に対し、国家権力は必然的に個人を抑圧するものに転換するとしてこれを否定
国家権力を解体し、小共同体を基盤に相互扶助を原則とする理想社会の建設を主張

- 4 _____ …仏：「財産とは何か―盗んだものである」と定義し、政治的権威を否定
フランスの労働組合主義（サンディカリズム）に影響→アナルコ＝サンディカリズム
- 5 _____ …露：マルクスと論争し、第一インターナショナル除名
ミール（農村共同体）を社会主義の基盤としたナロードニキに影響

マルクス主義

ドイツの弁証法哲学、フランスの社会主義、イギリスの古典派経済学を批判的に統合
階級闘争による発展段階説の歴史理論、自らを科学的社会主義と称する

- 6 _____ …独：『7 _____』でイギリス資本主義の解明を目指す←リカードの影響
ヘーゲル左派のフォイエルバッハ（唯物論を主張）の影響で、唯物史観の弁証法哲学
1848年、エンゲルスと共に『8 _____』、第一インターナショナルの規約を起草
- 9 _____ …独：マルクスの協力者『共産党宣言』（万国の労働者よ団結せよ）
- 10 _____ …露：ポリシェヴィキの指導者、ロシア革命の中心
『帝国主義論』…帝国主義の原動力に独占資本主義段階の金融資本を想定
- 11 _____ …ポーランド出身の女性革命家でドイツ社会民主党に参加
12 _____ の中心→1919年蜂起で惨殺、ポリシェヴィキの独裁体質を批判

修正主義

マルクス主義の革命論を批判し、議会主義による漸進的改革を主張
第一次世界大戦後、修正主義を含む漸進的社会主義は、社会民主主義の名称が定着

- 13 _____ …独：ドイツ社会民主党に所属し、革命を否定する 14 _____ を主張
左派のローザ＝ルクセンブルクなどと論争→戦後、修正主義は社会民主党の主流に
- 15 _____ …英：社会学者で、イギリスの漸進的社会主義組織フェビアン協会の中心
- ジャン＝ジョレス…仏：漸進的社会主義を説き、ドレフュス事件でドレフュス擁護
1905年のフランス（統一）社会党結成の中心、第一次世界大戦に反対し、開戦前夜に暗殺

哲学思想

大陸合理論

フランスやオランダで発展、理性を信頼する合理主義を背景
数学的な演繹法を方法として重視

- ・ 1 _____ …仏：『方法序説』で演繹法を提唱「我思う、故に我在り」を、認識の出発点
デンマークに招かれ客死
- ・ 2 _____ …仏：数学で確率論、キリスト教信仰に立つ合理論を構想
『パンセ』…遺稿で、「人間は考える葦である」が有名
- ・ 3 _____ …蘭：『エチカ』で汎神論を説く。ユダヤ人でユダヤ教会を破門
- ・ 4 _____ …仏：数学で微分・積分の確立、単子論で宗教と科学の調和を目指す

イギリス経験論

ロジャー＝ベーコン以来の経験重視・実験重視の伝統を持つイギリスで発展
経験や実験・観察を重視し、帰納法を方法論として重視

- ・ 5 _____ …英：『新オルガヌム』で帰納法の重要性を主張
ジェームズ1世の大法官も、汚職事件で失脚
- ・ ホッブズ…英：社会契約説の提唱者 哲学では唯物論を主張
- ・ ロック…英：認識の源泉を感覚と経験とする経験論哲学
- ・ 6 _____ …英：『人性論』で懐疑論を展開 精神の实在を疑い、心を感じの束とする

ドイツ観念論

イギリス経験論と大陸合理論を批判的に統合したカントに始まる
フィヒテ以降、ロマン主義の影響を受け、ロマン主義哲学の傾向

- ・ 7 _____ …独：『純粋理性批判』などで批判哲学を展開
フリードリヒ2世と同時代人、生涯の大半を東プロイセンで過ごす
- ・ 8 _____ …独：カント哲学を継承、ナポレオン占領下のベルリンで「ドイツ国民に告ぐ」
- ・ シェリング…独：人間の自我と自然との根本的同一を説く同一哲学で、観念論を展開
- ・ 9 _____ …独：『法の哲学』などでドイツ観念論哲学を大成
歴史の展開を絶対精神の弁証法的自己展開の過程と理解→マルクス主義に影響
- ・ フォイエルバッハ…独：ヘーゲル左派の哲学者で観念論を否定し、唯物論を主張
- ・ 10 _____ …独：厭世哲学を提唱し、ヘーゲルを批判
世界の本質を盲目的な生への意志、インドのウパニシャッド哲学に影響を受ける

実存哲学

ヘーゲル哲学を批判し、一般的な世界の原理よりも個人の実存にとっての真理を重視
「世紀末」の不安な世相を背景に近代文明や科学主義への批判→実存主義哲学へ継承

- ・ 11 _____ …デンマーク：『死に至る病』主体的真理の尊重
神の前に直面する単独者としての人間を重視
- ・ 12 _____ …独：『13. _____』権力への意志を重視→超人哲学
「神は死んだ」と宣言、能動的ニヒリズムの主張

生の哲学

科学的合理主義を批判し、流動的な生きた現実を認識の出発点、仏：ベルグソン

実存主義

ヘーゲル哲学を批判し、一般的な世界の原理よりも個人の実存にとっての真理を重視
「世紀末」の不安な世相を背景に近代文明や科学主義への批判→実存主義哲学へ継承

- ・ 14 _____ …独：神を認める実存主義、限界状況を克服し、他者との交わり
- ・ 15 _____ …独：『存在と時間』神を認めない実存主義、ナチスに協力
- ・ 16 _____ …仏：『存在と無』実存主義文学を確立、アルジェリア独立運動など支援
- ・ ボーヴォワール…仏：『第二の性』「人は女に生まれない、女になっていく」

1. デカルト 2. パスカル 3. スピノザ 4. ライブニッツ 5. フランシス＝ベーコン 6. ヒューム 7. カント 8. フィヒテ 9. ヘーゲル
10. ショーペンハウエル 11. キェルケゴール 12. ニーチェ 13. ツアラトストラはこう言った 14. ヤスパース 15. ハイデッカー 16. サルトル

幸福（快樂）を人生の目的とし、社会全体の幸福（快樂）の追求を目指す
資本主義体制が確立したイギリスで、「公共善」をめぐる議論から出現

- 1. _____ …英：2. _____ を確立、「最大多数の最大幸福」の実現を政治の目的とする政治家としても活躍し、第一次選挙法改正に努力
- 3. _____ …英：功利主義を転換し、量よりも質を重視、古典派経済学も大成
「満足した豚であるよりは不満足なソクラテスである方がよい」

人間の社会的共同生活の構造や機能について研究

- 4. _____ …仏：経験によって確かめられた事柄にのみ知識の源泉を見出す実証主義哲学
科学万能の世相を背景、社会学の祖
- 5. _____ …英：功利主義と進化論を結合し、社会進化論（社会ダーウィニズム）提唱
俗化されて広がり、白人優越思想やナチスの優性論、アメリカの拝金主義に影響
- 6. _____ …独：『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』
資本主義の源流にカルヴァン主義を置く、社会学・政治学・経済史学に貢献

西欧の伝統的学問体系では、現代社会の複雑な諸問題の解決は困難と主張
人生に対する実用的な価値のみを真理とする。実用主義。アメリカで発展

- ジェームズ…米：真理は有用性において決定されるとし、プラグマティズム確立
- 7. _____ …米：知性は問題解決のための有用な道具であらねばならないと主張
教育学者としてプラグマティズムを教育に応用→小学校の「生活科」の源流

現代の諸科学

◎精神分析学…人間の「無意識」探求

- 8. _____ …オーストリア、精神分析学創始、「無意識」の発見、ナチスに追われ亡命
- ユング…スイス、人間を外向型と内向型に分類・集団無意識

◎文化人類学…人間を文化・社会の面から実証的に研究

- 9. _____ …構造主義的人类学

◎物理学…アインシュタインの相対性理論→核開発に道

- 10. _____ …ナチスにより亡命、第二次世界大戦後、ラッセル（英哲学者）と反核運動

◎医学・生物学…DNA解析などで生化学、分子生物学も発展→医療倫理の問題も

- フレミング…最初の抗生物質であるペニシリンの発見
- ワトソン・クリック…DNAの二重らせん構造を提唱
- ヒトゲノム…ヒトの遺伝子情報を解析するヒトゲノム計画が2003年に完了した

◎世界システム論…先進国と発展途上国の不平等な分業体制を論じた従属理論を発展させて成立

- ウォーラーステイン…16世紀に成立した「近代世界システム」の拡大過程として近現代史を論じる

◎ポスト＝コロニアリズム…植民地時代の負の遺産を、植民地化された地域の人々の視点で捉え直す研究

- 11. _____ …『オリエンタリズム』で西洋中心主義を批判、パレスチナ生まれのアメリカ人研究者

美術史

古典主義

ギリシア・ローマを古典として規範とし、形式美（様式美）を追求、歴史・神話など題材
18世紀末より19世紀末まで画壇の中心、絶対王世期と区別して新古典主義とも呼称

- ・ 1. _____ 「ナポレオンの戴冠」…フランス革命に参加、「書斎のナポレオン」など
- ・ アングル「トルコ風呂」…女性美を追求、オリエンタリズムの作風
- ・ 2. _____ …スペインの宮廷画家、ナポレオン軍の侵入に「1808年5月3日」

ロマン主義

古典主義の形式を批判し、個人の感性の解放主張、現実の事件など題材
19世紀前半、文学のロマン主義の思潮とも連動

- ・ ジェリコ「メデューズ号の筏」…実際にあった海難事件を題材、ロマン派創始
- ・ 3. _____ 「4. _____」…ギリシア独立戦争の支援を訴え
「5. _____」…フランス七月革命を題材

自然主義

自然風景をありのままに描写、ミレーなどバルビゾン派が、農村風景画
19世紀中頃、文学の自然主義運動とは別なので注意

- ・ コロー…フランス風景画の始まりを告げた画家
- ・ 6. _____ 「晩鐘」「落ち穂拾い」…パリ近郊バルビゾン村の農村風景を題材

写実主義

伝統絵画（古典主義）の様式性を批判し、社会の現実の描写を主張、労働者も題材
19世紀中頃、産業革命による社会の変化なども背景、文学の写実主義とも連動

- ・ ドーミエ…ルイ＝フィリップに対する政治風刺画で名声
- ・ 7. _____ 「石割」「オルナンの埋葬」…パリ＝コミューンにも参加
- ・ 8. _____ 「考える人」「カレーの市民」…写実的な彫刻で人間の内面を描写

印象派

ルネサンス以来の遠近法を相対化し、主観的・感覚的表現を模索、光の描写へ
19世紀後半、浮世絵からも影響←1867年のパリ万博前後からジャポニズムの風潮

- ・ 9. _____ 「草上の昼食」「オランピア」…スキャンダラスな題材、平面的描写、印象派の先駆
- ・ 10. _____ 「睡蓮」「印象・日の出」…印象派運動を開始
- ・ 11. _____ 「ムーラン＝ド＝ラ＝ギャレット」…親しみやすい人物画
- ・ 12. _____ 「踊り子」の連作など…一瞬の動きを描写、パステル画も有名

後期印象派

印象派の技法を継承しつつ、自然や物体の根源的形態の把握を追求
19世紀末、現代絵画に大きな影響

- ・ 13. _____ 「サン・ヴィクトワール山」…形態追求で、現代絵画の出発点
- ・ 14. _____ 「タヒチの女」…葛飾北斎の影響・日曜画家からタヒチに移住
- ・ 15. _____ 「太陽」「ひまわり」…オランダ人で強烈な色彩

新芸術

アール＝ヌーボー 19世紀末から20世紀初期にかけて流行の装飾様式で曲線や曲面多用

- ・ ガレ…アール＝ヌーボーを代表するフランスのガラス工芸家
- ・ クリムト…オーストリアのアール＝ヌーボーを代表する画家、装飾画家

野獣派

20世紀初期、大胆な形態の単純化と強烈な色彩が特徴、フランス中心

- ・ 16. _____ 「ダンス」…ピカソと共に20世紀絵画を代表
- ・ ルオー…聖書を題材に現代宗教絵画の巨匠・ステンドグラスの技法

立 体 派	20 世紀初期、立体の組み合わせで形態を表現（セザンヌの影響）、キュビズム ・ 1 _____ 「 2 _____ 」 …スペイン出身でスペイン内戦に際し、「ゲルニカ」を描く
ダ ダ	第一次世界大戦中から戦後にかけてヨーロッパ各地で、既成の芸術の急進的な破壊 ・ デュシャン…既存の便器に署名し展覧会出品、芸術創造の意味を問題に
超 現 実 主 義	フロイトの「無意識」説の影響、フランスの詩人ブルトンが理論的指導者 ・ ダリ…スペインの画家で超現実主義（シュルレアリスム）絵画の代表者 ・ エルンスト…ドイツ人・ダダから出発し、コラージュ技法を開発
ポ ッ プ ア ー ト	・ ウォーホル…広告・報道写真も素材「キャンベルスープ」「マリリン・モンロー」

音楽史

バ ロ ッ ク 音 楽	17 世紀初めから 18 世紀中葉の西洋音楽の総称で劇的表現が特徴、オペラの原型、器楽成立 ・ 3 _____ (1685-1750) …ドイツの音楽家、教会音楽や器楽曲を多く作曲 「音楽の父」で一族に多くの音楽家を輩出でも有名 ・ 4 _____ (1685-1759) …ドイツ出身でイギリスで活躍、オペラなど劇場用音楽「音楽の母」
古 典 派 音 楽	1730 年代から 1810 年代の西洋音楽の総称、ウィーンを中心に展開 ・ 5 _____ (1732-1809) …オーストリアの作曲家、多くの交響曲、弦楽四重奏曲を作曲「交響曲の父」 ・ 6 _____ (1756-1791) …オーストリアの作曲家、軽快で優美 幼少時より神童と賞賛、ヨーゼフ 2 世時代のウィーンで活躍 ・ 7 _____ (1770-1827) …ドイツの作曲家、古典派音楽を集大成 ロマン派音楽に道を開く、政治的には自由主義者 交響曲「英雄」は本来ナポレオンに捧げるため作曲されたと言われる
ロ マ ン 派 音 楽	1800 年代初頭から 1900 年代までの、古典派音楽と近・現代音楽の間の時代の傾向 ・ 8 _____ (1797-1827) …オーストリアのロマン派音楽家で近代歌曲の創始者 ・ シューマン (1810-56) …ドイツのロマン派音楽家で近代的ピアノ技術を開拓 ・ ベルリオーズ (1803-69) …フランスのロマン派音楽家で代表作は「幻想交響曲」 ・ 9 _____ (1810-49) …ポーランドのロマン派音楽家、「ピアノの詩人」、パリで活躍 七月革命の影響を受けたポーランド独立蜂起の失敗を知り、「革命」を作曲 ・ 10 _____ (1813-83) …ドイツのロマン派音楽家で楽劇の創始者 ドイツ民族主義に影響、ヒトラーも賞賛 ・ 11 _____ (1813-1901) …イタリアの作曲家でイタリアオペラの形式を完成 「ナブッコ」はイタリア統一運動の象徴「アイーダ」はスエズ運河開通を記念して作曲 ・ 12 _____ (1858-1924) …イタリアオペラの作曲家、日本を題材に「13 _____」
国 民 楽 派	19 世紀後半、自分の生まれた地域の音楽の伝統を取り込む ・ 14 _____ (1824-84) …15 _____ の作曲家で民族運動に参加、「わが祖国」 ・ ドヴォルジャーク (1841-1904) …チェコの作曲家「新世界より」 ・ 16 _____ (1840-93) …ロシア、バレエ曲「白鳥の湖」、「悲愴」
現 代 音 楽	印象派音楽や十二音音楽などから現代音楽へ ・ 17 _____ (1862-1918) …フランスの作曲家で印象派音楽を創始「牧神の午後への前奏曲」 ・ シェーンベルク (1874-1951) …十二音音楽、ウィーン出身のユダヤ人でナチス台頭でアメリカに亡命 ・ ストラヴィンスキー (1882-1971) …ロシア出身「火の鳥」「春の祭典」

1. ピカソ 2. ゲルニカ 3. バッハ 4. ヘンデル 5. ハイドン 6. モーツァルト 7. ベートーヴェン 8. シューベルト 9. ショパン
10. ヴァーグナー 11. ヴェルディ 12. ブッチーニ 13. 蝶々夫人 14. スメタナ 15. チェコ 16. チャイコフスキー 17. ドビュッシー

漢代までの文化

文化の特徴

黄土地帯に発生した黄河文明は、邑と呼ばれる集落での氏族共同体による共同農業を基盤としたものであり、宗族と呼ばれる血縁集団は、親族関係の秩序や祭祀のしかたを定めた宗法によって氏族のまとまりを維持した。社会関係の上下秩序も、血縁関係の上下秩序を反映し、礼と呼ばれる生活規範によって、維持された。周における封建制度も、このような氏族的な血縁秩序を前提としたものであった。

ところが、春秋時代中期以降、鉄製農具や牛耕の普及によって、小家族単位でも自立した農業経営が可能となり、氏族の統制がゆるんだ。また、生産性の向上によって商工業が盛んとなり、財力を蓄えた大商人も出現した。そのため、封建制度の基盤であった血縁的・世襲的身分秩序が動揺し、個人の能力が重視されて実力本位の風潮が現れた。戦争が続かなかで、富国強兵策をとる各国は、積極的な人材登用を行い、この傾向を助長した。

こうした社会変化に対し、新しい秩序のあり方を模索する思想家や学派が登場する。そして諸子百家と総称された彼らの中で漢代になって官学の地位を確立するのは、周代の血縁秩序を理想とした儒学であった。

諸子百家

世襲的秩序が動揺した春秋戦国時代に出現し、新しい社会秩序を模索した一群の思想家や学派を諸子百家と総称する。そのうち儒家が後世に最も大きな影響を与えたが、道家や法家の思想もその後の中国の社会思想の重要な源となっており、また論理学の名家や兵法の兵家、外交策を説いた縦横家など、多様な分野で思想学問の基礎が築かれた。

孔子を祖とし、家族道徳を基盤に社会秩序の再建を説く 西周の時代を理想

漢代に官学とされ、後世の諸王朝の権威の正統化にも寄与

- ◎ 1. _____ (前 551- 前 479)
- ・ 2. _____ のうち 3. _____ の祖で家族道徳の確立から社会秩序の再建を展望
→修身・齐家・治国・平天下
 - ・ 孝(親に対して)と悌(兄に対して)の実践で 4. _____ (いつくしみ) を完成
 - ・ 西周の時代を理想とし、周礼・周制復活を目標
- ◎ 『 5. _____ 』…魯の年代記で孔子が編纂と伝えられ、儒学の經典に
- ◎ 『 6. _____ 』…死後弟子がその言行を編纂したもので、朱子によって四書とされる
- ◎ 7. _____ (前 372- 前 289)
8. _____ 説と王道政治による徳治、易姓革命を理論化し、古代の理想の土地制として井田制紹介
- ◎ 9. _____ (前 298- 前 238 頃)
10. _____ 説を唱え、 11. _____ による統治を強調→法家に影響し、門下に韓非・李斯
- ◎ 12. _____ …漢代から儒学の經典
- 『春秋』…魯の年代記。注釈書(とされていた)に『春秋左氏伝』や『春秋公羊伝』
- 『 13. _____ 』…堯・舜から夏・殷・周三代の帝王の事蹟を編纂
- 『 14. _____ 』…華北最古の詩集
- 『 15. _____ 』…占いの書
- 『 16. _____ 』…礼に関する文献をまとめたもの
- ◎ 17. _____ …宋代に朱子が重視
- 『論語』『孟子』『大学』『中庸』(「大学」と「中庸」は、『礼記』の一編)

道家

儒家の礼を人為的な虚礼として批判し、自然のままで作意のない無為自然を主張
魏晋南北朝の混乱期に流行し、清談の風潮や道教に影響を与える

- ◎₁ _____ (前 5-4C) …₂ _____ の祖
儒家の礼を排し₃ _____ を説いて、万物を貫く原則である「道」に従うことを主張
◎₄ _____ (前 4-3C)
世俗からの離脱を説き、自由に遊ぶ真人を理想

墨家

儒家の仁を差別的な愛として批判し、血縁によらない無差別の愛である兼愛を主張
非攻を主張し城郭防衛に活躍も、末期には一君万民による平和実現のため秦の統一に協力

- ◎₅ _____ (前 5-4C) …₆ _____ の祖
・₇ _____ 説…仁を差別愛として批判し、血縁によらない無差別の愛を説く
・₈ _____ …侵略戦争を否定し、小国家防衛のための軍事技術集団として活動
・交利…相互扶助を主張
・尚賢…下級の身分のものからも人材を登用することを主張

法家

法を基準に、信賞必罰による統治を主張した一群の思想家や政治家の総称
秦は商鞅や李斯など法家による改革を実施して中央集権化と強国化に成功

- ◎₉ _____ (?- 前 338)
秦の₁₀ _____ に登用・郡県制で富国強兵の改革・什伍の制（連帯責任制）による農民統制
◎₁₁ _____ (?- 前 233)
荀子の弟子で₁₂ _____ の理論を確立も、弟弟子の李斯に暗殺と伝えられる
◎₁₃ _____ (?- 前 210)
荀子の弟子で始皇帝に登用され、全国への郡県制の施行を献策、丞相となる

縦横家

弁舌の才を生かして諸侯に登用され、外交に活躍

- ◎₁₄ _____ (?- 前 317)
秦に対抗し、六国連合の₁₅ _____ 策を説いた₁₆ _____
◎₁₇ _____ (?- 前 310)
秦と六国が個別に連合の₁₈ _____ 策を説き、合従策を破った縦横家

名家

名前（名）とモノ（実）との関係を追求した論理学の一派

- ◎₁₉ _____ (前 320 頃 - 前 250 頃) …₂₀ _____ の代表
記号論（意味論）的立場で、白馬と馬の違いを論じた白馬非馬論で有名

兵家

用兵を論じた兵法家・軍学者の一派

- ◎₂₁ _____ ・呉子など

陰陽家

天地万物を陰と陽に分け、その根本を五行とし、世界のなりたちを説明

- ◎₂₂ _____ (前 305- 前 240) …₂₃ _____ の代表
₂₄ _____ 説と₂₅ _____ 説を統合（陰陽五行説）し、五行説によって王朝交替も説明

農家

国の根本を農業とし、君主も人民もともに農耕すべしと主張、許行が代表

1. 老子 2. 道家 3. 無為自然 4. 莊子 5. 墨子 6. 墨家 7. 兼愛 8. 非攻 9. 商鞅 10. 孝公 11. 韓非子 12. 法家 13. 李斯
14. 蘇秦 15. 合従 16. 縦横家 17. 張儀 18. 連衡 19. 公孫竜 20. 名家 21. 孫子 22. 鄒衍 23. 陰陽家 24. 陰陽 25. 五行

漢代の儒学

公羊学

『春秋』の伝のうち『公羊伝』を重視し、孔子の思想を拡張解釈→清末に流行

◎₁_____ (前 176- 前 104)

◎公羊学開始、武帝に献策して儒学の官学化（₂_____の設置）の契機をなしたことで重要

訓詁学

経書の字句の解釈を重視し唐代まで儒学の主流→清の考証学によって再評価

◎₃_____ (127-200)

後漢末に₄_____を確立し、後世に大きな影響 党錮の禁に連座し、在野の学者として活動

漢代の宗教

太平道

後漢末に張角が符水と呪文による病氣治療を行い創始。黄巾の乱を開始

◎₅_____ (? -184)

₆_____を創始し、漢にかわる王朝の建設を唱え信者に黄色の頭巾をかぶせ 184 年₇_____

五斗米道

別名天師道。後漢末に四川地方で創始の道教の源流の宗派で祈祷による病氣治療を行う

◎₈_____ (? -184)

₉_____を創始。後世天師と称される。入門者に米五斗を出させたことから五斗米道の名

仏教

1 世紀頃西域より伝わるも、漢の思想統制と仏典の翻訳困難で一般には普及せず

文字の歴史

殷

₁₀_____…占卜の内容を亀甲や獣骨に刻んだ文字、金属器に刻んだ文字は ₁₁_____

秦

₁₂_____…秦までの漢字の書体の総称で、秦による文字統一の書体を小篆と称す

漢

₁₃_____…漢の正式書体で、当初木簡や竹簡に記した

◎ ₁₄_____ (? -121)

₁₅_____の発明者とされてきた後漢の宦官。現在では製紙法の改良・普及者とされる

◎『₁₆_____』 最古の漢字字書。字形による漢字分類の開始。後漢の許慎が著す

文学と歴史

文学

華北最古の詩集として『詩経』、江南の詩集として『楚辞』が編纂

◎『₁₇_____』…五経の一。周代の黄河流域の詩歌を集めたもので、恋愛詩が約半分を占める

◎『₁₈_____』…江南最古の詩集、編纂は漢代。楚の王族で憂国の詩人 ₁₉_____の詩も所収

歴史

年代別に編纂の ₂₀_____と、帝王の年譜（紀）と伝記（伝）からなる ₂₁_____

◎『₂₂_____』…五経の一。編年体で著された魯の年代記で、孔子の編と考えられた

◎『₂₃_____』…₂₄_____の編。紀伝体を創始。伝説の黄帝から同時代の武帝までの歴史

◎『₂₅_____』…₂₆_____の編。王莽時代を含む前漢一代の史書で、後世の正史の範となる

1. 董仲舒 2. 五経博士 3. 鄭玄 4. 訓詁学 5. 張角 6. 太平道 7. 黄巾の乱 8. 張陵 9. 五斗米道 10. 甲骨文字 11. 金文 12. 篆書
13. 隸書 14. 蔡倫 15. 製紙法 16. 説文解字 17. 詩経 18. 楚辞 19. 屈原 20. 編年体 21. 紀伝体 22. 春秋 23. 史記
24. 司馬遷 25. 漢書 26. 班固

大唐西京千

顏真卿

十七日先書

王羲之

篆書

隸書

楷書

天地天地
天天天地

魏晉南北朝と隋唐の文化

文化の特徴

魏晉南北朝期は分裂のと混乱の時代であり、社会不安を背景に人々は新たな価値観や宗教に救いを求めた。すでに後漢末の時代から、西晋の時代にかけて世俗を離れた清談が流行し、五胡十六国時代には、仏教が中国社会に普及した。北朝の始まりとなった北魏では、仏教に対抗して寇謙之が道教教団を確立した。ここに儒教・仏教・道教の中国3教が確立し、後の時代へと受け継がれていく。

江南地域は華北からの流入もあって人口が増大し、荘園の開発が進んだ。九品中正法によって門閥を形成した貴族は、荘園の経営によって富を蓄積した。その基盤の上に、江南には六朝文化と称される華やかな貴族文化が形成された。東晋では書聖王羲之、画聖顧恺之、田園詩人陶淵明が活躍し、後世に大きな影響を与えていく。また、6世紀なかばに突厥がモンゴル高原から中央アジアに至る地域を制圧して西アジアのササン朝文化圏と東アジアの中国文化圏を結び、イラン系のソグド人などが盛んに往来するようになったことで、南北朝から隋唐代の文化は、ササン朝文化の影響を受けることになった。

一方で、唐を中心とする朝貢冊封体制が東アジア地域に確立すると、各国からの留学生が長安に集い、唐の文化や

思想・宗教

清談

後漢末から西晋にかけての社会の混乱を背景に、老荘思想の影響を受けた脱俗の談論

- ◎₁ _____
阮籍や嵇康など、魏から西晋への転換期に世俗を離れ儒教の礼教主義を批判し₂ _____を行う

儒教

後漢以来の訓詁学が中心も、魏晉南北朝期には一般には不振
唐代には『五経正義』による解釈の統一が、学問としての固定をまねく

- ◎₃ _____ (574-648)
唐の太宗の命により顔師古らと五経の注釈書『₄ _____』を編纂、『隋書』も編

道教

黄帝・老子を教祖とし、不老長生をめざす中国の宗教で五斗米道（天師道）がもと
陰陽五行説や老荘思想、神仙思想を加味し、北魏で寇謙之が教団を組織化（寺院＝道観、僧＝道士）

- ◎₅ _____ (363-448)
天師道を改革し、新天師道を確立。北魏₆ _____の信仰を得て「三武一宗の法難」の最初の弾圧

4世紀に五胡十六国時代の華北で普及し、江南でも貴族社会に受容
中国僧の渡印によって教義研究も進み、やがて禅宗や浄土宗などの中国仏教も発展

【魏晉南北朝期】

仏教

- ◎₇ _____ (₈ _____) (? -348)
310年西域亀茲（クチャ）から訪中し、洛陽で布教、多くの仏教寺院を建立し道安など弟子を育成
- ◎₉ _____ (₁₀ _____) (350-409)
亀茲の人で、仏典の翻訳に功績
- ◎₁₁ _____ (ダルマ) (5-6世紀頃)
インドのバラモンで6世紀初頭来中し、中国に禅宗を伝えたと言われる
- ◎慧遠 (334-416)
東晋の僧。道安の弟子。鳩摩羅什と書簡によって意見交換。白蓮社を結成し中国浄土宗の祖師
- ◎₁₂ _____ (337-422)
東晋の僧。陸路グプタ朝チャンドラグプタ2世期のインドに赴き海路帰国『₁₃ _____』
- ◎石窟寺院 ₁₄ _____ (甘粛)・₁₅ _____ (平城付近・グプタ美術の影響)・₁₆ _____ (洛陽付近)
- ◎南朝仏教 貴族の間に流行し、特に梁の武帝時に盛ん

【隋・唐期】

◎1 (602-664)

- ・ 唐の僧。往復とも陸路でヴァルダナ朝ハルシャ・ヴァルダナ期のインド
- ・ ナーランダ僧院で学び、帰国後仏典の翻訳『2』

◎3 (635-715)

- ・ 唐の僧。往復とも海路で分裂期のインドへ。スマトラ島シュリーヴィジャヤのパレンバンに滞在
- ・ 『4』

◎中国仏教 念仏を重視する浄土宗と、座禅を重視する禅宗が中国で独自の発展

ゾロアスター教・ネストリウス派・マニ教・イスラーム教などが伝来

◎5 教 (6 教)

イラン系ソグド人の交易活動での往来にともない、中国へは南北朝期に伝来

◎7 教 (8 教)

635年ササン朝の僧阿羅本によって唐に伝えられる。8世紀大秦景教流行中国碑を建立

◎9 教 (10 教)

則天武后後に唐に伝わる

◎清真教 (イスラーム教, 回教)

中国に伝播したイスラーム教を清真教, モスクを清真寺と称す

魏晋南北朝期に発展した定型詩が唐代に大成

【魏晋南北朝期】

◎₁ _____ (365-427)

東晋の田園詩人で、官を辞して隠棲する時「₂ _____」を著す。散文に「桃花源記」

◎₃ _____ (385-433)

南朝宋の詩人で山水詩の祖。東晋の名門出身で不遇の生活の後、謀反を疑われ刑死

【唐】

◎₄ _____ (701-762)

玄宗の宮廷詩人で、詩仙と称された。奔放な詩風で酒を好み、奇行も多い

◎₅ _____ (712-770)

詩聖。農民兵の苦難を描写する「兵車行」や安史の乱後を題材とした「春望」で有名

◎₆ _____ (701-761)

詩仏。情景描写に優れ、詩中に画ありと賞賛。実際に画にも優れ、後世南画の祖とされる

◎₇ _____ (772-846)

玄宗と楊貴妃を題材とした「₈ _____」を著す

六朝文化では技巧的な₉ _____ が流行、唐後期より古文復興運動

◎₁₀ _____ (501-531)

梁の武帝の皇太子で、周から梁までの文章・詩賦の秀逸なものを集めた『₁₁ _____』を編

◎₁₂ _____ (768-824)

四六駢儷体を批判し、漢代の₁₃ _____ の復興を唱え、後世唐宋八大家に数えられる、仏教批判

◎₁₄ _____ (773-819)

中唐の詩人・文章家で韓愈とともに古文復興を唱える。唐宋八大家

東晋の王羲之の出現により、芸術としての書が確立

◎₁₅ _____ (501-531)

東晋の書家で書聖。息子の王献之と楷書・行書・草書の書体を確立。「蘭亭序」

◎初唐三大

欧陽詢・虞世南・褚遂良の三人でいずれも唐の太宗に仕えた

◎₁₆ _____ (709-785)

肉太で力強い書風、安史の乱で義勇軍を組織し奮戦

東晋の顧愷之が中国画道の祖

◎₁₇ _____ (501-531)

東晋の画家。画聖。「₁₈ _____」

◎閻立本 (?-673)

唐の太宗に仕えた唐初の画家・政治家。「歴代帝王図鑑」

◎₁₉ _____ (生没年未詳)

唐の玄宗に仕えた画家。山水画に新たな画風、速筆で知られる

◎李思訓 (651 頃 -718)

唐の玄宗に仕えた画家で、唐室の一族。山水画に優れ、細密な画風

◎₆ _____ (701-761)

李白・杜甫に並び称される詩人。画では山水画に優れ、後世南画の祖とされる

その他

実用書

魏晋南北朝期，特に北朝において実用的な文化が生まれ，実用書が編纂

- ◎『1_____』急性の熱病への対処法を記した医学書。西晋で成立し漢方医学の聖典
- ◎『2_____』北魏の酈道元が著した歴史地理書。河川の水系ごとに古跡や伝承など地域を紹介
- ◎『3_____』北魏の賈思勰編纂の農書。古来の農業技術を集大成し，乾地農法も紹介

日中交流

唐を中心とする東アジア文化圏が成立し，留学生などによって唐の文化が日本にも伝播

- ◎4_____…唐から日本にわたり，戒律を授けた高僧
- ◎5_____…唐の玄宗に仕えた日本からの留学生，李白と交流，安南で節度使

宋・元の文化

文化の特徴

唐末五代の武断政治の混乱期に、魏晋南北朝以来の貴族階層は消滅した。宋代には文治主義のもとで新興地主（形勢戸）が、科擧の合格によって用役の一部を免除される特権を持つ官戸となることを目標に、士大夫（読書人）の中核を形成し、貴族にかわって社会の支配層を形成した。以後の王朝では、この士大夫層が文化の担い手となっていく。

宋代の文化は国際的な貴族文化であった唐代の文化に対して、中国的な特徴を強めた士大夫の文化であったことが特徴である。儒学では、訓詁学に代わって宇宙論を導入した宋学が台頭した。一方では、都市の経済的繁栄を背景に都市庶民を担い手とした詞や雑劇も流行した。

元代にはイスラーム文化圏と中国文化圏とともに支配したモンゴル帝国のもとで儒学は相対化されたが、宋代を継承した都市の繁栄を受けて、庶民文化はさらに発展した。また、宋代の三大発明（火薬・磁針・印刷術）や中国絵画の技術が西方に伝播する一方、イスラーム世界の数学や天文学の刺激を受けて授時暦が制定されるなど、文化的にも交流の時代となった

思想・宗教

宇宙の始まりを説く宇宙論など形而上学を儒学に導入し、実践倫理と結合

- ◎₁ _____ (1017-1073)
『₂ _____』…陰陽五行説などを取り込み、太極説で宇宙論を確立→程顥・程頤兄弟に継承
- ◎₃ _____ (朱子) (1130-1200)
・南宋の儒学者で宋学を大成し朱子学、理気二元説と₄ _____ 説を説く
・₅ _____ (君臣の別を強調) と₆ _____ (中華秩序) を強調
- ◎四書（「論語」「孟子」「₇ _____」「₈ _____」）を重視、「大学」と「中庸」は「礼記」の一編
- ◎₉ _____ (陸象山) (1139-1192)
理気一元説と₁₀ _____ を唱え、朱熹の主知的哲学に対抗

宋学

金支配下の華北で改革道教の全真教が創始、従来の道教は江南で正一教

- ◎₁₁ _____ …₁₂ _____ が創始、迷信的な呪術を排し、儒仏道三教の一致を説いて道教を革新
金支配下の華北に広がり、元帝室の保護を受けて流行
- ◎正一教…全真教に対し、従来の道教（天師道）は江南中心に正一教として存続

道教

白蓮教など民間信仰が発展、元代にはチベット仏教やカトリックも伝播

- ◎₁₃ _____ …12世紀頃南宋で成立、浄土宗の影響を受け、当初は阿弥陀信仰
₁₄ _____ 下生信仰に代わり、民衆に広がる→元末の紅巾の乱、清朝後期の白蓮教徒の乱
- ◎₁₅ _____ …臨済宗や曹洞宗が発展し、日本へも伝播、士大夫層中心に広がる

仏教など

文芸

士大夫の教養として詩・書・画。文は唐代からの古文復興運動が完成

- ◎₁₆ _____ (1007-1072)
宋代の唐宋八大家の代表で、古文復興を決定。紀伝体の史書の『新唐書』『新五代史』編纂
- ◎₁₇ _____ (蘇東坡) (1036-1101)
・王安石の新法に反対し左遷、赤壁の戦いの地に遊び、「₁₈ _____」を著す
・文の名手でもあり、父の洵、弟の轍とともに八大家。他の二人は王安石と曾鞏
- ◎₁₉ _____ (1019-1086) …王安石の新法に反対した旧法党の代表
『₂₀ _____』前403年の戦国時代から、五代末までを編年体で著した歴史書

詩・文・歴史

1. 周敦頤 2. 太極図説 3. 朱熹 4. 性即理 5. 大義名分 6. 華夷の別 7. 大学 8. 中庸 9. 陸九淵 10. 心則理
11. 全真教 12. 王重陽 13. 白蓮教 14. 弥勒 15. 禪宗 16. 歐陽脩 17. 蘇軾 18. 赤壁の賦 19. 司馬光 20. 資治通鑑

北宋の徽宗は画院を振興し、写実的で細密な院体画が発展、元代からは文人画が主流に

【院体画】

◎₁_____ (1082-1135)

- ・ 1127 年息子の欽宗とともに靖康の変で金に連行された北宋の皇帝・上皇
- ・ 画院 (翰林图画院) を振興し、自らも₂_____ の名手で風流天子と称された

◎夏桂 (生没年未詳, 12 世紀末から 13 世紀初めに活躍)

南宋後期の院体画の画家で、院体山水画に新境地を開く→日本の雪舟に影響

◎馬遠 (生没年未詳, 12 世紀末から 13 世紀初めに活躍)

南宋後期の院体山水画を夏桂と代表、室町山水画の成立に影響

◎梁楷 (生没年未詳, 13 世紀初めに画院の最高位に登る)

南宋後期の画家で、山水画・人物画にともに秀でる

【文人画】

◎李公麟 (1049-1106)

北宋後期の官僚・文人画家。退官後、竜眠居士と号し、作画に専念

◎米芾 (1051-1107)

北宋の書家・文人画家。点描を用いた独自の山水画の技法を開発

◎牧谿 (生没年未詳, 宋末元初の 13 世紀後半に活躍)

南宋の禅僧・文人画家。日本で宋元第一の画家と高く評価

◎趙子昂 (趙孟頫, 1254-1322)

元の官僚・文人画家。宋の帝室の末裔、元代の文人山水画を開拓

◎黄公望 (1269-1354)

元末四大家の一。四大家中の最年長者で、50 才頃画作を開始、明清山水画に影響

◎呉鎮 (1280-1354)

元末四大家の一。一人、他の大家と交流を持たず地方の文人画家として生涯を送る

◎倪瓚 (1301-1374)

元末四大家の一。簡潔質素で、気品の高い画風

◎王蒙 (1308-1385)

元末四大家の一で明初まで活躍。趙子昂の外孫。倪瓚と対照的に複雑精妙な画風

都市の発展により、詞の流行。宋代の雑劇は元代の元曲に発展

◎₃_____ …歌謡文学で、歌うことを前提とした楽曲の歌詞、婦女子にも流行

◎₄_____ …宋代には風刺や道化、諧謔を主とする単劇や歌舞だったが、元代に歌劇として発展

◎₅_____ …元代に本格的な演劇として発展した雑劇で、北劇 (北曲) とともに称す

『₆_____』王実甫作、北曲の代表作、旧家の娘が親の決めた婚約者を拒否し書生と恋を成就

『₇_____』馬致远作、北曲、漢の王昭君が匈奴に嫁いだ故事に取材

『₈_____』高明作、元末の作品で南曲の祖とも。一人の夫と、新旧二人の妻の夫婦愛

宋代の三大発明は、元代の東西交流で西方に伝播

◎宋代三大発明…火薬・羅針盤・活版印刷術

火薬の原料のうち硫黄は、日本から日宋貿易で輸入、博多の繁栄

◎₉_____ …₁₀_____ が、元代にイスラーム天文学、数学に刺激され作成

→江戸時代の ₁₁_____ (渋川春海作成) に影響

画

庶民文化

科学

明・清の文化

文化の特徴

明清期の文化も、宋以来の士大夫と都市庶民の文化の性格を継承している。特に明代後期になると、海外交易の活発化によって銀が流入したこともあって貨幣経済が進展し、都市には富裕な商人や郷紳が集まって庭園の建設や骨董の収集などの文化的生活を好み、書・画・詩などの士大夫文化の担い手となった。また、木版印刷の普及によって書物の出版も増え、明代の四代伝奇小説や、清代の『紅樓夢』などの小説をより多くの人々が享受できるようになった。庶民の娯楽としての戯曲も、都市の繁華街で盛んに上演された。

思想面では、明代に官学となった朱子学への外的な学問研究重視の立場を批判して、心の修養を重視する陽明学が16世紀初頭におこり、庶民層にも広がったが、明末清初の動乱を経て、形而上学的な朱子学や陽明学を空論として批判し、事実に基づく研究によって現実社会の秩序回復を説く考証学が台頭し、清代の学者たちに継承されていった。事実重視の風潮は一方では科学技術に関する関心を高め、明末には『農政全書』『本草綱目』『天工開物』などの科学技術書が出版された。このような科学技術への関心は、明末清初のイエズス会宣教師によるヨーロッパ科学の紹介とも連動していたのである。

思想・宗教

陸九淵の心即理説を王陽明が継承し、知行合一を説く、明代に流行

陽明学

- ◎₁ _____ (1472-1528) 『伝習録』…南宋の陸九淵の「心即理」説を継承
 - ・ 本来人間が持っている善良な心にもどり(致良知), その判断に従っての行動(₂ _____) を主張
 - ・ 形骸化した朱子学を批判→学者のみならず庶民層にも受容されて広がる
- ◎₃ _____ (李贄) (1527-1602)
 - ・ 陽明学左派で、心の最も純粋な部分を「童心」とし、尊重の一方、礼教主義を偽善として攻撃
 - ・ 経書の重視を批判し、水滸伝などを称揚、獄中で自殺

経世致用(社会に役立つ)の学の意で、考証学の発展や技術書刊行の活発化につながった

実学

- ◎ 『₄ _____』…₅ _____ の撰、農政・農業関係の総合書
- ◎ 『₆ _____』…₇ _____ の著、本草(薬学)の総合書で、薬物とその処方を紹介
- ◎ 『₈ _____』…₉ _____ の著、産業技術の図版入り解説書
- ◎ 『₁₀ _____』…徐光啓らがイエズス会士の協力で作成の暦書。清で修正され「時憲暦」

明末清初に空理空論化した陽明学や朱子学を批判し、経世致用の学を唱え、実証研究を重視
清中期には清朝の思想弾圧で経世致用の学風を失うも、実証研究で歴史学や音韻学に成果

考証学

- ◎ ₁₁ _____ (1613-1682) …『日知録』実証主義による経世致用を唱え清朝考証学の基礎を築く
明の遺臣として清に仕えず、学問・叙述に専念
- ◎ ₁₂ _____ (1610-1695) …『明夷待訪録』君主専制を批判し清で禁書→清末変法運動に影響
東林派官僚の子として生まれ、復明運動に義勇軍を組織し参加、中国のルソー
- ◎ 王夫之(1619-1692) …顧炎武・黄宗羲とともに明末清初の三大思想家で、華夷思想を強調
郷里の湖南省の山中にこもり著述に専念
- ◎ ₁₃ _____ (1728-1804) …『二十二史考異』清朝歴史学の方法論を確立
- ◎ 戴震(1723-1777) …『孟子字義疏証』考証学の泰斗で訓詁の学を重視
朱子学の理中心の哲学を批判し、人間の欲望を肯定する気の哲学を主張
- ◎ 段玉裁(1735-1815) …『設文解字注』戴震の弟子で音韻・文字研究

『春秋』の伝のうち、「公羊伝」を重視し、孔子の思想の拡張解釈を特徴とする学派

公羊学

- ◎ 魏源(1794-1856) …『海国図志』海外諸事情の紹介で、幕末の日本で吉田松陰などに影響
公羊学に基づき経世を主張、林則徐の幕友でアヘン戦争にも参加し、晩年は太平天国とも戦う
- ◎ ₁₄ _____ (1858-1927) …『大同書』孔子を平等社会実現を説いた革命的思想家とする→変法運動

1. 王陽明 2. 知行合一 3. 李卓吾 4. 農政全書 5. 徐光啓 6. 本草綱目 7. 李時珍 8. 天工開物 9. 宋応星 10. 崇禎暦書
11. 顧炎武 12. 黄宗羲 13. 錢大昕 14. 康有為

文芸

編纂事業

明の永楽帝期と清朝盛期に実施、士大夫（読書人）層の懐柔政策の側面もあり

- ◎1 _____ (位 1402-1424) 靖難の役で即位したため、帝位篡奪の批判を懐柔する必要があった
『2 _____』…一大類書（事項別に図書から記事を抜き取って説明した一種の百科事典）
『3 _____』…『四書』の注釈書。科挙の解釈の基準となる
『4 _____』…『五経』の注釈書。科挙の解釈の基準となる
『5 _____』…宋学の性理、理気の学説を集成
- ◎清の編纂事業…懐柔政策の一環
『6 _____』…康熙帝期に編纂の漢字字典
『7 _____』…康熙帝から雍正帝期に完成の類書、古今の図書から抜粋
『8 _____』…乾隆帝欽定の中国文献一大叢書、清朝に都合の悪い書籍は禁書に指定
『五体清文鑑』…清帝国の主要五言語（漢語・満州語・モンゴル語・チベット語・トルコ系言語）を対照させた辞書

庶民文化

庶民の娯楽としての小説や演劇が発展

- ◎四大奇書…明代に成立した『水滸伝』『三国志演義』『西遊記』『金瓶梅』
『9 _____』…元の施耐庵作を明代に羅貫中がまとめる。山東の梁山泊に拠る 108 人の豪傑
『10 _____』…11 _____ 作。三国時代を背景とした英雄豪傑たちの活劇
『12 _____』…呉承恩作。玄奘のインド旅行を題材に孫悟空たちの活躍
『13 _____』…万暦帝期。水滸伝中のエピソードをもとに豪商西門慶と毒婦潘金蓮の愛欲生活
→当時の急激な経済成長下の政治腐敗と富裕層の頹廃を活写
- ◎清代の小説
『14 _____』…曹雪芹作。貴公子宝玉と 12 人の美しい従姉妹が織り成す名家の栄枯盛衰
『15 _____』…吳敬梓作。科挙の矛盾と読書人の腐敗墮落を風刺
『16 _____』…蒲松齡作。民間説話に取材した短編怪異小説集
- ◎戯曲
『牡丹亭還魂記』…明代の戯曲。湯顯祖作の恋愛伝奇劇
『17 _____』…清代の戯曲。洪昇作。玄宗と楊貴妃の恋愛を題材
『桃花扇伝奇』…清代の戯曲。孔尚任作。明滅亡時の史実に取材した文人と名妓の悲恋

ヨーロッパ文化の紹介

イエズス会士

知識人階級である士大夫に布教するため、イエズス会士が西洋科学を紹介

- ◎18 _____ (利瑪竇 1552-1610) イタリア出身、イエズス会による中国布教を開始
19 _____ (中国最初の世界地図) 作成、徐光啓を入信、『20 _____』(幾何学紹介)
◎21 _____ (湯若望 1591-1666) ドイツ出身、『崇禎曆書』、時憲曆の作成
◎22 _____ (南懷仁 1623-1688) ベルギー出身、アダム＝シャルを補佐し暦法や大砲鑄造
◎23 _____ (白進 1656-1730) フランス出身、ルイ 14 世の命で派遣、康熙帝に仕え『康熙帝伝』
24 _____ (康熙帝の命で作成の中国全土の実測図) をレジスらと作成
◎レジス (雷孝思 1663-1738) フランス出身、皇輿全覧図作成に参加

1. 永楽帝 2. 永楽大典 3. 四書大全 4. 五経大全 5. 性理大全 6. 康熙字典 7. 古今圖書集成 8. 四庫全書 9. 水滸伝 10. 三国志演義
11. 羅貫中 12. 西遊記 13. 金瓶梅 14. 紅樓夢 15. 儒林外史 16. 聊齋志異 17. 長生殿伝奇 18. マテオ＝リッチ 19. 坤輿万国全図
20. 幾何学原本 21. アダム＝シャル 22. フェルビースト 23. ブーヴェ 24. 皇輿全覧図

美術

画

明代に南宗画（南画・文人画）の画法・理論が確立，職業画家の画法を北宗画

- ◎1 _____ (1555-1636) …明の文人官僚で書家・画家として高名。南宗画と北宗画に絵画を大別
- ◎仇英（生没年未詳）…16世紀前半に活躍し，美人風俗画などで高名。北宗画の代表とされた
- ◎八大山人（1626-1705）…明の王族。明滅亡後出家し後に還俗し60を過ぎ画作に専念。特異な画風
- ◎石濤（1642-1707）…明の宗室の一族。山水画に独自の境地を開いた清初南宗画の代表
- ◎2 _____ (郎世寧 1688-1766) …乾隆帝に仕えたイエズス会士の画家，円明園設計に関与

陶磁器の歴史

磁器は海の道の交易品として宋代より景德鎮などで盛んにつくられ，ジャンク船で輸出

- ◎3 _____ …西アジア式の彩陶に代わり，黄河文明後期の竜山文化を代表する土器で，黒色の研磨土器
- ◎4 _____ …唐で作られた陶器，三色の組合せが多い，容器のほか人物像も，題材にイランの影響
- ◎5 _____ …白色で釉薬が透明な磁器で宋代に江西省の6 _____ で盛んに製造
- ◎7 _____ …釉薬に鉄分を含み，青色に還元した磁器→朝鮮半島では高麗時代に象嵌した高麗青磁を製造
- ◎8 _____ …白磁にコバルト（元でイランより輸入）で絵付けし，焼きつけて藍色にしたもので中国では青花
- ◎9 _____ …白磁や染付に赤・青・緑・黒などのうわぐすりで絵付けし，再び特殊な窯で焼いたもの

イスラーム文化

…イスラーム教とアラビア語で統一性→イラン人の活躍でペルシア語も重要

…普遍的文化・都市文化・融合文化

自国の学問

…コーランとムハンマドのスナ（言行）のハディース（伝承）研究から発展

…アラビア語に基づくアラブ人固有の学問で神学・法学・文法学・詩学・歴史学など

- **法学** ○ コーランと 1 _____ を法学者（ウラマー）が解釈し、イスラーム法（2 _____）成立
- **神学** ○ 3 _____ が神学とイスラーム神秘主義（4 _____）調和
- **歴史** ○ タバリ『預言者と諸王の歴史』…9-10世紀、年代記形式の世界史
- 5 _____ 『集史』…イル・ハン国宰相でモンゴル史と世界史を集成
- 6 _____ 『実例の書』…序説『世界史序説』で遊牧民と都市民交代の歴史哲学

外来の学問

…ギリシア・イラン・インドなど起源の学問

…哲学・論理学・医学・数学・天文学・錬金術・音楽・地理学など

- **哲学** ○ 7 _____ の研究盛んで西欧中世のスコラ哲学に影響大
- 8 _____ （アヴィケンナ）…11世紀イラン系の哲学者・医学でも有名
- 9 _____ （アヴェロエス）…12世紀コルドバ出身の哲学者、アリストテレス注釈
- **医学** ○ イブン＝シーナ『10 _____』…著作は17世紀まで西欧の医学教科書
- **数学** ○ ギリシアやインドの数学を学び、11 _____ 数字からアラビア数字作成
- インドから十進法や 12 _____ の観念を学び、代数、三角法発達
- フワーリズミー…9世紀イラン系の代表的代数学者
- バッターニ…10世紀アラブ系の代表的三角法学者
- **化学** ○ 錬金術が化学の基礎で西欧に伝わる。ex アルコール・アルカリ・フラスコはイスラーム起源
- **地理** ○ 13 _____ 『三大陸周遊記』…モロッコ生まれの大旅行家
- イドリシ『ルッジェーロの書』…モロッコ出身で両シチリア王国に仕える・地球球体説

- * **文学** ○ 『14 _____』…ペルシアやインドの民話もと。マムルーク朝期カイロで完成
- フィルドウシー『シャー＝ナーメ』（王の書）…ガズナ朝期。イスラーム以前のイラン君主の物語
- 15 _____ 『16 _____』…セルジューク朝の四行叙情詩人
- サーディー『薔薇園』…道徳詩の詩人

- * **美術** ○ 徹底的な偶像崇拝否定のため絵画発達せず
- 唯一の例外は細密画（17 _____）でイル・ハン国イランで中国絵画の影響を受け成立
- 18 _____ …幾何学的な装飾図案で絵画のかわりに発達。建築にも使用

- * **建築** ○ 19 _____ （礼拝所）建築が中心・特徴は丸屋根（ドーム）と尖塔（20 _____）
- 岩のドーム…イェルサレムにあるイスラーム初期の代表建築
- 21 _____ …グラナダに残るナスル朝の宮殿・アラベスク使用
- 22 _____ …スレイマン1世造営。ミマーリ＝シナン設計、イスタンブールに存在
- 23 _____ …ムガル帝国のシャー＝ジャハン帝造営。アグラに存在

*イスラーム文化が欧州に伝えたもの

- 製紙法…751年 24 _____ で中国からイスラーム世界へ
- 火薬・羅針盤…中国からイスラームに伝わり、十字軍期にヨーロッパへ
- 砂糖…インドから伝わり、十字軍以降ヨーロッパへ

*イスラーム文化の欧州文化への影響

- 11-13世紀にアラビア語の文献がラテン語に翻訳。神学・哲学・医学に大きな影響
- イベリア半島・シチリア島・キプロス島など経由。十字軍や以後の東方貿易で促進

1. ハディース 2. シャリーア 3. ガザリー 4. スーフィズム 5. ラシード＝ウ（ア）ッディーン 6. イブン＝ハルドゥーン 7. アリストテレス
 8. イブン＝シーナ 9. イブン＝ルシュド 10. 医学典範 11. インド 12. ゼロ 13. イブン＝バットゥータ 14. アラビアンナイト
 15. ウ（オ）マル＝ハイヤーム 16. ルバイヤート 17. ミニアチュール 18. アラベスク 19. モスク 20. ミナレット 21. アルハンブラ宮殿
 22. スレイマン＝モスク 23. タージ＝マハル廟 24. タラス河畔の戦い

インドの文化

古代王朝期

◎マウリヤ朝…ガンジス中流マガダ国の王朝で都パータリプトラ 前4～前2世紀

- ・アショカ王が各地に磨崖碑や石柱碑でダルマを刻む。第3回₁_____ スリランカ布教

◎サータヴァーハナ朝…前2～3世紀, デカン高原のドラヴィダ系国家でローマと季節風貿易

- ・別称アーンドラ朝, ₂_____ (龍樹)が大乘仏教理論

◎クシャーナ朝…1～3世紀, 北西部にイラン系クシャン族が建国, 都プルシャプラ, 絹の道交易

- ・2世紀のカニシカ王全盛, ヘレニズム風の仏像制作開始の₃_____美術

→同時期にガンジス上流域のマトゥラーでインド風の仏像(後にグプタ美術に発展)の制作

◎グプタ朝…インドの伝統文化復興 都パータリプトラ 4～6世紀

- ・チャンドラグプタ2世全盛 ₄_____来印『₅_____』
- ・₆_____が₇_____文学の傑作『₈_____』
- ・医学・天文学・数学が発展し, ₉_____を用いた計算法が考案
- ・インド風の₁₀_____美術→₁₁_____石窟寺院の壁画
- ・ガンジス中流の₁₂_____僧院で大乘仏教の教学盛ん
- ・民衆にヒンドゥー教(バラモン教に民衆信仰融合, 維持神ヴィシュヌ・破壊神シヴァなど信仰)浸透
 - ・『₁₃_____』…紀元前後に成立, ヴァルナに基づく日常の規範
 - ・二大叙事詩完成…都市国家成立期に原型成立, 主人公がヴィシュヌ神の化身とされヒンドゥー教の聖典
 - ・『₁₄_____』…バーラタ族の抗争, クリシュナ王子活躍
 - ・『₁₅_____』…ラーマ王子がさらわれたシータ妃を奪回

◎ヴァルダナ朝…ハルシャ=ヴァルダナ建国 都カナウジ 7世紀

- ・₁₆_____来印しナーランダー僧院留学『₁₇_____』

◎ラージプート期…地方政権はヒンドゥー教によって王権の正統化と権威保持を図る→各地に巨大寺院建設

- ・仏教は8世紀より密教盛ん→パーラ朝に保護→徐々に独自性を失い, ヒンドゥー教に組み込まれて消滅

イスラーム期

◎イスラーム政権は, イスラーム教の強制を行わず

◎イスラーム神秘主義(₁₈_____)の行者(スーフィー)の布教でイスラーム教が広がる

◎ヒンドゥー教で類似の神秘主義である ₁₉_____の信仰が盛んで, スーフィズムとの交流盛ん

◎宗教詩人カビール(ナーナクに影響)やアクバル帝の融合の試み

◎₂₀_____教…16世紀初頭 ₂₁_____創始, 偶像・カースト否定。パンジャブに浸透。戦闘教団化

◎ヒンディー語(現インド公用語)と ₂₂_____語(現パキスタン公用語)成立

- ・ウルドゥー語は在来語にペルシア語の語彙や用法が加わり, アラビア文字由来の文字で表記する言語

◎インド=イスラーム文化…イラン・イスラーム文化とインド文化融合し成立, 宮廷の公用語はペルシア語

◎₂₃_____廟…シャー=ジャハンが愛妃ムムターズ=マハルの廟として建設

◎₂₄_____…ムガル宮廷中心に, イランの細密画(₂₅_____)をヒンドゥー画家学び成立

◎₂₆_____…ムガル絵画の影響を受けてヒンドゥー教的要素を加えた庶民的絵画

1. 仏典結集 2. ナーガルジュナ 3. ガンダーラ 4. 法顕 5. 仏国記 6. カーリダーサ 7. サンスクリット 8. シャクンタラー 9. ゼロ
10. グプタ 11. アジャンター 12. ナーランダー 13. マヌ法典 14. マハーバーラタ 15. ラマーヤナ 16. 玄奘 17. 大唐西域記
18. スーフィズム 19. バクティ 20. シク 21. ナーナク 22. ウルドゥー 23. タージ=マハル 24. ムガル絵画 25. ミニアチュール
26. ラージプート絵画

文化史人物編：古典古代

ホメロス (前 8 世紀)	▼前 8 世紀の最古にして最大の叙事詩人。トロヤ戦争での英雄たちの活躍を歌う『イリアス』、トロヤ戦争の英雄オデュッセウスの苦難に満ちた帰還の物語『オデュッセイア』で有名。盲目の詩人であったと伝えられているが、実在を疑う説もある。その叙事詩はポリス成立期に、それまで様々な伝えられていたエーゲ文明時代の口伝が集成されて成立したと考えられる。さて、受験世界史で、ヘレニズム期の彫刻の代表としてよく出題される「ラオコーン像」は、実は『イリアス』中のエピソードに基づいた作品である。この像は大蛇に絞め殺されようとしている人物の苦悶を捉えた傑作とされるが、ではなぜ大蛇に絞め殺されるという普通では考えられない目にあっているかということ、彼ラオコーンはトロヤ側の神官であったが、一人ギリシア側のトロイの木馬の奸計を見破り、木馬を槍でつつこうとした。ら、ギリシア側を応援していたアテナ女神が怒って、その使いである大蛇をしてラオコーンとその子を絞め殺させてしまったのであると。
ヘシオドス (前 700 年頃)	▼前 700 年頃の農民詩人。父の死後、相続争いをした無頼の兄弟に対し訓戒する形式で、貴族を批判し、労働の尊さを歌った『労働と日々』で有名。彼の存在自体が貴族に対して平民が台頭しつつあったことの証明である。また、宇宙の始まりである混沌のカオスから、ついにはゼウスが統率する世界が成立するまでを詩って、ギリシアの神話や伝説を体系的にまとめた『神統記』の作者でもある。
サッフォー (前 612-)	▼ギリシア叙情詩を代表する女流詩人でレスボス島の出身。少女たちを集め、音楽や詩を教える一種の文学サークルを主催した。彼女の叙情詩（殆ど断片しか伝わっていないが）はその少女たちへの恋愛感情を歌ったものが多い。レズビアンやサフィズムという言葉はここからきている。もっともちゃんと男性と結婚して子供も産んでいて、愛児をいとおしむ詩も作っているから女性オンリーというわけではなかったらしい。美青年に恋し、振られて崖から身を投げて死んだ…というのは後世作られた伝説である。
アナクレオン (前 560 頃 - ?)	▼前 6 世紀～5 世紀初にかけて活躍した叙情詩人。酒や恋をおもしろおかしく歌う作風で、後世アナクレオン風という言葉を生んだほど、多くの愛好者と模倣者が出た。
ピンダロス (前 518- 前 438)	▼前 5 世紀に活躍した叙情詩人である。オリンピア祭典の勝利者を称えた『オリンピア賛歌』が古代詩人の作としては珍しく完全な形で残っていることで知られる。
アイスキュロス (前 525- 前 456)	▼前 5 世紀、アテネがペルシア戦争に勝利し、全盛期を迎えた時代に活躍したギリシア三大悲劇詩人の一人。マラトンの戦いにも参加し、それを生涯の誇りとする。最古の作品である「ペルシアの人々」は、ペルシア戦争のサラミス海戦でのクセルクセス遠征軍とその敗北が題材。また自作の上演にあたっては、自ら俳優として演じたことが知られている。代表作『アガ멤ノン』はトロヤ戦争の総大将でありながら、勝利して帰国した時、従兄弟と、従兄弟と浮気していた妻の兩人に殺されるアガ멤ノンと、その息子で母と叔父を倒して父の仇を討つオレステスの伝説に取材したものである。
ソフォクレス (前 496- 前 406)	▼ギリシア三大悲劇詩人の一人で、ペリクレス、フィディアスとともにペリクレス時代を代表する人物。市民としても、幾度か将軍に選ばれ、ペロポネソス戦争にも将軍として活躍。代表作は『オイディプス王』。テーベの王、オイディプスはテーベを襲った疫病（ペロポネソス戦争初期アテネを襲った疫病の恐怖が反映している）の原因が先王を殺した下手人の汚れにあることを知り、探索を進めるうちに自分こそがその下手人であり、しかも自分が父を殺し、母と結婚するであろうと予言されていた宿命の子で、先王が自分の実の父、自分が結婚した女が実の母であることを知る。ために彼は自らの両目をくりぬいて、荒野をさまようことになる…この悲劇は一人の才能に満ち溢れた正しい人物が、善意と正義にもとづいて行動しながら、なお神（運命）からおそるべきしるしをうける様を描いて、ギリシア悲劇、ギリシア運命劇の最高傑作とされる。なおここから、心理学で父に反感を持つ一方で母の愛を得ようとする男児の心理をエディプス＝コンプレックスと呼ぶようになった。
エウリピデス (前 485- 前 406)	▼三大悲劇詩人の最後の人。「人間は万物の尺度」と説いたソフィスト、プロタゴラスの影響を受け、アイスキュロスやソフォクレスと同じく神話や伝説を基にしながら、人間の心理を重視した作風を確立。特に女性の心理描写に優れる。代表作『メディア』は、ギリシア神話の金の羊毛探検隊で、隊長イアソンを助けて羊毛を手に入れさせ、その妻となる魔女メディアのコリントでの悲劇に題材を得たもの。探検後メディアと共にコリントに赴いたイアソンはそこで国王クレオンの娘を新しく妻にしようとする。メディアは、魔法の衣装で花嫁と国王を殺し、さらに自分とイアソンの子を殺して去っていく。それまでは恐ろしい魔女の行為と考えられていた物語は、作者によって夫に見捨てられた妻の心理劇として同情を込めて描かれる。夫に捨てられた妻の悲哀と愛情回復へのむなしい努力。やがてそれが夫への憎しみに転じ、メディアはついに夫に苦痛をあたえる目的で、狂おしい心のうちにわが子を殺し、夫の新妻とその父を魔法の衣によって焼き殺すにいたるのである。一方でギリシア神話の英雄イアソンは金と権力に目がくらみ、恥を忘れた卑劣漢として描かれる。彼の作品は同時代ではそのあまりの革新性の故に評価されること少なく、喜劇詩人のアリストファネスの嘲笑を浴びたりしたが、後世その作品は 3 大悲劇詩人中最も愛好された。
アリストファネス (前 450- 前 385)	▼ギリシアの代表的喜劇詩人。ペロポネソス戦争期に活躍し、平和主義の立場に立つ。『女の平和』は、女たちが性的ストライキという奇想天外な方法で男たちに戦争をやめさせる話。もっとも基本的には保守的な人で、『蜂』ではペリクレスの改革でくじにあたって裁判官となり、日当も支給されて笑いの止まらぬ老人を描いて、ペリクレスの直接民主政を皮肉り、『雲』ではソクラテスをソフィストの代表として描いて笑いのめし、後の処刑の原因を作った。またエウリピデスなど悲劇詩人のパロディも残している。他に『女の議会』ある。
フィディアス (前 490- 前 430)	▼前 5 世紀に活躍のアテネの彫刻家。ペリクレスの友人でパルテノン神殿の再建を監督し、象牙と黄金で高さ 12 メートルの『アテナ女神像』を製作したと伝えられる。しかし彼の名声は反ペリクレス派の憎むところとなって女神像の黄金をごまかして着服したなどと訴えられ、結局アテネを去ることになり、晩年は不遇のうちに没した。
タレーズ (前 7 C - 前 6 C)	▼ギリシア最初の哲学者。イオニア植民市ミレトスの人。万物の根源を追究した自然哲学の祖で根源を水とした。1 年を 365 日に分け、1 ヶ月を 30 日と定めたとも伝えられ、ギリシア 7 賢人の筆頭とされる。世界で最初に鑄造貨幣を制作したことで知られるリディア王の保護を受け、リディアとメディアの戦いに際して日食を予言したエピソードでも知られる。
アナクシマンドロス	▼前 6 世紀ミレトスの人。タレーズの弟子で万物の根源をトアペイロン（無限者）とする。
アナクシメネス (前 585- 前 525)	▼前 6 世紀ミレトスの哲学者。同郷のタレーズ、アナクシマンドロスとともにミレトス派と言われる。タレーズの水、アナクシマンドロスの無限者に対して、空気を万物の根源とする。
ヘラクレイトス (前 544-)	▼前 6 世紀の自然哲学者。万物は流転すると説き、変化自体を万物の根源とし、火をその象徴とする。エフェソスの名門に生まれながら、世俗的な生活を捨てて孤高の哲学生活を送った。彼のこのような態度は当時の人に

ピタゴラス (前 582- 前 497)	は随分奇妙に映ったようで、「暗い人」とあだなされてしまう。「泣く哲学者」というあだ名もある。 ▼前 6 世紀サモア出身でイタリアのクロトナに居住。万物の根源は数であると主張し、ピタゴラスの定理を発見した数学者としても有名。が、同時に彼は人間は全ての動物や植物がめぐりめぐって転生したものだと言った。彼の輪廻転生を説くピタゴラス教団の創始者でもあり、教を詩と音楽で表現する芸術家でもあった。彼の輪廻転生思想はギリシアの伝統的信仰を根底から覆す物であり、教団は異端視されて迫害される。 この教義に反抗したクロトナの市民たちが、ある日彼の家を襲って火をつけた。ピタゴラスは 40 人程の弟子とともに逃げ出したが、途中でソラマメの畑に行き当たった。彼の植物に対する尊敬の念が、彼の運命を決した。「ここで死のう」と、ピタゴラスは畑のへりに腰をおろした。「このあわれなソラマメを踏みにじるよりは」そして彼は弟子たちとともに追ってきたクロトナの市民に虐殺された。どうもよくわからない ー山田風太郎『人間臨終図鑑』より引用。
アナクサゴラス (前 500- 前 428)	▼小アジア出身でイオニア学派の系譜をひく哲学者。万物は理性<ヌース>によって整理され世界を形成すると説く。アテネに滞在してペリクレスの尊敬を受け、その友人となるが、太陽は燃える石に過ぎないと説いたことが反ペリクレス派につけこまれ、神（太陽神アポロン）を侮辱するものとして訴えられ、アテネより追放されてしまう。
デモクリトス (前 460- 前 370)	▼原子を万物の根源と主張し、イオニア学派<自然哲学>の完成者とされる。活躍の開始はソクラテスとほぼ同期であるが、なにしろ 90 歳を越えて長生きしたので、活動期は前 5 世紀 - 4 世紀となる。エジプトを始め各地に旅行して見聞をひろめ、健全な生活を送り、ヘラクレイトスの「泣く哲学者」に対して「笑う哲学者」と言われた。
プロタゴラス (前 485- 前 415)	▼前 5 世紀の哲学者で“人間は万物の尺度である”として普遍的真理の存在を否定。自らソフィスト（知恵ある者の意で、アテネで直接民主政のもと民会が最高機関となり、民会での演説が政治を志す者にとって極めて重要になった世相を背景に、弁論や修辞を教えた職業的教師の総称。）と名乗った最初の人である。ギリシア中を莫大な授業料を取って青年達に講義してまわった。アテネにも数度訪れて、ペリクレスや三大悲劇詩人の一人エウリピデスと親交を結んだことが知られている。
ソクラテス (前 469- 前 399)	▼普遍的真理の存在を主張し、ソフィストを批判したアテネの哲学者。知とは徳であるとする知徳合一を説いた。アテネの街角に出ては、ソフィストの授業で知恵を授かった気になっている青年たちに論争をいどみ、対話法（産婆術）と言われるその討論法で、無知の自覚を促す。一方で彼はデルフィの神託を重んじ、自己の内に響く神の声に耳を傾ける神秘の人であり、対話法で用いた『汝自身を知れ』という言葉はデルフィの神殿に刻まれていた言葉である。もっともギリシア人には珍しい団子鼻の怪偉な容貌のソクラテスが、街角で道行く青年達をつかまえ論争をいどむ様はアテネの市民に誤解されて奇人として有名となり、アリストファネスの喜劇『雲』では代表的ソフィストとして嘲笑と憎悪の対象とされた。そのような雰囲気の中で、ペロポネソス戦争敗北後の衆愚政治下のアテネにあって伝統の神々の信仰をそこない若者を誣らす者として訴えられ、死刑の判決を受ける。逃亡のすすめに応ぜず、『悪法もまた法なり』として毒杯をあおぎ、死んだ。
プラトン (前 427- 前 347)	▼前 4 世紀に活躍したソクラテスの最大の弟子。この世界の現実とは完全不滅な真実イデアの影に過ぎないというイデア説を説く。哲人政治を理想とし、『国家論』を著述。その人材育成のためにアカデメイアに学園を創設。しかしシチリア島シラクサでの実践の試みには失敗した。ちなみにプラトニック＝ラブという言葉はプラトンの恋愛という意味で、これは彼のイデア説が肉体より靈魂を上位に置くものと解釈されたことからきた言葉である。ヨーロッパ中世の騎士道で貴婦人に対する純潔な恋愛として流行し現在にいたるが、実際の彼は少年愛の人であったという説がある。プラトンが学園を設立したアカデメイアは、もともとアテネの郊外に三つあった体育場の一つの所在地で、こうした体育場は、若い男たちが全裸で競技に打ち込み、若くない男たちがそれを見物し、男どうしのあいだの情熱的な愛情関係が生まれる場でもあり、それはしばしば肉体的に成就され、アテネの生活のなかで重要な役割を担っていた、と、僕のてもとにある『歴史の都の物語』原書房。1992）にあるんですけど。
アリストテレス (前 384- 前 322)	▼プラトンの最大の弟子でアレクサンドロスの家庭教師。イデア説を克服し、体系的哲学を構築。その関心は哲学にとどまらず、万学の祖といわれる。後世イブン＝ルシュド（アヴェロエス）らのイスラム哲学に大きな影響を与え、それが 12 世紀にアラビア語からラテン語に翻訳されて西欧に伝わってスコラ哲学に影響を与える。アテネにリュケイオンの学園をひらくが、アレクサンドロス大王死後、マケドニアに反旗を翻したアテネから追放され、翌年死んだ。ところで、その死に関してはアテネを追放されてエウリポス海峡にいたり、海峡の潮流の不思議な動きが不可解で「エウリポスよ、わたしをのみこめ。わたしはおまえを理解することが出来ないから」といって身を投げて死んだという伝説がある。（この部分『人間臨終図鑑』参考）
ヒッポクラテス (前 460- 前 375)	▼『医学の父』といわれる小アジア出身のギリシアの医師。前 5 世紀ころ活躍。高潔な人格で医者への心得に関して多くの格言を残したことで知られている。江戸時代の日本では、医学の神様として神棚に祭っていた蘭学者がいたという話もあるが、それはやりすぎというものであろう。
ヘロドトス (前 485- 前 375)	▼「歴史の父」と言われ、旅行家としても有名。「エジプトはナイルの賜物」は彼の言葉。ペルシア戦争の歴史を物語叙述を用いて記録し『歴史』を著す。
トゥキディデス (前 460- 前 400)	▼自ら参加したペロポネソス戦争を科学的叙述で記録し『歴史』を記述。ペリクレスを高く評価し、アテネ民主政を擁護したその演説の記録が含まれる。ヘロドトスの『歴史』が娯楽性の強いものであったのに対し、ギリシア語での本来の意味「探究」のこぼれ通り、「歴史」の真実はいかにあったかを追求めたところに特色がある。
ディオゲネス (前 400- 前 325)	▼黒海南岸生まれのギリシアの哲学者でアテネで活躍。世俗の栄華を否定し、乞食同様の暮らしをしてつば（または樽）を住居にしたと伝えられる。歯に衣を着せぬ言動はプラトンをして「狂えるソクラテス」と言わしめた。アレクサンドロス大王が樽の中にいる彼のもとにやってきて望みを聞いた時、そこに立たれると陽が当たらなくて寒いから、どいてくれ、と語ったという逸話が残っている。その学説はストア派のゼノンに影響を与えた。
ゼノン (前 335- 前 263)	▼エピクロス派と並んで、ヘレニズム期の 2 大哲学であるストア派の創始者。キプロス島出身のフェニキア人であるが、アテネで活躍した。幸福とは心の平静であるとし、その方法として禁欲を説き、禁欲主義の哲学者として知られる。ストア派はローマ時代に独特な発展をとげ、ネロ帝の家庭教師だったセネカ、奴隷出身の哲学者エピクテトス、哲人皇帝マルクス＝アウレリウス＝アントニヌスなどを輩出。日本では高倉健（寡黙で実直な男を演じさせれば日本一。広末涼子と組んで、『鉄道員』に主演し、日本アカデミー賞受賞。その時の挨拶

	がまた渋くて話題になった)の枕詞として知られている「ストイック」という言葉は、もともと「ストア派の(学徒)」という意味。転じて、禁欲的で克己心が強く感情に動かされず、苦楽を超越する様子(した人)になる。
エピクロス (前 342- 前 271)	▼ヘレニズム期、快楽主義の哲学として知られるエピクロス派の創始者。ストア派のゼノンとはほぼ同時期にアテネで活躍。多くの支持者を集め、存命中から神のごとく崇拜され、実際にその誕生日には盛大な祝祭が行われたという。組織的な学校に初めて女子の参加を許した哲学者としても有名。＜生の目的は快楽である＞と主張したが、その快楽は＜放蕩者の快楽＞ではなく、苦痛や混乱を去った心の平静こそが最高の快楽であるとし、この点では実はストア派の主張と近い。しかし、後世その主張は単なる卑俗な悦楽追求と誤解され、本来「エピクロス派の学徒」を意味した「エピキュリアン」は快楽趣味、食道楽、美食家、快楽主義者などの意味で使われ、平成日本ではついにレストランガイド誌のタイトルにされてしまった。
エウクレイデス (前 300 頃活躍)	▼平面幾何学を大成した数学者で英語読みのユークリッドの名で広く知られている。アレクサンドリアのムセイオン＜王立研究所＝ミュージアムの語源。本来の意味は、学芸の女神ミューズを祭る場所＞で幾何学を講義。プトレマイオス朝の創始者プトレマイオス1世に対して語った「幾何学に王道なし」という言葉は、日本で受験勉強の格言として定着した。
アリストタルコス (前 310- 前 230)	▼アレクサンドリアのムセイオンで活躍した自然科学者。地球は太陽の周囲を自転しつつ、公転するという地動説を提唱。しかし彼はその太陽中心説のために、世の人から無神論者として非難された。
アルキメデス (前 287- 前 212)	▼シチリア島シラクサ出身の数学者。物理学者。てこの原理(私に足場を与えよ。地球をも動かそう)を発見。黄金の王冠の真贋の判定を依頼され、浮体の原理を発見。この時、公衆浴場に入浴して浮体の原理のヒントをつかみ、興奮し、生まれた姿のままで街にとびだした、というエピソードが伝えられている。ストーリーキング(今や死語である)の始祖でもあったと。ムセイオンで活躍後、シラクサに帰郷。シラクサが第二次ポエニ戦争でハンニバルと同盟してローマと戦い、ローマ軍に包囲攻撃された時、巨大投石器や敵艦焼き討ちを目的とする大反射鏡などを発明して、ローマ軍を悩ませたと伝えられる。シラクサ陥落後、彼を浮体の原理＜アルキメデスの原理＞の大学者と知らないローマの一兵士に殺害されてしまう。
エラトステネス (前 275- 前 194)	▼ヘレニズム時代にアレクサンドリアで活躍したギリシア人数学者、天文学者、地理学者。ムセイオンの館長をつとめた。地球の赤道の周囲＜地球の長さ＝子午線＞を影の角度から計算し、45000km(実際は40000km)という近似値を得たことで有名。
ウェルギリウス (前 70- 前 19)	▼ラテン文学黄金時代のローマ最大の詩人。アウグストゥス帝による平和回復の喜びと愛国の情熱を、ローマ建国の叙事詩にしてラテン詩の最高傑作といわれる『アエネイス』に歌った。この叙事詩はローマの建国者をトロアの英雄アエネイスとし、ホメロスの『イリアス』と『オデュッセイア』を下敷きにしているものだが、ホメロスに遠く及ばず、ついに未完のままに死に臨み、焼却せよと遺言したのを、アウグストゥス帝の命によってその死後公開されたものである。温厚で内気な性格からパルテニアス(処女のような人)とあだなされ、生涯を独身で過ごす。もっとも独身だったのは、プラトンと同じく少年愛の人であったからで、自分の愛する美少年によせる詩も残っている。しかも痔で悩んでいたとも伝えられるから、悪く想像するとちょっと怖いものがある。男色は死刑のはずの中世ヨーロッパでなぜかキリスト教の聖人に祭り上げられ、ルネサンスの先駆けを告げるダンテの『神曲』では、ダンテに地獄界・浄罪界を案内する導師として描かれた。
ホラティウス (前 65- 前 8)	▼ラテン文学黄金時代の叙情詩人で、ウェルギリウス・オウィディウスとともに三大詩人と称される。若き日には共和政擁護の情熱と正義感の赴くままに、ブルトウスの自由軍に参加して一隊の長となり、アントニウスやオクタヴィアヌスの軍隊と戦うものの敗北。天下のお尋ね者としてローマの裏町に潜伏の日々を送る。この経験が、彼にエピクロス哲学の徒としての人生への深い認識と、詩人としての鋭い観察眼をもたらすことになる。後に詩人として名をなした時、かつて彼が敵としたアウグストゥス帝の愛顧を受けてローマ近郊に荘園を与えられ、そこで現在でも広くヨーロッパ世界で愛唱される『叙情詩集』などの傑作を残した。
オウィディウス (前 43- 後 17)	▼ウェルギリウス・ホラティウスとともに、ラテン文学黄金時代を代表する三大詩人の一人。しかし、温厚で「神のごとき詩人」と謳われたウェルギリウスや、哲学者の風貌を持つホラティウスと異なり、彼はどうすれば異性の心を捉え、恋愛に勝利できるか教えるとうそぶく『愛の歌』のような詩で、人気詩人の地位を獲得する。「愛されるには、まず愛想よくあれ」をモットーとし、「天が星をもつ数だけそれだけ、多くの少女を汝のローマはもっている」とうたい、「じつに今は黄金の時代である。最高の名誉は黄金で得られ、恋愛も黄金でむすばれる」とローマ社交界の花形としてわが世の春を謳歌するも、風紀の乱れを憂えるアウグストゥス帝からその元凶としてにらまれ、突如黒海沿岸の辺境の地へ流刑される。もっとも流刑の原因については、皇帝一族のとんでもない不祥事をたまたま目撃してしまったためではないか、とも言われる。風紀の乱れと言えば、何とんでもない皇帝の娘ユリアの浮気癖に勝るものはないから、これは大いに有り得る話である。流刑地で身の不運を嘆く詩をつくり、ひたすら皇帝のゆるしを願ったが聞き入れられず、10年間の悲惨な流刑生活の後没した。代表作は、ギリシア・ローマ神話から変身物語を集成した『転身譜＜メタモルフォセス・変身物語＞』で、神話伝説の宝庫としてシェークスピア以下後世の小説家におおいに利用されている。今は亡き偉大なマンガ家手塚治虫にも同名の作品がある。
キケロ (前 106- 前 43)	▼ギリシア思想やヘレニズム哲学をローマに紹介した学者で、雄弁家としても有名であると同時に、コンスルを経験し、ローマ転覆の陰謀を未然に防いで「祖国の父」と賞賛され、カエサルから第一回三頭政治への参加を呼びかけられたほどの大政治家でもあった。カエサルとポンペイウスの対立ではポンペイウスを支持してカエサルの政敵となり、カエサルの暗殺後は、アントニウスと対立してその支持者の手により惨殺された。代表作『国家論』は、おびただしい書簡や演説集とともにラテン語散文を確立したものと高く評価されている。
セネカ (前 4- 後 65)	▼ストア派の哲学者でネロ帝の家庭教師。代表作は『幸福論』。ネロ帝が即位すると大臣となってよくその政治の後見したが、ネロがその残虐で強欲な性格を現してくると政界から引退。著述に専念する。人生の短さと禁欲を説き、富を軽んじながら、実生活においては南海貿易に投資して巨万の富を蓄積するなど矛盾した態度を示す。しかしネロ帝に対する陰謀の疑惑に巻き込まれ、死を命じられたときには入浴して血管を太くし毒を注射して、自分の命の消えゆくさまを書記に記録させ、ストア派の哲学者らしく従容として死に赴いた。
エピクテトス (55-135)	▼ギリシア人で、ストア派の哲学者。はじめ奴隷であったが、この時期にストア派の哲学を学んだとされる。解放されて自由人となると、庶民の教育に情熱を傾け、名声があがって有力者が周囲に集まるようになってもら布団に寝るなどの庶民的態度を崩さなかった。孤児の救済などの事業を行ったことも知られている。自らは何も著作を残さなかったが、弟子が彼の言葉を記録して『語録』として出版し、人生の指南書とされた。

ルクレティウス (前 99- 前 55)	▼共和政末期の詩人でエピクロス派の哲学者。その生涯については、確かなことは何もわかっていない。現存する著作は『物体の本性』。エピクロス派ではデモクリトスの原子論を継いで、世界の全ては原子の働きによるとしたが、この書はその立場から自然や神々についての人々の迷信に戦いを挑んだものであり、近代の唯物論者に大きな影響を与えた。
ポリビオス (前 201- 前 120)	▼ローマ共和政時代のギリシア人の政治家・歴史家。前 2 世紀にギリシアの覇権を握ったアカイア同盟の指導者の一人で、前 168 年アンティゴノス朝マケドニアがローマに滅ぼされた第三次マケドニア戦争において、アカイア同盟もマケドニアとともにローマと戦い敗北したため、人質としてローマに渡った。スキピオ一家と知り合いその厚遇を受け、小スキピオの家庭教師となった。第三次ポエニ戦争で小スキピオに伴われアフリカにわたり、カルタゴの滅亡を見聞。その経験からローマの勝因を追及して書かれたのが『ローマ史』である。ここで彼は政体は君主政→その墮落形態としての僭主政→貴族政→その墮落形態としての寡頭政→民主政→その墮落形態としての衆愚政→一巡して君主政と循環し続けるという、政体循環論を唱えている。彼によれば、ローマは例外的に君主政(コンスル)、貴族政(元老院)、民主政(平民会)の要素を併せ持つ混合政体で安定していた。故に地中海に覇権を確立することが出来たというのである。もっとも彼はローマといえども、いつかは政体の変遷を免れ得ないと論じており、事実、革命の 1 世紀の混乱はその時既に始まっていた。
リウィウス (前 59- 後 17)	▼アウグストゥス帝の側近の歴史学者。アウグストゥス帝により革命の 1 世紀の混乱に終止符がうたれたローマでは、新時代の到来を喜び、ホラティウスがアウグストゥス帝が演出した「世紀の祭典」のために詩を作ったのを始め、ウェルギリウスがローマ建国の叙事詩である『アエネイス』を創作するなど愛国心の高揚が見られた。その雰囲気の中で、建国からアウグストゥスにいたるローマの歴史を『ローマ建国史』142 巻(現存は 35 巻)に著した。その名文は、「牛乳のような豊かさ」と称えられ、ローマ共和政の第一級史料として、「ローマ史研究の聖書」と位置付けられている。
タキトゥス (55-120)	▼護民官・統領・属州アジア(現小アジア)の総督をつとめた有力な政治家であるとともに、『ゲルマニア』『年代記』を著した歴史家であり、繁栄の中で退廃に向かうローマを憂える優れた文明批評家でもあった。その著作『ゲルマニア』はカエサル『ガリア戦記』と並んで古ゲルマンの研究史料として高く評価されているが、執筆の動機はゲルマン人の質朴さを強調することで、日夜続く宴会で美食を楽しみ、満腹になるとガチョウの羽をつかって食したものを吐き出してまで食べ続けるようなローマ人の歪んだ贅沢を批判することにあった。また『年代記』は、副題に「神聖なるアウグストゥス帝の死より」とあるように、アウグストゥス帝の死後からネロの死の直前までの時代(14-66)を扱ったものである。この時代はカリギュラやネロのような暴帝が輩出した時代で、帝室の陰謀を記述する彼の筆からは、暴君たちへの憎悪と共和政時代への思慕、そしてにもかかわらず帝政を仕方のないものと受け入れる諦観がうかがえる。
プルタルコス (46-120)	▼五賢帝時代のギリシア人伝記作家・歴史学者。ハドリアヌス帝の愛顧を受けてギリシアの代官をつとめ、後には神託で有名なデルフォイの神官となった。その著作『対比列伝』はアレクサンダーとカエサルというように、ギリシアとローマの英雄を対比させて描きだしたものである。後世風雲児ナポレオンが愛読してエジプト遠征の一原動力となった。
ストラボン (前 64- 後 21)	▼小アジア出身のギリシア人地理学者。その著作『地理誌』はローマ帝国の地域別に地理や風俗、史実、そして神話や伝説までものべたものである。特にギリシアと小アジアに詳しく、古代史研究の重要史料となっている。わが国の「風土記」のようなものと考えれば、わかりやすい。
大プリニウス (23-79)	▼ローマ帝政初期の政治家・軍人・博物学者。その著作『博物誌』は、一種の百科辞典であるが、象や犀といった実在の動物から、火を吐くとかげサラマンダーや、羊のなる樹のような荒唐無稽なものまで扱っていて、理屈抜きに面白い。異端の作家澁澤龍彦がそのエッセイでよく取り上げていて文庫本にもなっているので、是非読んでみてほしい。ヴェスヴィオス火山噴火(ポンペイが一瞬にして火山灰に沈んだことで有名)の時、艦隊司令官として救出作業に向かい(持ちまへの好奇心からという説あり)有毒ガスで死亡。
プトレマイオス (2 世紀活躍)	▼ギリシアで活躍した地理学者・天文学者。経度と緯度を使用した世界地図を作成。また、それまでのギリシア・オリエントの天文学の知識をまとめ、「天文学集大成」を著す。この書は西ローマ帝国崩壊後の西欧世界では失われていたが、イスラム世界ではアラビア語に翻訳されて『アルマゲスト』と題され、後にそれが西欧に翻訳されて中世天文学の権威とされた。しかし、この書で彼が採用したのが、アリストタルコスの地動説ではなく天動説であったため天動説がカトリック教会の公認教理となり、ルネサンス期に多くの悲劇を招くことになる。
ガレノス (129 ころ -199 ころ)	▼小アジアのペルガモン出身のギリシア人医師。ローマに出て名医の評判をとり、後に五賢帝最後のマルクス＝アウレリウス＝アントニヌス帝に仕える。動物解剖を行って人体の構造を考察し、後の医学に大きな影響を与えた。しかし、人体解剖を行わなかったため、その考察には限界があり、また、血液の生成などには誤った説をたて、17 世紀にハーヴェーの血液循環説によって訂正されることになる。

文化史人物編：中世～ルネサンス

アルクイン (735-804)	▼中世キリスト教神学の祖とされるイングランドの学者。カール大帝に招かれ、アーヘンの宮廷学校を指導。カロリングルネサンスの中心人物となる。
アンセルムス (1033-1109)	▼カンタベリー大司教として教皇グレゴリウス7世に忠誠を誓い、地上権力との闘争に関しては教権の優位を主張し、哲学すらも神学に幸仕させてスコラ哲学の父と言われる。その説はあくまで信仰心を重んじ、理性に対する信仰の優先を説くもので、“信ずるために知ることを求めず、知らんがために信ずる”と主張。神や善などの普遍的な真実の存在を主張する实在論を唱えた。
アベラール (1079-1142)	▼盲目的信仰をしりぞけ、理性が信仰に優先するとし、神や善などの普遍的とされる概念も、実は人間が名づけて初めて、神や善として理解されるのであるとする唯名論に理解を示して普遍論争の一方の旗頭となる。また尼僧エロイズとの恋愛事件でも有名で、そのいきさつを書いた「わが不幸の物語」はヨーロッパ中でもてはやされ彼の人気を不動のものとするとともに、彼の勤めるパリ大学には彼を慕ってヨーロッパ中から優秀な学生が集まり、今に至るヨーロッパの名門大学の地位を確立した。もっとも、エロイズとの恋愛事件では、スキャンダルを憎むエロイズの親族がやとった暴漢に襲われ、不能とされてしまっている。清らかである筈の聖職者もなかなか大変である。
トマス＝アキナス (1225-74)	▼ドミニコ派の学僧にしてパリ大学教授。「神学大全」を著してスコラ哲学を大成したことで余りにも有名。もっともその前提となったのは、当時イスラム世界のアラビア語文献から翻訳されたアリストテレス理論であり、スコラ哲学自体がイスラムの学問の輸入翻訳から始まっていることは注目されてよい。生存中から「天使博士」と賞賛され、死後聖人とされた。ショーン＝コネリー主演で映画化されたウンベルト＝エーコのベストセラー小説『薔薇の名前』では、重要な登場人物である修道院長は、トマスの死にあたって棺を担ぐ係となり、大男の彼を入れた巨大な棺を落とすことなく無事、僧院の狭い通路や階段を運んだ功績によってドミニコ派修道院長の座を手に入れた…という設定になっている。なお、ドミニコ派がスコラ哲学の研究に力を入れて多くの学僧を輩出したのは、初期のドミニコ派が南フランスにおけるワルド派やアルビジョワ派の異端運動に対抗する役割を担い、異端審問を積極的に行う修道会であったため、異端との論争に備える必要があったからである。
ロジャー＝ベーコン (1214-94)	▼13世紀イギリスのスコラ学者。「驚嘆すべき博士」と称された。経験や実験を重視してイギリス経験論の先駆けとなり、経験科学という言葉は彼から始まった。
ドゥンス＝スコトゥス (1266-1308)	▼トマス＝アキナス以後のスコラ哲学の発展をもたらしたイギリス人。パリ大学で教えていた時、教皇ボニファティウス8世と仏王フィリップ4世の争いに際してボニファティウス8世を支持し、パリから追放されている。彼の学説はそれまで絶対的権威とされていたアリストテレスとトマス＝アキナスを批判するものであり、実証的な学問への道を開いた。
ウィリアム＝オッカム (1280年代-1349)	▼ドゥンス＝スコトゥスに学び、のちに唯名論を主張。理性や経験を重視し、科学的な思考と近代哲学への道を開く。スコラ学者として出発しながらも、結局彼の説はスコラ哲学自体を破壊していくことになった。また“教皇のパピロン捕囚”という状況下にあって反教皇権主義の立場から異端とされたが、ドイツ皇帝保護のもと活動を続けた。先のエーコの『薔薇の名前』の主人公は、オッカムのウィリアムの友人にして盟友という設定になっている。
ダンテ (1265-1321)	▼フィレンツェに生まれ、35歳で市の行政官となる。神聖ローマ帝国ホーエンシュタウヘン朝の没落と大空位時代によって、イタリアを分裂させたまま影響力を維持しようとする教皇とフランス王の勢力が強まっていた時代状況において、イタリア統一を願う皇帝派の指導者として、敢然と反教皇の立場をとり、教皇派にたちむかうも、翌年には政争に敗れ、フィレンツェを永久追放。生涯二度と、生まれ故郷に還ることはなかった。後にみずからのべるようにイタリア中を「物乞いしつづ」放浪し、42歳の時から当時「俗語」として軽視されていたトスカナ方言で不朽の名作『神曲』を書き始める。ウィクリフの英訳聖書によって英語が、フスのチェコ語訳聖書でチェコ語が、ルタードイツ語訳聖書によってドイツ語が確立されたように、彼の『神曲』によってこそ、国語としてのイタリア語が成立する。19世紀後半まで続くイタリア分裂の状況において、イタリア人が集団としての概念を失わなかったのは、ひとえにこの「共通イタリア語」のおかげであり、またイタリア統一の悲願は彼を尊敬し、その業績を継ごうとする知識人の中に、生き続けることになった。現実の政治に敗北したダンテは、しかしこの『神曲』によって歴史上巨大な役割を果たすことになるわけである。ちなみに『神曲』は案内者にローマ時代最大の詩人ヴェルギリウスを設定していることや、永遠の美少女ベアトリーチェの存在などで有名であるが、地獄編の中で同時代の知人の地獄に落ちた様を描いていたりして、なかなかにえぐいぞ。
ペトラルカ (1304-1374)	▼最初の人文主義者と称されるフィレンツェの叙情詩人。ダンテが美少女ベアトリーチェへの思慕を『神曲』のモチーフにしたように、彼は教会のミサで知り合った貴婦人ラウラへの想いを『カンツォニオーレ』に代表されるイタリア語の叙情詩に託し、一躍ダンテ以降の最高の詩人としての名声を得る。しかしペトラルカの本領はむしろ古典ラテン語研究にこそあり、当代最高の知識人として、古典文化復活という意味でのルネサンスを準備することになる。「最初の人文主義者」「人文主義者の父」などの呼称は、ここに由来する。またイタリア統一を願う愛国者であり、神聖ローマ皇帝カール4世（金印勅書の発布者）に統一イタリアの復興を働きかけたがかなわなかった。絶えず諸国を旅行して、宮廷を渡り歩く生涯を送ってルネサンス文化人の生活スタイルを確立。70歳の誕生日のその日に死亡。遺言によって遺産の一部が親友ボッカチオに贈られた。
ボッカチオ (1313-1375)	▼ダンテ、ペトラルカと同じくフィレンツェに生まれた人文主義者。黒死病<ペスト>の流行を背景に著された『デカメロン<十日物語>』はイタリア語散文を確立するとともに、近代風刺小説の祖型とされ、高く評価されている。構成は、ペストを避けて集まった10人の人物が10日間、それぞれ一日一つ物語りをするというもので、全部で100話からなる。聖職者の好色なさ等を笑いのめす批判精神を交えて、生命力に充実した快活な登場人物が描かれ、ペストにうちのめされた人々を励まし、立ち直らせようとする作者の願いが、作品の背後からうかがわれる…。ところでこの小説は“好色文学”の祖としても知られており、おませな中学生だった僕は、「世界文学の名作にかこつけて、Hな本をどうどうと読める」という期待に胸高鳴らせて、『デカメロン』を買ったことがある。実際にレジで金払う時にはけっして比喩ではなく心臓がドキドキして耳の中に心音がこだましてた。もちろん、あさはかな中学生の期待はページをめくっていくにつれ裏切られ、「何が好色文学だ」という怒りにかわっていくわけですが、いや思えば私も若かった。さて、『デカメロン』完成後、ペトラルカと知り合い親友となったボッカチオは、その影響もあって、ギリシア古典の研究などに手を染め、人文主義者として活躍。後には尊敬するダンテの『神曲』の注釈なども行った。ペトラルカの死の翌年、その後を追うように死亡。

ジョット (1266-1337)	▼イタリアルネサンスの写実主義絵画の時代の幕開けを告げる画家。ダンテもその画業を賞賛した。フィレンツェの人で、羊飼いの生まれであるという。機知に富んだ人としても知られ、彼のものとされる小話に次のようなものがある。 ジョットが仲間と連れ立ってお寺まいりをした時、ある一人が言った。「ね、どうしてヨセフはいつでもあんなに憂鬱そうな顔をしてるのだろう（ヨセフはキリストの母なるマリアの婚約者）」ジョットがすぐさま応じる。「あたりまえさ。自分の花嫁のお腹が大きくなるのを見ながら、その父親がわからないのだから」 とはいえ、彼は乞食修道院運動およびフランチェスコ派の創始者で「第二のキリスト」と賞賛されたフランチェスコを題材にした『聖フランチェスコの生涯』など、深い宗教体験なしには描けないような名画を残しているのであるが。
ブルネレスキ (1377-1446)	▼15世紀を代表する建築家でフィレンツェのサンタマリア大聖堂の大ドーム建築に成功。中世の、無数の柱の集合により垂直に伸びる尖塔を特徴とするゴシック様式に対して、柱を使わない大ドーム建築に成功したことはルネサンス様式の到来を告げる建築史上の革命である。もっともこの時代の技術でどのようにしてドームを建築したのかは、建築史上の謎だったりする。同時に、そこで用いられた、“遠近法”と自ら名づけた空間把握の理論は、彫刻で盟友ドナテルロに、絵画ではマザッチョらによって展開され、ルネサンス美術全体に、大きな影響を与えていくことになる。この後彼はフィレンツェの政権を掌握したコジモ＝デ＝メディチの庇護下に活動を続け、メディチ家の菩提寺となるサン＝ロレンツォ聖堂の建築も行った。
ドナテルロ (1386-1466)	▼イタリアルネサンス期の彫刻をミケランジェロと二分し、前期を代表する彫刻家。ブルネレスキと共にローマ時代の遺跡を調査し、古代彫刻を研究。科学的な観察に基づく写実主義的な技法を身に付け、人体の美と力を写実的に表す、古代彫刻の伝統を復活させた。コジモ＝デ＝メディチとは終生の親友となり、その庇護のもとに、『ガットメラータ将軍騎馬像』などの傑作を残した
ボッティチェリ (1444/45-1510)	▼この名はあだ名で翻訳すると「小樽」となる。彼の兄がまず最初に「小樽」とあだ名され、ついでに弟もこのあだ名で呼ばれるようになったそうで、それはないだろうと本人は思ったかどうか。いやとにかく代表作「ヴィーナスの誕生」であまりにも有名。メディチ家の庇護を受け、異教的な雰囲気に触れて、聖書ではなく、ギリシア神話に基づいて、しかも当時タブー視された女性裸体を描き出し、ルネサンス絵画に多大な影響を与えた。ボッティチェリは現世の快楽や女性の肉体の美しさに惹かれる一方で、肉体を悪魔のすみかと教えたカトリックの敬虔な信者であり、その矛盾が痛々しく恥らいに満ち、なおかつ自然の美しさに恍惚とするヴィーナスに表われて、この絵画を不朽の名作にしたのだと言われている。しかし心の比重は次第に信仰に傾き、特にフィレンツェに異教と腐敗を激しく糾弾するサヴォナローラが修道院長として出現すると、その教えに帰依するようになっていく。そして仏王シャルル8世の侵入をきっかけに、メディチ家が追放され、サヴォナローラが独裁権を握り、狂信的な改革が行われ、贅沢品や美術品が広場に積み上げられて燃やされた運命の時、自ら自作の絵を供出してこれを燃やし、画家としては自滅の道をたどっていくのである。こうして彼はダンテの作品の挿し絵に熱中する一方、宗教的神秘的作品ばかりを描いた。教皇アレクサンデル6世（ポルトガルとスペイン間の勢力圏を分割した教皇子午線で有名）と対立したサヴォナローラが異端として焚刑された後も、あくまで忠実な信徒として教えを守り、自らの狂おしい宗教家と化し、狂信的な幻想に満ちあふれた作品を残した後、晩年の10年にはついにほとんど作品製作もやめて、その生涯を終えた。
マキャベリ (1469-1527)	▼フィレンツェの人で、25歳の時、フィレンツェに侵入してきたシャルル8世の軍を目の当たりにし、イタリア統一の必要を痛感。フィレンツェの書記官、外交官として活躍したが、後に政争に敗れ、追放された。その間に書かれたのが名著『君主論』である。教皇アレクサンデル6世の子、チェザーレ＝ボルジアを理想的君主のモデルとして念頭においたといわれるこの書は「君主たるもの獅子の勇氣と狐の狡知を持たねばならない」として道徳と政治を分離し、政治学の嚆矢となった。しかし、プロイセン国王フリードリヒ2世の有名な言葉「君主は国家第一の下僕」が、皇太子時代にフリードリヒ2世が著した「反マキャヴェリ」という論文に出自するように、その主張は権謀術数主義として受け取られ、マキャヴェリズムの名を残した。
ダ＝ヴィンチ (1452-1519)	▼ルネサンス期最大の万能人として知られ、自らの実作は拒否したもののチェザーレ＝ボルジアのために新兵器の開発設計すらおこなっている。各宮廷を渡り歩き、フィレンツェではメディチ家にローマでは教皇に、そして最後はフランス王フランソワ1世に仕え、フランスで生涯を終えた。46歳で「最後の晩餐」を、53歳にして「モナリザ」を描く。しかし女性美の象徴とされる「モナリザ」を描きながら、彼自身は生涯妻帯せず、その愛の対象は例え精神的なものであったにせよ同性であったと言われている。ところで、あの有名な我々が知っているルーブル美術館の『モナリザ』は、実は本当に本物かどうかよくわかっていない。これこそ本物の『モナリザ』であると主張する絵は存在がわかっているものだけでも数多く、個人コレクターが秘蔵しているものを入れれば数百にのぼるのではないかとされている。しかも、どうも『モナリザ』は、画家自身によって別々のものが二部描かれていた可能性があって、しかもルーブルの『モナリザ』は、本命ではないほうの作品ではないか、という疑いが近年濃くなり、現在ますます混乱に拍車がかかっているところである。真相やいかに。
ミケランジェロ (1475-1564)	▼フィレンツェ共和国の中級官吏の子として生まれながら、父の反対を押し切って美術に志す。15歳頃、ロレンツォ＝デ＝メディチに見いだされ、メディチ家で実子待遇での英才教育を受けて、その才能を大きく開花。89歳で死ぬまでの間、彫刻では『ピエタ』『ダヴィデ』『モーゼ』、絵画ではシスティナ礼拝堂の天井に『天地創造』、正面に『最後の審判』そして建築ではブラマンテが設計を始めたサン＝ピエトロ大聖堂の施工を規模を3/4に縮小して受け継ぐなど、美術史上に偉大な足跡を残し、生存中から「神の如き」と称された。その生涯はしかし、苦悩の色に染め上げられている。ミケランジェロは穏健なレオナルド＝ダ＝ヴィンチとすら諍いを起こしたような気難し家で、自分が傷つくことを恐れて人を傷つけ、住む世界を狭くしては孤独に閉じこもった。その傾向は、青年期に彼の生意気を憎んだ先輩彫刻家に鉄拳制裁を受けて鼻をつぶされ、複雑な容貌コンプレックスを抱いたことで加速されたと言われる。政治的にも、メディチ家とサヴォナローラ、フィレンツェ共和政とメディチ家独裁の間で揺れ動き、様々な人々から裏切り者として非難されて更に孤独と苦悩を深め、その傷は生涯癒されることはなかった。ところで、『最後の審判』では彼はキリストを全裸に描いたが、これが教会や敵対者から非難されて大問題となり、結局門弟の一人が腰布を加えることによって、この大作は破壊されずにすんだというエピソードがある。で、この門弟は後世「ふんどし画家」という有り難くない異名をちょうだいした。いい迷惑である。近年の修復作業の時、腰布を除いて、絵を本来の姿に戻そうという提案が行われ、周辺の人

ラファエロ (1483-1520)	物の何人かに関しては腰布がとりはらわれた。しかしキリストを始めとする主要人物については反対の声が強く、結局腰布はそのままになって、彼が描いていた筈のキリストのおちんちは開帳されなかった。残念。 ▼ 16 世紀の初めに多くの聖母子像を描いた、レオナルド＝ダ＝ヴィンチ、ミケランジェロと並び称されるイタリア＝ルネサンスの画家、建築家。19 世紀に絵画技術の革新運動が始まるまでは、長く史上最高の画家の評価を得ていた。ギリシアの哲学者を描いた「アテネの学堂」は教科書の挿絵によくある。1514 年には、サン＝ピエトロ大聖堂の建築を叔父のブラマンテから受け継ぐが、これは 1520 年に彼が早世したため、後にミケランジェロに受け継がれた。誰からも好かれる善良な性格と、何よりその優美な姿態に名声が加わって、異常に女性にもてたことでも有名。その死も実は、もてすぎて遊びすぎた結果、体力の限界を越え（いわゆる「やりすぎ」ですな）、ついに高熱を発して寝込んだところを、悪名高い瀉血療法（病気の原因を悪い血によると考え、血を出すことで治療しようというもの）を施されたことによるという話がある（この部分、『人間臨終図鑑』参照）。うらやましいような、うらやましくないような。
ブラマンテ (1444-1514)	▼ イタリアの盛期ルネサンスを代表する建築家で、キリスト生誕 1500 年を記念して、教皇ユリウス 2 世（ラファエロやミケランジェロも保護してローマをルネサンスの中心にしたことで有名）の命により、サン＝ピエトロ大聖堂の設計・指揮を行う。一方でミケランジェロと対立し、策謀を用いてミケランジェロをシステナ礼拝堂の天井画製作という、意図せぬ仕事におこみ、その恨みをかった。まあミケランジェロが恨むのも無理のない話で、天井画はきятつの上で爪先立ちになり、両手を上げ、首をねじまげて、上を見ながら、描かなければならない。これはつらいぞ。自分でためにポーズをとってみるとすぐわかる。やってみるべし。やってみた上で、その時描かれたのが大傑作『天地創造』であると知れば、また感慨もひとしおであろう。
ファン＝アイク兄弟 (1366-1426) (1380-1441)	▼ 15 世紀初めのフランドルの画家兄弟。兄フーベルト、弟ヤン。写実的なゴシック絵画を特徴とするフランドル画派の基を開き、多くの祭壇画の傑作を残す。また油絵の技法を改良し、後世に大きな影響を与えて、美術史上、イタリアルネサンスの巨匠たちと並び称される大画家である。
エラスムス (1465-1536)	▼ ネーデルラントのロッテルダムに私生児として生まれる。9 歳より早くも修道院に入って学問を治め、パリ大学に神学を学ぶ。ギリシア、ラテン古典の研究をすすめる一方、各地を旅行して人文主義者仲間と交流。特にトマス＝モアとの親交は有名である。修道士として教会内部にありながら、1509 年『愚神礼賛』を著して教会と僧侶の腐敗を鋭く風刺。16 年にはギリシア語原典をもとに、当時普及していたラテン語の新約聖書の誤りをただして、人文主義者の第一人者とみなされ、「ゲルマニアのほまれ、世界の誇り」と絶賛された。彼の著書はおりからの活版印刷術の普及によって広く読まれ、宗教改革を準備したと言われるが、宗教改革の勃発にさいしては、あくまで中立を守り、両陣営から批判される中で没した。しかし、旧教と新教の対立が激しくなり、両陣営とも狂信の度を深めていくなかで、そのあくまで理性的な対応は、現在高く評価され、その著作は現在も読み継がれている。
ブリュゲル (1520-1569)	▼ フランドルの働く農民や、子供達を題材に描いた、ベルギーの国民的画家。しかし、彼がリアルに描き出した子供の表情は、我々が想像するような無邪気なものではなく、「大人びて」いたり、虚無観を漂わせていたりすることが多い。そこに着目して近年、18 世紀以前は、子供は「小さな大人」であり、子供が現在あるように「子供」として認識されるようになったのは、近代市民主義社会成立以後のことではないかという研究が出されたりしている。
デューラー (1471-1528)	▼ 『四聖徒』で有名なドイツの宗教画家。明るいイタリアの画風に対して良く言えば重厚な、悪く言えば暗く沈んだ画風が特徴である。ドイツ人でドイツで活躍した美術家で、万人が優れているとみとめる人物は少なく、彼一人が飛び抜けて有名。ドイツにはろくな画家がいないから、ドイツ人はただ一人イタリアなどに対抗できる彼を、むやみにほめ上げて有名にしたのだ、などという話もある。
ホルバイン (1497-1543)	▼ デューラーと並び称されるドイツ＝ルネサンスの巨匠。もっとも彼はその活躍の舞台をイギリスに移し、ヘンリ 8 世の宮廷画家としてイギリスはロンドンで生涯を終え、ドイツにはほとんど門人を残さなかった。特に肖像画に優れ、『ヘンリ 8 世』が有名。またエラスムスやトマス＝モアと交流し、エラスムスの肖像画も残している。
ラブレ (1494-1553)	▼ 「したいようにせよ（欲するところを行え）」という言葉で有名な、フランスルネサンスの前期を代表する作家・人文主義者。大作『ガルガンチュエ物語』の主人公、巨人ガルガンチュエは、作者の意思を体現し、社会的因習を軽々と踏み越えていく。って書くとかっこいいが、うんちやおしっここのスカトロ話や、下ネタの笑話満載。全編これ笑いが響き渡るという感じの作品です。福音主義の理想に立ちながらも、新旧両派のどちらにも属さない態度を示し、巨人ガルガンチュエとその子パンタグリュエルによって狭量な新旧両派の対立そのものを風刺したラブレの作品は、カトリックからも、カルヴァン派からも異端とされ、発行後たちまち発禁処分となり、自身も流浪の亡命生活の果てに死んだ。
モンテーニュ (1533-92)	▼ 後期フランスルネサンスを代表する人文主義者で、ボルドーの高等法院の要職にあったものの、38 歳にして社会生活からの引退を宣言し、エッセーを書き始める。途中 48 歳から 4 年間ボルドーの市長に選ばれ、ユグノー戦争の混乱の中、よく新旧両派の融和に努力してボルドー市の平和を維持した。その後は再び自分の城に隠棲。城にはらせん状の階段室があってその壁面ぐるりが全て本棚となっており、古今の書物が集められているという、読書家にとってまさに夢のような空間であったと伝えられている。その書物に囲まれ、死ぬまで人生に対する深い洞察に満ちたエッセーを書き続けた。それがまとめられたのが有名な『随想録』である。
セルバンテス (1547-1616)	▼ 以下、山田風太郎『人間臨終図鑑』よりの引用。 彼は 24 歳のとき祖国スペイン艦隊の一水兵として、当時強大を誇ったトルコ艦隊を撃破した有名なレパントの海戦に、マラリアをおして参加し左手に負傷して生涯使用不能となった。彼はみづから称して「レパントの片手人坊」といった。しかしその後トルコ海賊船に襲われて捕虜となり、5 年にわたる奴隷生活を送ったり、海軍の糧食係の小役人となったり、大変な貧乏の中で何度か牢獄にはいったりしたが、58 歳のときに書いた『ドンキホーテ前編』が当時としては異例の評判を得た。ただし当時のスペインでは、作者の意思とは無関係にどこでも出版できたので彼はちっとも豊かにならなかった。それどころか、別の男が勝手に『ドンキホーテ後編』を書いて出版した。さすがに彼は狼狽して、自分の書いた『ドンキホーテ』の後編を急いで書き出した。このことがなければ『ドンキホーテ』は未完のまま終わったかもしれないといわれる。なぜなら、この後編につけた献辞の日付けが 1615 年 10 月末日で、その半年後本が出版された 1616 年の 4 月 13 日に彼はマドリードの自宅で死ぬというきわどい芸当であったからである。シェークスピアが死んだのも同じ年。日本では徳川家康が死んでいる。

チーソー (1340-1400) トマス＝モア (1478-1535)	▼エドワード3世に仕えた14世紀イギリスの、イギリスルネサンスの先駆的作家。ボッカチオの『デカメロン』を模倣して晩年に『カンタベリ物語』を著し、英語の成立に大きな影響を与えた。 ▼イギリス＝ルネサンスを代表する人文主義者。エラスムスとの親交で有名で、代表作『ユートピア』はエラスムスの『愚神礼賛』に対する答礼として書かれた。ユートピアは理想郷と訳されるが、本来の意味は「どこにもない場所」。ここでユートピアとして描かれたのは、無為徒食の貴族や僧侶がいなくて、一日6時間働けばよく、教育が普及し、民主主義が確立していて、信教が自由な国である。今の日本は、あと少しかなという感じがしないでもないけど、我々には我々の新たな困難があるぞ、と。第一部は、当時のイギリス及び西欧各国の状況に対する批判になっていて、「羊が人間を喰う」と、当時行われていた第一次囲いこみ運動に対する批判があることも重要。さて彼は、人文主義の教養ある若き国王ヘンリ8世に政治改革の期待を寄せ、またヘンリ8世の彼に対する信頼も篤く、その懇願により、大法官になる。しかし、それが運命を決した。ヘンリ8世の離婚と首長法に反対をつらぬいた彼は、結局ロンドン塔で処刑され、その生涯を閉じるのである。
スペンサー (1525-1599) シェークスピア (1564-1616)	▼イギリスルネサンスを代表する詩人。代表作は『神仙女王』でその文章の美しさから詩人の詩人と称される。なお、『神仙女王』はエリザベス女王を意味しているとされる。 ▼あまりにも有名なイギリス＝ルネサンスの代表的劇作家。喜劇として『ベニスの商人』、悲劇として『マクベス』『リア王』『ハムレット』、史劇として、『ヘンリー4世』『ジュリアス＝シーザ』など。ところでシェークスピアの最初の悲劇として知られる『ロミオとジュリエット』の設定で二人の家が敵同士となっているのは、イタリアの皇帝党と教皇党の争いによる。ついでにいうと、二人の年は16歳と14（13だったかな）歳、出会ってからやることやって死んでしまうまで、僅か6日。これだからイタリア人は…というようなことが川原泉のマンガで指摘されていた。なるほど。
ゲーテンベルク (1394-1468)	▼ヨーロッパの活版印刷術の発明者とされるが、実は発明者にかんしては他にも様々な説があって完全な定説とはなっていない。マイنتズの貴族の生まれで、金細工職人となり、印刷術にとりくんでついに印刷業をおこし、まず聖書を出版した。
コペルニクス (1473-1543)	▼16世紀にヨーロッパ近世においてもっとも早く地動説を唱えたポーランドの聖職者。“黄金の世紀”と言われるポーランドの16世紀ルネサンス文化の繁栄を代表する人物である。ポーランド王とドイツ騎士団の抗争の調停などにも活躍。1530年『天体の回転について』という論文で地動説の考えを著した。このことから、ものの見方が根本から変わってしまうことを表す「コペルニクスの転換」という表現が生まれた。
ブルーノ (1548-1600)	▼イタリアのドミニコ派の修道士であったが、コペルニクスの地動説に注目し、地動説と、その影響を受けて独自に展開した汎神論を唱える。その説が異端視されると、1576年法衣を捨ててイタリアを脱出し、スイス・フランス・ドイツ・イギリスと教会の追っ手を逃れながら、自説を説いてまわる。その結果地動説が世に広く知られ、地動説が教理上の大問題として浮上してくるようになった。1592年帰国したところを捕らえられ宗教裁判にかけられるが、7年に及ぶ裁判、8年に及ぶ投獄生活にも自説を曲げず、ついに異端者として火刑に処された。
ガリレイ (1564-1642)	▼みづから作った望遠鏡で天体を観測し、地動説を実験的に論証（ただし完全な証明ではなく、地動説が完全に証明されるのは19世紀になってからである）『天文対話』を著す。しかしその説が1633年69歳のとき、宗教裁判所（異端審問所）により異端とされ、かろうじて火刑はまぬがれたものの、著述も出版も禁じられ、終身監禁状態となる。地動説を説いたこととともに、当時カトリック教会が「神によってつくられた完全無欠の球体」としていた月を望遠鏡で覗き、クレーターのでこぼこを発見してしまったことも、教会の心証を害したと言われる。自説の撤回をやむなく認めたとき、「それでも地球は動く」と呟いたというのは伝説であるが、心中を的確に表現していると思われる。死後も教会の迫害は続き、約百年間その死体は棺に納められたまま教会の地下室におかれ、墓をたてることも許されなかった。ちなみにカトリック教会が彼に謝罪したのは、やっと1983年になってのことである。
ケプラー (1571-1630)	▼ドイツの天文学者。貧家に生まれてしかも7か月の早産であり、生涯病弱であった。ために教育を受け始めたのはやっと13歳になってからである。コペルニクスの地動説に感動して天文学の研究を志し、地動説を数学的に論証。ケプラーの法則（遊星運行の法則あるいは惑星の3法則）を発見。しかし当時のドイツは、航海事業に乗り遅れた上に三十年戦争の混乱のさなかにあり、彼もその中で貧窮の生活を余儀なくされた。1630年熱病で死んだが、その死は実質餓死に等しいものであったと伝えられる。

文化史人物編：近世ヨーロッパ

ボーダン (1530-1596)	▼16世紀フランスを代表する政治学者。1576年ヨーロッパ最初の体系的政治学の書といわれる『国家論』を著す。ユグノー戦争が行われていた当時の世情を反映し、王権による混乱の収集を期待して、国内においてすべての政治権力に超越する「主権」の概念を提唱し、国王が主権を神から授与されたと主張して、王権神授説を唱える。また初期の重商主義経済学者としてコルベールの先駆とされている。
フィルマー (1589-1653)	▼王権神授説を唱えたイギリスの政治学者。熱烈な王党派でチャールズ1世に仕え、チャールズ1世によってナイトに列せられた。そのためピューリタン革命の時には10回も邸宅が略奪されたとと言われる。死後の1680年に主著『族父長論』が発表されたが、ここでは王権神授説と絶対王政の由来を聖書のアダムの家長権においている。
ボシュエ (1627-1704)	▼フランスの司教・説教家で雄弁で知られた。ルイ14世に皇太子の家庭教師として招かれ、10年間その教育に従事。1680年の『聖書政治学』81年の『世界史論』で王権神授説を唱え、この学説の代表的思想家とみなされる。また、聖職者であったにもかかわらず、フランスの聖職者は、まず何よりも王権に従わなければならないとし、フランスの国家教会主義（ガリカニスム）を確立したことも重要である。
グロティウス (1583-1645)	▼国際法の父と称されるオランダの自然法学者。14歳で大学を卒業し、神童の評判をヨーロッパに響かせ、フランス王アンリ4世をして“オランダの奇跡”と感嘆せしめた。オランダが独立を確保した1609年に『海洋自由論』を著し公海の自由を説く。しかしその後オランダを2分した政争に巻き込まれて逮捕され、古城に2年間幽閉の後、妻の手引きで書物運搬用の箱に隠れて奇跡的な脱獄を果たし、フランスなどに亡命した後、スウェーデン宮廷に仕えた。フランスに滞在中、見聞した三十年戦争の惨状に、戦争時においても平和時においても国際法が必要であることを痛感し、1625年名著『戦争と平和の法』を著した。
ホッ布斯 (1588-1679)	▼17Cイギリスの哲学者・政治学者。哲学者としては唯物論哲学を唱えたが、自然法と社会契約説の考えから、初めて市民社会の理念（現代社会の原則）を明らかにし、にもかかわらず絶対王政を擁護した政治学者として特に重要である。彼の説は、主著『リヴァイアサン』に展開されているが、人間は自由・平等であり、生存の権利を有する〈自然権〉ことを認めることから出発する。しかし自然権を個々人が無限に追及すれば必ず個々人の利害の衝突を呼び、「人間は人間にとって狼である」から「万人の万人に対する闘争」が始まってしまう。だから人間は契約を結びく社会契約＞自然権を放棄して社会・政府・国家（この場合は絶対王政）に預けたのであり、社会・政府・国家は絶対的な権利を持つとするのである。
ロック (1632-1704)	▼17Cイギリスの哲学者・政治学者。哲学者としては『人間悟性論』で経験論哲学を確立。政治学者としてはホッブズと同じく社会契約説に立ちながら、社会・政府・国家はあくまで国民から自然権を預けられたもので、主権は国民にあり、政府がそれを裏切って国民を圧迫するようなら国民には政府をとりかえる抵抗権があるとす。王政復古後亡命していたが、名誉革命の発生とともにメアリ2世と同船してイギリスに復帰。『市民政府二論』を著して名誉革命を擁護し、名誉革命の哲学者と言われる。彼の思想はフランス啓蒙思想に受け継がれ、アメリカ独立革命の独立宣言にも影響を与えた。
モンテスキュー (1689-1755)	▼フランスの啓蒙思想家。ボルドーの高等法院長をつとめた。パリ在住のペルシア人の故郷への手紙という形式で、フランスの社会を軽妙に風刺した『ペルシア人への手紙』で文名があがる。40年を費やして完成した『法の精神』はイギリスの立憲政治をたたえながら三権分立を説いた不朽の名作である。
ヴォルテール (1694-1778)	▼フランスの啓蒙思想家。1734年、イギリスの制度や思想を紹介してフランスの現状を批判した『哲学書簡』で有名であるが、その他にも小説・詩・戯曲・評論などでも多才な才能を発揮。中国の朱子学を賞賛したことでも知られる。無神論者でカトリック教会を痛烈に批判し、いくどか投獄され、ついにフランスからの亡命を余儀なくされる。しかし国外においても旺盛な執筆活動を続け、プロイセンのフリードリヒ2世のサン＝スーシ宮殿に一時滞在し、ロシアのエカチェリーナ2世とも文通して「ヨーロッパ最高の英知」との名声を確立。1777年83歳でついに帰国を許されてパリ市民の歓呼の中を王者のように凱旋した。しかし翌年の死にさいしてはあくまでカトリックを認めなかったため、パリに埋葬することが許されなかった。
ルソー (1712-1778)	▼ジュネーブで生まれ、パリを中心に活躍した啓蒙思想家。自由・平等を主張した『人間不平等起源論』と主権在民・直接民主政の主張で有名な『社会契約論〈民約論〉』はフランス革命、特にジャコバン派のロベスピエールとサン＝ジュストに大きな影響を及ぼしている。また文明と人為を悪として“自然にかえれ”をモットーとし、ロマン主義の先駆となった。もっとも本人はというと『民約論』を著しながら貴族の夫人の愛人として生活し、不朽的教育論の名著『エミール』を著しながら、生まれた自分の子供は片っ端から孤児院に放り込む、矛盾と謎に満ちた人物でもあった。
ディドロ (1713-1784)	▼フランスの啓蒙主義者・文学者・唯物論的哲学者。アンシャンレジーム末期の腐敗・不正と闘い、百科全書派の中心人物としてフランス啓蒙思想を集約した「百科全書」の刊行に取り組む。この事業は検察当局の弾圧や度重なる一時発禁処分にあいながら、1751 - 72年にわたって続けられた。特に1759年に出版特許を取り消されて寄稿家の大部分が脱落し、盟友ダランベールも抜けてからは、寄稿者はディドロの他は一人だけで地下出版という最悪の状況下で事業を継続する執念を見せた。小説家としてもゲーテをはじめ後世に与えた影響は大きい。エカチェリーナ2世との交友も有名で、晩年にはペテルスブルクにエカチェリーナ2世を訪問した。
ダランベール (1717-1783)	▼フランスの啓蒙主義者・数学者・哲学者。パリで私生児として生まれ、捨て子として発見されるという出生を負う。ディドロと協力して「百科全書」の刊行にとりくみ、総序文をはじめ多くの数学的項目を執筆し、自然科学の普及に努めた。
ケネー (1694-1774)	▼フランスの外科医にして重農主義経済学の創始者。社会科学としての経済学は彼の『経済表』に始まると言われる。はじめは外科医として名声を博し、ルイ15世の愛人ポンパドゥール夫人の侍医となり、後にはルイ15世本人の侍医ともなった。経済学者としての出発はディドロの編集する『百科全書』への執筆に始まる。フランス各地を旅行して農業荒廃の現実を知り、国家の富の源泉を農業生産に求め、経済統制を説く重商主義を批判してレッセ＝フェール（なすにまかせよ）を標語に農産物の自由取引や農民の減税を主張した。
テュルゴー (1727-1781)	▼フランスの重農主義者・政治家。祖父は州知事、父はパリ市長をつとめた名門に生まれる。『百科全書』にも執筆して当時の代表的な哲学者たちと交流する一方、政治家としても業績を上げる。1774年ついにルイ16世に財務長官に任じられ穀物取引の自由化、賦役の廃止などの重農主義にもとづく改革をおこなってフランス革命の先駆と評価されたが、76年にその任を去ることを余儀なくされた。
アダム＝スミス (1723-1790)	▼1776年「神の見えざる手」であまりにも有名な『国富論』を著し、古典派経済学の祖とみなされるイギリスの道徳哲学者。重商・重農両経済学を批判し、自由放任主義を主張。分業と商品交換を重視。彼の理論はイギ

リスに発生していた産業革命を背景に資本主義社会の諸現象を明らかにしたもので、新興の市民階級の経済思想を理論づけるものであった。父が誕生前に死亡し、母一人子一人で育ち、母と同居したまま生涯独身で過ごす。61歳の時母が90歳で死に、以後健康が衰えて67歳で死んだ。財産の殆どは生前ひそかに慈善事業に寄付されていた。

マルサス (1766-1834)	▼食糧は算術的（101→102→103）にしか増加しないが、人口は幾何級数的（100→200→400）に増加するという論理で貧困の原因を説明。解決策として貧困階級の増大こそが問題であるのだから、貧困階級に対する保障をやめて餓死する者は餓死するにまかせるのがいいという、なかなかゴーマンな提案を行う。代表作は『人口論』。穀物法には食糧確保重視の立場から賛成。国際分業の効用を重視して穀物法に反対したりカードと論争し、その論争の過程でリカードとともに古典派経済学を確立した経済学者でもある。もっとも人口増加を恐れた彼の血統は彼の子の代で絶え、その直接の子孫は残っていない。
リカード (1772-1823)	▼古典派経済学者。商品の価値はそれに投入された労働の総量に等しいとする労働価値説は、マルクスにもとりいれられた。というか、マルクスの経済学的主張のほとんどは、リカードに負っている。株取引に従事して財産をつくった後に下院議員となり、スミスの『国富論』に接して経済学に興味を持ち、マルサスなどと論争しながら自己の立場を確立していった。特に国際分業を重視し、自由貿易の効能を数量的に証明したことは、現在のいわゆる新自由主義の貿易理論などにも決定的な影響を与えている。
フランシス＝ベーコン (1561-1626)	▼イギリスルネサンス期最大の哲学者・政治家。政治家としてはエリザベス女王時代は不遇であったが、次のジェームズ1世の治下には大法官にまで出世。しかし、汚職事件をひきおこし、一切の官職・地位を奪われた上、一時ロンドン塔に幽閉された。その後は領地に隠れ住み、勉学と執筆活動に専念。主著『新オルガヌム』は観察と実験による帰納法の重要性を説いて、イギリス経験論哲学の幕開けとなり、近代科学の方法を確立したものと称賛される。自身も実験にいそしみ、雪中でうさぎの冷凍の実験をして肺炎になって死んだ。
デカルト (1596-1650)	▼代表作『方法序説』の“我思う故に我在り”の言葉で有名な合理論哲学の祖。フランスの官僚貴族の家に生まれる。イエズス会の学院でスコラ哲学を学ぶ一方、ルネサンス的な汎神論的宇宙解釈にも触れるが満足できず、数学こそが確実な学問であると考えて数学的思考法、すなわち演繹法を理論の基礎においた。1628年に自己の思想をまとめ、公表するためにイエズス会の勢力の強いフランスを逃れ、オランダに移り住んだ。48年学問好きのスウェーデンのクリスティーネ女王に招かれた時、一旦は病弱な自己の身体と北国の寒気を考え併せて断ろうとしたものの、結局は女王の懇願に負けてスウェーデンに渡り、翌年たちまち肺炎になって死亡。
パスカル (1623-1662)	▼フランスの早熟の天才で優れた数学者・物理学者・哲学者。賭けの分け前をどうするかという問題から、確率論を創始。物理学者としては流体の圧力に関する法則を発見。後年は宗教の経験から、当時カトリックで最も禁欲的な運動を展開していたポールロワイヤル僧院に属し、対立関係にあったイエズス会と論戦。ついで無神論・自由論からカトリックを守る著作を構想中に死んだ。その覚え書きとして残されたのが“人間は考える葦である”の言葉で有名な『パンセ』である。
スピノザ (1632-1677)	▼神とはすなわち自然であり、万物に存在するとする汎神論を唱え、“神に酔える人”と呼ばれたオランダの哲学者。主著は『エチカ〈倫理学〉』宗教的迫害を逃れてポルトガルからオランダに渡ったユダヤ人の子孫として生まれ、ユダヤ教の教育を受けたもののその思想ゆえにユダヤ教から破門。哲学者として名をなした41歳の時、ハイデルベルク大学正教授に招かれながら、自己の思想の自由を守るためにこれを固辞。生涯結婚せずレンズ磨きのアルバイトで生活費を得ながら自己の思想の確立につとめ、45歳で清貧・孤高の生涯を終えた。
ライブニッツ (1646-1716)	▼15歳で大学入学が認められた早熟の天才で、微分・積分数学を創始した優れた数学者であり、単子＜モノド＞を世界の構成要素とする単子＜モノド＞論を唱えて科学と宗教の統一を図った合理論の哲学者でもある。その他にも法学者、外交官としても活躍し、オランダを訪れた際、死の直前のスピノザと哲学問答を交わしたことが知られている。しかし晩年は悲惨で、宮廷から冷遇され人々から忘れられ、通風で死んだときには葬儀に出席したのは秘書ただ一人であったという。墓の所在すらわかっていない。
カント (1724-1804)	▼近代最高の哲学者と言われるドイツの哲学者。『純粹理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』などの著作で批判哲学と称される哲学説をうちたて、イギリス経験論と大陸合理論を統合してドイツ観念論哲学を創始。北ドイツプロイセンのケーニヒスベルク（現ロシア領カリーニングラード）で皮具匠の息子として生まれ、故郷ケーニヒスベルクの大学に勤める。身長1メートル50そこそこ、頭だけ大きく、筋骨薄弱で虚弱体質であったが、「時計のように正確な」規則正しい生活を送り、80歳まで長命。最後の言葉「エス・イスト・ゲート Es ist gut」が「すべてよし」という大哲学者最後の言葉として有名になる。しかし実は彼は晩年はただやたらにパンとチーズをむさぼり喰うだけで、親しい人の名を忘れ、アルファベットも忘れ、自分の名さえ書けない惚け老人になってしまっていたのである。「エス・イスト・ゲート」、英語で表現すれば「It is good」。これは最後にぶどう酒をスプーンで飲ませてもらって言った言葉。つまり、「うまい」と訳すのが、正解。
フィヒテ (1762-1814)	▼カントの系譜をひくドイツ観念論の哲学者。ナポレオン占領下のベルリンで1807-08年にかけて有名な「ドイツ国民に告ぐ」の連続講演をおこなってドイツ人の愛国心を鼓舞し、1809年フンボルトらの努力でベルリン大学が創設されると、その初代総長となった。
シェリング (1775-1854)	▼カントが創始しフィヒテが展開したドイツ観念論哲学の代表者の一人。15歳でチューリッゲン大学に入学を許された早熟の天才で、ここで5歳上のヘーゲルやヘルダーリンと友情を結ぶ。自我と自然の合一を主張する同一哲学を主張するが、はじめは彼の影響下にあったヘーゲルが弁証法哲学を大成するとドイツ哲学界におけるその存在は薄れてしまった。ヘーゲルの死後、ヘーゲル批判を明らかにするが、ヘーゲル哲学全盛の中ではもはや影響力を持つことはなかった。
ヘーゲル (1770-1831)	▼ドイツ＝ロマン主義哲学（ドイツ観念論哲学）の大成者で弁証法哲学を完成。はじめはシェリングの影響を受けたものの、やがてそれを脱してシェリング以上の名声を確立。ベルリン大学講師の職を得たショーペンハウエルが意図的にベルリン大学教授の彼と講義の時間を合わせたところ、学生が全て彼の講義に流れてショーペンハウエルにショックを与えたというエピソードが示すように、ヨーロッパ哲学の最高峰と自他ともに許すようになり、ベルリン大学の総長にもなった。もっとも30半ば過ぎの頃に下宿先の未亡人と密通して不義の子をなし、この母子を捨てて逃げ出すというような事件もおこしている。
フォイエルバッハ (1804-1872)	▼ヘーゲルの弟子でヘーゲル左派を代表する哲学者であったが、後に唯物論の立場をとってヘーゲルを批判するようになり、マルクスに大きな影響を与えた。その思想故に教会と国家の批判をあび、大学教師の職に就けず、妻の経営する製陶工場に収入を頼っていたが、晩年にその工場が倒産し、貧窮のうちに生涯を終えた。

コルネイユ (1606-1684)	▼ラシーヌと並び称される、ルイ 14 世時代を代表する悲劇作家。理性と意思の勝利をテーマにして『ル＝シッド』などの傑作を残し、その作品は今日でもくりかえし上演されている。しかし晩年には失敗作が続き、家庭の不幸に加えて年金も取り消され、世の中から忘れられて不遇のうちに死去した。
ラシーヌ (1639-1699)	▼コルネイユと並び称されるルイ 14 世時代を代表する悲劇作家。幼くして孤児となり、パスカルが所属したこと、イエズス会に対抗する運動を繰り広げていたことで有名な、ポール＝ロワイヤル僧院で教育を受ける。一時は文学に心酔して僧院を攻撃したものの悔い改め、キリスト教信仰に基礎を置いた傑作を次々に発表。代表作『フォードル』は「完璧な美しさでキリスト教的な霊にもとづいたもの」と評されている。実人生でも敬虔なキリスト教徒として生き、死んだが、彼をとりまく環境は、かなり俗悪なものであった。この時代のフランスでは有力者のサロンが競いあって卑劣な陰謀や悪意ある批評が繰り返され、コルネイユも彼もそれに悩まされ世評高い『フォードル』すら、初演は競争相手の陰謀と妨害により失敗に終わっているのである。
モリエール (1622-1673)	▼ルイ 14 世時代の代表的喜劇作家で、代表作は『タルチュフ』『守銭奴』『人間嫌い』など。現在のコメディ＝フランセーズ（フランス国立劇場）は彼の劇団に始まる。王室に関係する富裕な商人を父とし、その跡を継ぐ筈であったが、女優マドレーヌ＝ベジャールに恋して芝居の世界に飛び込み、マドレーヌの兄弟姉妹と〈盛名座〉を結成。自ら俳優として舞台に立つ。しかし不入りで 2 年とたたず破産。負債を払えず、一時は監獄に放りこまれるなど散々な目にあった。パリを逃れて地方まわりの劇団として再出発。再びパリに戻って名声を確立したのはようやく 15 年の後である。その作品は笑いの中に鋭い風刺を盛り込んだもので、例えば『タルチュフ』は一人の偽善者の姿を通じて、当時社会に大きな勢力を占めていたイエズス会に痛烈な攻撃を加えたものである。53 歳の時に自作の舞台に出演中、発作におそわれ、舞台を終えると同時に咯血して死ぬという、演劇人としての生涯を全うした。
ミルトン (1608-1674)	▼17 世紀ピューリタン文学を代表する詩人。イギリス文学史上シェークスピアと並び称される。「クライストの貴婦人」とあだ名されるような、美貌の青年詩人として出発。ピューリタン革命にさいし、その擁護のために立ち上がり、信仰・家庭（離婚の自由を主張）・言論の自由のために戦う。政府の検閲に反対し、言論の自由を主張した『アレオパジティカ』を執筆。チャールズ 1 世の処刑を弁護した論文などで、いちやく全ヨーロッパに名声を轟かせるも、激しい職務のために失明。王政復古後奇跡的に処刑を免れ、失意の底からアダムとイブの樂園追放に題材をとった代表作『失樂園』を著した。
バンヤン (1628-1688)	▼17 世紀ピューリタン文学の代表的文学者。バプテスト派（現在プロテスタント自由教会派の最大教派・信徒数 2 千万）の牧師。清教徒革命にさいし、議会軍の一兵卒として参加。後信仰の道に入り、27 歳のころより平信徒ながら説教壇に立つようになる。王政復古による新教各派弾圧の動きの中で、無資格で説教をしたことを理由に投獄され、12 年にわたる獄中生活を送る。この間に 9 冊の書物を叙述。出獄後牧師として各地に遊説旅行を行うも、3 年後に再び投獄。ここで著述したのが天国にいたる道中記『天路歷程』である。出獄後はバプテスト派の中心人物として精力的な活動を続けた。
デフォー (1660-1731)	▼イギリスの作家・ジャーナリスト・詐欺漢・大英帝国スパイ組織の父。あり余る才能を持ちながら、実人生においては破産と裏切りを繰り返した人物として記憶される。代表作は『ロビンソン＝クルーソー』。1702 年アン女王即位後の非国教徒排斥の機運の中で、反語的に非国教徒を撲滅せよと唱えて国教徒の残酷性を訴えるパンフレットを出版し、議会の国教徒の怒りを買って 3 日間のさし台の刑の後投獄される。獄中において政治評論ばかりか獄中の泥棒や殺人犯のインタビュー、有名人のスキャンダル、幽霊話などを満載した新聞を発行。今にいたる英国大衆新聞の原型をつくり、反政府派のジャーナリストとして名声を得るが、その裏では自由を得るために政府高官に反政府派弾圧のスパイ組織結成を提案。許されて出獄後、政府のためのスパイ組織網を組織し、その影の支配者として辣腕を振う。しかしその変節の多い言動が政府からも反政府派からも疑われるようになり、政治活動とスパイ活動を断念。せっぱつまった挙げ句に 59 歳の時に書き上げ、ベストセラーとなったのが『ロビンソンクルーソー』である。
スウィフト (1667-1745)	▼アイルランドに生まれ、聖職者となる。しかし政治に関心を抱いてイギリスにわたり、政界、文壇界の黒幕的存在となり、鋭い論評で恐れられた。アイルランドに帰って人嫌いの傾向に拍車をかけながら 50 代で『ガリヴァー旅行記』を著す。この作品は大人国と小人国のくだりが子供向けに紹介され、ユーモラスなお伽話といったイメージがありますが、本当は当時のイギリス社会批判のみならず、人間に対しても根本的な意義申し立てをおこなった、非常にハードな作品です。最後の馬の国では、馬が万物の霊長で最も優れた生物、人間はヤブーと呼ばれて最も卑しむべき生物として描かれていたりする。
エル＝グレコ (1541-1614)	▼ルネサンスとバロックを結ぶ画家でスペインで活躍し、多くの肖像画や宗教画を残す。妙に細長いその独特な人物描写でも有名。代表作は『オルガス伯爵の埋葬』『聖母昇天』実はこの名はクレタ島出身であることからついたあだ名で「かのギリシア人」という意味。ちなみに本名はドメニコス＝キリアコス＝テオトコプーロス…。受験で本名を書けと出てくることはまずない。たぶんない。絶対ない。なくてよかったよ。
ルーベンス (1577-1640)	▼奔放華麗な画風を持つフランドル出身のバロック絵画の巨匠。代表作は「マリー＝ド＝メディシスの生涯」外交官としても活躍するなど多くの恵まれた素質を持ち、「いうことなすこと、すべてだれにもよろこばれるように生まれついていた」という性格で、最初の妻の死後 53 歳で 16 歳の美少女と結婚。5 人も子供を産ませ、フランドルの豪奢な館で幸福な晩年を過ごす。63 歳で苦しむことなく死去。
ファン＝ダイク (1599-1641)	▼ルーベンスにその才能を最も愛された弟子。しかし、ひとり立ちして後、師の名声は神経質な彼を圧迫。招かれるままイギリスにわたり、宮廷画家として活躍。傑作「チャールズ 1 世像」などを残してイギリス絵画に圧倒的な影響を及ぼした。
レンブラント (1606-1669)	▼光と影を強調する、写実的な画法を確立したオランダのバロック画家。『毛織物商會員』などオランダ盛時の市民生活を描く。しかし、肖像画の第一人者としての名声を獲得しながら、30 代半ば頃から肖像画を描くことをやめ、自己の芸術の確立（有名な団体肖像画の傑作『夜警』は、その始まりを告げる作品）と、聖書物語の銅版画製作に熱中。そのため次第に名声と絵の注文を失い、最愛の妻にも先だたれ、晩年は破産状態となって 63 歳でユダヤ人地区の貧しい家でみとる人もなく死んだ。
ベラスケス (1599-1660)	▼スペインのバロック画家。ルーベンスとの出会いによりその絵は著しく向上したという。優れた肖像画や風景画を残し、代表作は「ブレダの降伏」「女官たち」など。スペインの宮廷画家となり、40 年近い宮廷生活を送り、スペイン王室の深い信頼を受けて、宮廷の要職にもついた。特に晩年は宮廷外交官としての仕事に忙殺され、最後の仕事もスペイン王女とルイ 14 世の婚約に関する煩わしい公務であった。

ムリリョ (1617-182)	▼スペインの画家でベラスケスの弟子。代表作は『聖母受胎』17世紀のスペインで最も多作な画家である。教会の壁画の製作中、誤って足場から落ち重傷をおって数日後に死亡。
ワトー (1684-1721)	▼代表作『シテール島への船出』は、愛の島シテールへの巡礼に旅立とうとする若い男女が木陰に集う様を描いたもので、ロココの時代の到来を告げる作品。以後、貴族の屋外での宴会風景を優美繊細に描く雅宴画で一世を風靡した。もっとも本人は田舎の屋根葺きの親方の息子に生まれている。生涯病身でそれが彼の絵画に独特の憂愁の色をおとしているが結局肺病が原因で37歳で早世。
バッハ (1685-1750)	▼バロック音楽を代表する教会音楽家で近代音楽の父と称される。代表作は『マタイ受難曲』もっともその存命中は、楽長としての名声をごく狭い範囲で得ただけで、作曲家としては無名であった。多産の家系であり、その一族の多くが音楽に関係したことで有名。
ハイドン (1732-1809)	▼オーストリアの古典派音楽家。音楽好きの車大工を父に生まれ、少年合唱団員をふりだしに音楽家としての人生をあゆみはじめる。50歳頃より名声を確立。老境にはいった90年代になると、ますます旺盛に傑作を発表。ソナタ形式を完成し、交響楽における器楽の地位を向上させ、生涯に「告別」など104曲の交響曲を残し、交響曲の父と称賛される。1809年ウィーンに侵入してきたナポレオン軍の砲撃が鳴り響く中で77歳で死んだ。
モーツァルト (1756-1791)	▼幼少より天才音楽家としてその名をヨーロッパに轟かし、ドイツ古典音楽を確立した音楽家。代表作として歌劇「フィガロの結婚」死の床で作曲した「魔笛」など。35歳の晩年は貧困に苦しみ、死んだときには葬儀に集まったのは僅か数人の弟子と知人のみで、しかも雪まじりの悪天候のため墓地に見送ることもできず、その遺体は墓掘り人の一人に共同貧民墓地に埋葬され、数十日後にはその場所すらわからなくなった。
ベートーヴェン (1770-1827)	▼古典学派を集大成し、ロマン主義音楽への道をひらいたドイツの音楽家。「英雄」「運命」などの交響曲で知られる。「英雄」は本来はナポレオンに捧げる意図で作曲され、ナポレオンが皇帝位に就任したことにベートーヴェンが幻滅してその献辞が取り消されたとする有名な説がある。1796年頃から患った耳は1800年頃から悪化し、1815年45歳にして完全に聴覚を失う。
ハーヴェイ (1578-1657)	▼1628年に血液の循環を立証した生理学者・医者。ケンブリッジ大学とイタリアのパドヴァ大学で学び、特にイタリアでは解剖学を学んだ。帰国後ロンドンで開業し、のちに王立医科大学の教授となったのを皮切りにオックスフォード大学の教授やメルトン大学学長を歴任。ジェームズ1世とチャールズ1世の侍医もつとめている。その他、「すべての生物は卵から」という原則をたて、生物の自然発生説を否定したことも重要。
ボイル (1627-1691)	▼イギリス貴族の子として生まれた科学者。フランシス＝ベーコンの実験科学に魅せられ、父の遺産をもとにオックスフォードに研究所を設立。敬虔なピューリタンとして生涯独身のまま実験と研究の生活を送り、気体の圧力と体積に関する法則を発見して気体力学の出発点を確立。一方でチャールズ2世の勅許を得て成立した現存する最古の科学学会として知られる「王立協会<ロイヤル＝ソサエティ>」の設立にも尽力した。
ホイヘンス (1629-1695)	▼振り子時計を発明したオランダの科学者。もともと天体観測に興味を持ち、振り子時計の発明も、観測のために正確な計時が必要であったことによる。レンズ磨きの新しい技術も開発し、自作の望遠鏡で土星の輪を発見。光の波動説の理論でも重要。
ニュートン (1643-1727)	▼1687年の『プリンキピア』で万有引力の法則を発表し、近代物理学を確立。26歳の時に師からケンブリッジ大学の教授職を譲られるほどの天才ぶりを示したが、性格は怒りっぽく、ある種冷酷なところがあったという。後年は錬金術の研究に没頭して、おそらくその時使用した水銀が原因の水銀中毒で、50歳頃より一種の精神異常の傾向を示す。自説の反対者や論争相手には徹底的かつ執拗で陰湿な報復をおこない、61歳で当時最高の科学の権威であるロイヤル＝ソサエティの会長となると、自己を神格化し権威を更に高めるため、協会の行事を宮廷儀礼にならって改変。死ぬまで会長職にとどまり、イギリス学会に帝王として君臨した…こういう人が上司にいと不幸だろうな、かわかりあいになりたくないな、と思うのは私だけではあるまい。
ラプラス (1749-1827)	▼フランスの数学者。天文学者。カントの星雲説を発展させ、宇宙進化論を唱える。1749年貧農の子として生まれ、1827年侯爵として死んだ。その人生はラヴォワジエと対照的で、同じく政治に関与しながら彼はナポレオンの時に内相となり、ナポレオン退位後の王政復古にあたっては巧みにルイ18世に乗り換え、これに仕えて人生をまっとうしている。もっとも政治的な無節操に対する批判は当時からあった。
ラヴォワジエ (1743-1794)	▼質量不変の法則を確立し、近代化学の祖と称されるフランスの化学者。政界に進出し、アメリカ独立革命の時には外交官としてアメリカを援助するなど活躍。1789年のフランス革命の勃発に際しても補欠代議士に選ばれた他、新度量衡設立委員会委員・財務委員会委員などに選出されている。しかし旧制度下で徴税請負人をしてきたことが悲劇を呼ぶ。革命の激化とともに政権を握った国民公会のジャコバン派は、全徴税請負人の逮捕を命令。自首をした彼も友人の科学者たちの嘆願にもかかわらず「共和国に学者は不用である」と断じられ、断頭台にその命を終えるのである。
リンネ (1707-1778)	▼植物分類学を創始したスウェーデンの生物学者。学芸好きの牧師の子として生まれる。大学卒業前にはもう植物学の代講を任されるような秀才であったが、貧しい苦学生であり、婚約者の経済的援助でやっと学位を得るところまでこぎつけた。後に植物学の権威として全ヨーロッパ的な名声を獲得。
ジェンナー (1749-1823)	▼18世紀末に種痘法を確立したイギリスの医者。これによって人類は天然痘の予防法を手に入れ、伝染病撲滅の第一歩をのし取った。故郷の開業医として愛敬とユーモアあふれる性格と、詩や音楽への天分で人気を得ていた人物であるが、自分の子供で実験したという子供向け伝記の逸話は創作である。

文化史人物編：近代ヨーロッパ

ゲーテ (1749-1832)	▼「ギョオテとはおれのことかとゲーテ言い」外国人の名を日本語に移す困難を語るときに必ず引用される言葉である。青年期に疾風怒涛(シュトルムウントドランク)運動を推進し青春文学の傑作『若きウェルテルの悩み』を著して、主人公ウェルテルの作中のファッションが現実に大流行するような影響を与えた。ファッションの影響だけならよかったが、作中主人公が適わぬ恋に苦悩し、ついに自殺すると、同じように自殺する若者が相次いだ。このような現象をウェルテルシンドロームと言うらしい。後に疾風怒涛から成熟した古典主義の文学にむかい、悪魔メフィストフェレスとファウスト博士の伝説に取材して、『ファウスト』を著す。一方でワイマール公国の宰相になるなど政治家としても活躍。ドイツ文学史に巨大な足跡を残した。
シラー (1759-1805)	▼ゲーテとともに疾風怒涛運動を推進。世俗的道德や因習を否定し、感情の解放を主張して『群盗』を著す。一方で歴史家としても綿密な研究を重ね、三十年戦争を舞台に『ヴァレンシュタイン』を、百年戦争を舞台に『オルレアン乙女』の戯曲をものにした。またスイスの独立を描いて『ヴィルヘルム＝テル』を著し、以来伝説の人物であった十字弓の名人テルが実在の人物とみなされるようになった。
ノヴァーリス (1772-1801)	▼18C末に発生し、19C前半に主流となったロマン主義の文芸思潮を代表するドイツの詩人。代表作は『青い花』。22歳の時、13歳の少女ゾフィーと運命的な恋愛をして婚約するも、翌年ゾフィーは結核にかかり16歳で死ぬ。彼のロマン詩はこのゾフィーとの哀切な恋愛をモチーフにしたものである。自身も29歳で肺を病んで死ぬ。ロマン主義の時代は結核の時代であり、“肺を病んだいたいけな美少女”との純愛が大流行した。
ハイネ (1797-1856)	▼ノヴァーリスと共にドイツロマン主義を代表する詩人で、代表作は『歌の本』。一方で彼は少年時代にフランス革命の洗礼を受けた卓越した時代批評家であり、人類解放の闘士であった。フランス亡命中パリでマルクスと知り合い、当時まだ知る人の少なかった彼の共産主義を『暗黒の英雄』と評し、恐るべき確さでその運命を予言したことも有名。しかしその彼も自分の著作がその内容と彼がユダヤ人であると言う理由でナチス時代のドイツで焚書にあうという事態は、思いもよらなかったろう。
スタール夫人 (1766-1817)	▼ルイ16世の財務官としてアンシャンレジームの改革に取り組み、フランス革命の引金をひいたネッケルの娘。フランス革命にはジロンド派として参加。理性と言論の政府を主張してナポレオンと対立し、国外亡命生活をおくる。『ドイツ論』でロマン主義をフランスに紹介。夫スタールとは早くに離別し、多くの男性との交際の後、45歳で年下の青年士官と再婚するというロマン主義を地でいく生涯をおくった。
ユゴー (1802-1885)	▼フランス七月革命を背景に描いた『レ＝ミゼラブル(ああ無情)』でジャンヴァルジャンという文学史に残る主人公(なにしろ平凡社大百科辞典で独立項目で扱っている)を生み出したフランスの作家。ナポレオンの崇拜者であったが、ナポレオン3世には鋭い批判を浴びせ(ナポレオンと血縁関係はないのではと出生の秘密まで疑っている)国外亡命を余儀なくされる。しかしナポレオン3世没落後の第三共和政下のパリに帰還した時には、英雄の帰還としてヴォルテールの帰還にも比すべき熱狂的な歓迎を受けた。死後はやはりフランス国民の神を祭るパンテオンに埋葬されている。
バイロン (1788-1824)	▼「一夜目覚めてすでに天下の詩人」と自ら記したのは、24歳で『チャイルドハロルドの遍歴』を著し、世に熱狂的に迎えられた時のことである。美貌のイギリス貴族として生まれながら、生まれつき足が悪かったこともあって屈折した放蕩の生活を送る。成功後は特にその奔放な女性関係が世の人の非難的となり、ついにイギリスを飛び出して大陸を旅行しながら『ドン＝ジュアン』のような大作を書く。ギリシア独立戦争が勃発すると、フランスの画家ドラクロアなどとロマン主義の視点からギリシア独立援助を訴え、ついに自ら義勇兵として参戦。独立軍の司令官となるも最後は熱病で死亡した。
スコット (1771-1832)	▼歴史に題材をとる物語詩・小説を著したイギリスロマン主義を代表する作家。代表作は『湖上の美人』『アイヴァンホー』。特に『アイヴァンホー』は獅子王リチャード1世やその王位を狙う悪者の弟ジョン、森の義人口ビンウッドなどが入り乱れ、恋あり、冒険あり、活劇ありの騎士物語の傑作。
ホイットマン (1819-1892)	▼『草の葉』を著し、民主主義の詩人と呼ばれたアメリカロマン主義を代表する文学者。綿織り機の発明者と同じ名であるがもちろん別人。南北戦争以前に民主党系新聞の主筆となりながら、新しく生まれる州を全て自由州とすることを提唱して民主党保守派の怒りを買ってその職を追われ、南北戦争後には、南北戦争後のアメリカ社会の物質主義的風潮を鋭く批判した。日本では夏目漱石によって紹介され、有島武郎らに影響を与えた。
プーシキン (1799-1837)	▼ロシアでは現在でもトルストイ以上に人気があるという、ロシアロマン主義の国民作家。名門貴族に生まれながらデカプリストに共鳴して反体制的な作品を書き続け、ついにシベリアに流刑されて、その地で1825年のデカプリストの反乱がニコライ1世に鎮圧されたことを聞く。翌年許されてモスクワに帰るも獄中のデカプリストに同情を隠さず、プガチョフの乱に取材した『大尉の娘』などの作品で民衆から国民詩人視された。しかし彼のその態度に激しい憎しみを抱いた宮廷の高官たちに陰謀を仕組まれ、元フランス近衛兵にして駐露オランダ公使の養子<このパターンは大体男色の愛人>というダンテスという男に妻ナターリアを誘惑され、これをなじったところ逆に決闘状をつきつけられて決闘を余儀なくされて決闘に倒れ、死んだ。
スタンダー (1783-1842)	▼『赤と黒』『パルムの僧院』を著し、フランス写実主義文学の先駆的作家と言われる。ナポレオン軍に参加したナポレオンの崇拜者で『ナポレオン伝』も有名。『赤と黒』の赤は軍服、黒は僧服を意味する。当時のフランスは階級社会であり、貧しい生まれの若者が成り上がろうとすれば軍人になるか僧侶になるかしかなかった。物語は貧しい生まれの美貌と才能に恵まれた青年が僧侶となり、町長の夫人と男爵の娘を誘惑して成り上がろうとして三角関係のもつれから破局を迎える様を描く。復古王政の時代を鋭く批判した政治小説でもある。
バルザック (1799-1850)	▼19Cフランスの社会と風俗を描き出した『ゴリオ爺さん』を中心とする『人間喜劇』の連作小説集で名高く、写実主義文学の祖と言われる。毎日数十杯のコーヒーを飲みながら、夜中から翌日まで十数時間書き続けるという超人的な創作活動が続ける一方で事業欲に取りつかれ、新しい会社を起こしては破産し、新たな創作によって負債を返還するという生涯をおくった。ちなみにこの頃コーヒーは麻薬として扱われていたから、現代の定義でいうと、この人は立派な麻薬中毒患者である。
フロベール (1821-1880)	▼「ボヴァリー夫人は私だ」という言葉であまりにも有名な、写実主義文学の確立者。いなか医者 of 美しい妻の不倫と自殺を描いた『ボヴァリー夫人』(初出時には風俗紊乱の疑いで告訴される)や半自伝的作品『感情教育』が有名。青年期に神経症の発作をおこして以降は世俗との交わりを断ち、ノルマンディー地方の生地ルーアンに隠棲して文学にのみ奉仕する生涯をおくる。モーパッサンは彼の愛弟子である。『紋切型辞典』という、誰もが知っていることばかりを編纂するという奇妙な辞典を構想したことも知られる。
ディケンズ (1812-1870)	▼フランス革命時のパリとロンドンを描いた歴史小説『二都物語』を著した、イギリスの写実主義文学を代表する作家。裕福な家庭に生まれ幸福な少年時代をおくりながら、父が負債不払いで投獄されたため、突如工場の

ゴーゴリ (1809-1852)	▼ロシア写実主義文学の創始者で醜悪な人間をリアルに描き、ドストエフスキーに「笑いの悪魔」と評される。自分の戯曲『検察官』を見て、自分のつくり出した人物の余りの醜悪さに衝撃を受け、こんな作品を書き続けることは社会に有害ではないだろうかと悩みながらも、創作欲に突き動かされ、代表作『死せる魂』第一部を書き上げてしまう。ついで第二部を完成した時、その矛盾は頂点に達し、突如完成した原稿を暖炉に投じ、その翌日から一切の飲食を拒否して衰弱して狂乱状態になって死んだ。第二部は断片しか残されていないが、一人の作家を狂死に追い込んだ作品というのは、読んでみたいと思わないか。
ドストエフスキー (1821-1881)	▼ロシア写実主義文学の世界的巨匠で、人類史上最高の作家、代表作『カラマーゾフの兄弟』は世界文学の最高傑作という評がある。アメリカの現代文学作家カート＝ヴォネガットは言っている。「人生の全ては『カラマーゾフの兄弟』に描かれている」。もっともヴォネガットはこう付け加えている。「でももうそれだけじゃ十分じゃないんだ」。病的な賭博癖の持ち主で賭博の心理を描いた『賭博者』のような作品もある。一部の推理小説ファンが推理小説の最高傑作にあげる『罪と罰』もよく出題される。
トゥルゲーネフ (1818-1883)	▼アレクサンドル2世の農奴解放令に影響を与えたとと言われる『獵人日記』などロシアの農村を題材に知識人の苦悩を描く。ナロードニキを主題としてニヒリズムの言葉を生んだ『父と子』や『処女地』も代表作。自身ロシアの大地主であり、富と名声に包まれて、トルストイやフローベールなどとも交際した。
トルストイ (1828-1910)	▼現実主義と人道主義を迫及し、高級官僚の妻アンナの不倫と破滅を描いた『アンナ＝カレリーナ』、ナポレオンのロシア遠征に題材をとり、自己のクリミア戦争の体験を投影した『戦争と平和』、クリミア戦争を描いた『セヴァストポリ物語』などを著した、ロシア写実主義の巨匠。しかし、50歳過ぎから自分の作品を否定しはじめ、妻と深刻な争いを生じ、82歳にして家出を決行して4日目に汽車の中で熱を出して倒れ、小さな駅の駅長室で駆けつけた家族にみとられながら死んだ。日本の自然主義作家正宗白鳥の有名な言葉。「人生救済の本来のように世界の識者に信頼されていたトルストイが、山の神を恐れ、世を恐れ、おどおどと家を抜け出て、孤独独遇の旅に出て、ついに野垂れ死にした経路を日記で熟読すると、悲壮でもあり滑稽でもあり、人生の真相を鏡に掛けて見るが如くである。ああ、我が敬愛するトルストイ翁」（山田風太郎『人間臨終図鑑』参照）
チャーホフ (1818-1883)	▼ロシア写実主義の短編作家で、没落地主の一家を名園桜の園を舞台に描いた戯曲『桜の園』で有名。『桜の園』は今でもよく高校の学園祭などで上演されるが、名門女子高演劇部を舞台に漫画『桜の園』を描いたのは『カリフォルニア物語』『夢見る頃を過ぎても』の吉田秋生。それをさらに映画化して91年の映画賞を独占したのが日活ロマンポルノ出身の中原俊。
ゾラ (1840-1902)	▼写実主義をさらに強調し、遺伝学などの自然科学の成果も小説に取り組みむことを主張した自然主義文学の作家・理論家。代表作は『居酒屋』で文学理論を説いた『実験小説論』も重要。もっとも入試で一番重要なのはドレフュス事件に際し「私は弾劾する」と真相究明を訴え、世論を盛り上げたことである。このため一時国外亡命を余儀なくされている。真相が究明され、意気揚々と帰国して後、ドレフュス事件をテーマにした小説を執筆中、雪で煙突が詰まった状況で暖炉の火を消さなかったため、不完全燃焼による一酸化中毒で死んでしまった。
モーパッサン (1850-1893)	▼フランスの自然主義作家。母がフロベールの親友の妹であった縁からフロベールに師事。貴族の家に生まれた女性が、幸福な少女時代と婚約時代を経た後、結婚した夫に裏切られ、我が子に裏切られていく生涯を冷厳に描いた『女の一生』（原題は「ある生涯」）で有名。この小説は出版されるやベストセラーとなり、トルストイにも絶賛されたが、作者は30過ぎから早くも梅毒が原因の視力障害、偏頭痛、幻覚に苦しめられ、42歳の時についに発狂しパリ郊外の精神病院に収容。架空の人物相手に話をしたり、花壇の前に立ち止まって「そこにはこれを植えよう。来年になるとモーパッサンの子供が生えてくる」と言ったという症状を残した後、死んだ。
イブセン (1868-1906)	▼ノルウェーの自然主義作家で代表作は戯曲『人形の家』この作品は一人の人間として自立して生きたいと、夫と子供を捨てて家出するノラという女性を描き出して、世界各地の婦人解放運動に火をつけたことでも有名。日本でも不倫騒動で世を騒がせた島村抱月と松井須磨子のコンビで上演され、「ノラ」は「新しい女」の代名詞となった。もっとも教養も手に職もなく、甘やかされて育った女性が当時の閉鎖的な社会に飛び出しても、のたれ死にするか愛人として生きるか売春婦となるかしかないじゃないか、との批判をどこかで読んで、なるほどそれはそうだと思った覚えがある。
ストリンドベリ (1849-1912)	▼『令嬢ユリエ（ジュリー）』『痴人の告白』『死の舞踏』などを著したスウェーデンの自然主義作家・戯曲家。船会社を営む父とその女中であった母の間に生まれる不幸な生い立ちの下で攻撃的・論争的な性格の持ち主となり、女性に対する極端な愛と極端な憎悪の間を揺れ動いて三度の結婚生活に破綻。精神分裂病の傾向があり、女性不信を描いたその傑作群も、精神分裂病特有の被害妄想、追跡妄想の産物と言われる。遺伝学や精神分析を作品に生かそうというのが、自然主義の主張の一つであるから、これは極めて皮肉な現象。
ボードレール (1821-1867)	▼退廃の美を漂わせた詩集『悪の華』で有名なフランス耽美主義の詩人。アメリカの異端の作家エドガー＝アラン＝ポーの紹介者としても知られている。21歳で亡父の莫大な遺産を相続し、わずか2年でそれを使い果たし、以後は一生借金漬けの生活をおくった。苦境を脱するため1857年に出版された『悪の華』は少数の識者の評価しか得られなかったばかりか、公序良俗に反するとされて罰金刑に処されてしまい、更なる苦境に陥った。世紀末になって象徴主義の詩人から先駆者として評価されたが、その名声の確立には死後50年を要した。
ヴェルレーヌ (1844-1896)	▼「巷に雨の降るごとく／わが心にも涙ふる…」と詩ったフランス象徴主義の代表的詩人。オランウータンと自虐した醜貌の持ち主であったが、詩名もあがり、美しい妻を得、パリ市役所という安定した勤め先も得て、さてこれから平凡であるが幸福な生活を築いていこうとしたまさにその時、彼が「わが悪霊」と呼んだ大天才美少年詩人ランボーが眼の前に出現。運命を狂わせていく。ランボーに魅せられ、仕事も妻も全てを捨て、ランボーと共にイギリスやベルギーを放浪する旅に出てしまい、その旅の果てに自分から離れようとするランボーを銃で狙撃し、監獄に二年間放りこまれてしまうのである。その間にランボーには去られ、妻からも離婚を宣言され、出所後は新たな愛人の美少年レチノアとともに農場経営を試みてうまくいかず、魔酒アプサンに蝕まれ、詩人としての評価が高まっていくのと反比例するように詩想も枯れてろくな詩もつくれなくなり、各地の施療院を転々とし、最後は同棲していた老売春婦の部屋で死んだ。これほどの転落の生涯もちょっと珍しい。

ランボー (1854-1891)	▼「見つけたぞ／何を／永遠を／それは太陽とつながった海だ」ヴェルレーヌ、マラルメとともに象徴主義の代表的詩人とされる彼は、『地獄の季節』『イリュミナシオン』をはじめとする詩の全てを20歳頃までには書き終えていた早熟の大天才であり、以後は一切詩を捨て、各地を放浪して、37歳の生涯の最後の10年はアフリカ各地を転々として過ごした。
ワイルド (1856-1900)	▼ヘロデ王の娘で洗礼者ヨハネに異常な愛欲を抱き、舞踏の披露の報酬にヨハネの首を要求したサロメの伝説に取材した『サロメ』や『ドリアングレイの肖像』で有名なイギリス耽美主義の作家。背徳の天才として社交界の寵児となるも、39歳の時アルフレッド＝ダグラスという若い貴族と愛人関係になり、その父親から非難されたために訴訟したところ逆に男色罪で投獄され、2年後に出所した時には名声も失い、セバ스티アン＝メルモスと変名してフランスにわたり、飲んだくれの生活を続けた挙げく、パリの安ホテルで死んだ。死因は遠く20歳の頃かかった梅毒が脳に及んでの脳膜炎である。一部の人の夢をまたまた壊してしまうかもしれないが、人間の複雑さを示すためにあえて付け加えておくと、この人が傑作童話「幸福な王子」の作者です。
マーク＝トウェイン (1835-1910)	▼『トムソーヤの冒険』『ハックルベリーフィンの冒険』などであまりにも有名な、アメリカ国民文学の創始者。本名はサミュエル＝ラングホーン＝クレメンズであり、船乗り言葉で“二尋”を意味するこの筆名は、南北戦争勃発まで子供時代より憧れていたミシシッピ川の水先案内人をつとめていたことに由来する。南北戦争勃発で職を失うと新聞記者に転じて活躍し、一方で小説の執筆を開始。最初の作品は南北戦争後、グラント大統領のもとで腐敗したアメリカの現状を痛烈に批判した『金メッキ時代』である。この「金メッキ時代」という言葉は、そのまま南北戦争後の社会矛盾が拡大した時代風潮を示す歴史用語となった。入試でも出題例があるので要注意。富豪の娘と結婚し、国民的作家として尊敬を集めて大邸宅を構え、専用列車で旅行するような生活をおくるが、作品やこの生活から想像されるものとは裏腹に、晩年は打ち続く家族の不幸もあって、暗い性格と人間観の持ち主になっていたという。
ゴヤ (1746-1828)	▼スペインの画家。自ら「わが師は自然とベラスケス及びレンブラント」と語ったようにフランス画壇の流行とは一定の距離を保った。スペインの宮廷画家となり、1800年作の「着衣のマヤ」と「裸体のマヤ」のようなあぶな絵的な絵も描いて異端審問所に付け狙われたりしたが、1792年に聴力を失って以降は内省的な傾向を強めていたと言われる。その彼の絵に決定的な転機をもたらしたのは、ナポレオン軍の侵入とそれに抗する民衆の反乱、いわゆる半島戦争であった。彼はナポレオンの兄ジョセフが国王となってもなお宮廷画家の地位を保っていたが、その地位を失う危険と、聴覚を失った身の不自由をおして、スケッチブックを手に戦場に出て、その悲惨さを嘔吐を繰り返しながらも克明に描き留めていった。その成果はフランス軍による反乱民衆の処刑を描いた大作「1808年5月3日」や、死後刊行された版画集「戦争の惨禍」に結実した。晩年には悲観的傾向を強め、“聾者の家”と名づけた自宅の壁に、「わが子を食らうサトゥルヌス」のような不気味な“黒い絵”の連作を残した。
ダヴィド (1748-1825)	▼18世紀末から19世紀初めにかけてフランスの宮廷中心に発展した古典主義絵画の代表者。フランス革命にも参加。有名な「テニスコートの誓い」や、ジャコバン派の指導者マラーの暗殺を描いた「マラー」、処刑直前のマリーアントワネットのスケッチなど、フランス革命関係の資料によく出てくる絵は彼の手によるものである。国民公会議員としてルイ16世の処刑にも賛成票を投じ、テルミドールの反動でロベスピエールが倒れたときには連座して投獄されている。ナポレオンが政権を握ると、その首席宮廷画家となり、フランス画壇に君臨。「ナポレオンの成聖式と皇后の戴冠」などを描いた。
アングル (1780-1867)	▼ダヴィドのアトリエに学び、古典主義絵画の代表者、伝統の守護者として18歳年下のロマン派のドラクロワの好敵手とみなされた。ドラクロワが彼の絵を「不完全な知性の完璧な表現」と評すると、彼の方は展示会場にやってきたドラクロワに対して「糞の臭いがする」とやり返したというエピソードが伝わっている。理想的な美を表現するためには、あえて不自然な形に人体を歪曲して表現することもし、批判者からは「甲状腺障害の人物画」と批判された。代表作「グランド・オダリスク」にいたっては女性の背中の曲線の美しさを強調して異様に長く背中を描いたため「余計な椎骨が3本もある」と評されている。また、エロティックな…というより、「すげべな」と言った方がわかりやすい絵が多いことも特徴でなかでもきわめつけの「トルコ風呂」はなんと80歳過ぎの作品である。
ジェリコー (1791-1824)	▼縦横4.91m×7.16mの巨大な絵画「メデュース号の筏」で、ロマン主義絵画の出発を告げた画家。この絵は1816年におこったフランス海軍の軍船メデュース号の遭難事件に題材をとり、筏で漂流し死んだ仲間の肉を食べて餓えをしのいでいた遭難者たちが、今まさに救出されようとしている劇的瞬間を描き出したものである。古典などに題材をとった新古典主義が支配していたフランス画壇に、この絵は激しい衝撃と賛否両論の嵐を巻き起こした。が、画家自身は33歳で落馬事故で早世し、良くも悪くもこの作品のみで記憶されることになった。
ドラクロワ (1798-1863)	▼ジェリコーの後輩にあたり、「メデュース号の筏」製作にあたっては、自らモデルの一人として協力している。ジェリコー亡きあとは、文字通りロマン主義絵画を代表する画家として活躍。革命政府、ナポレオン政府の高官を父として生まれた（タレイランが実の父であるとの説もあり）彼は革命への情熱を秘めて時事的話題も取り上げ、トルコの圧政（実は西欧人の空想の産物で、オスマン帝国は歴史上もっとも異教徒と異民族に寛大な帝国の一つであるのだが）に苦しむギリシアの人々を描いてギリシア独立戦争への支援を訴えた「キオス島の虐殺」や1830年の七月革命に取材した「民衆を導く自由の女神」の作品を残している。文学者ユゴーや音楽家ショパンなどのロマン主義者とも親しく交流したが、フランス画壇においては異端の画家扱いされた。
クロー (1796-1875)	▼19世紀半ば以降に現れた、ありのままの自然を描こうとした自然主義絵画を代表する人物。両親により画業に専念する許可を与えられたのは、1822年26歳の時で、かなり遅い出発である。1846年にはレジオン・ドヌール勲章を受け、48年には画家仲間の投票によって榮譽あるサロンの審査員になっているが、それは彼の絵の実力ではなく、親切で世話好きな性格による部分が大きい。世間からは凡庸な画家と思われ、その絵が全く売れず、経済的に彼を支え続けた両親からすら才能を期待されていなかった彼が、突如評価され流行画家となったのは、1851年より描き始めた風景画によってである。銀灰色のペールがかかった朝もやや夕暮れという叙情的な、あるいは感傷的な風景画は爆発的な売れ行きを示し、もう60歳近くになっていた彼は、初めて自分の絵で生活費を得ることが可能になった。しかし押し寄せる注文に応えて類型的な風景画を大量に描いたこと。生存中の1865年ころから既に大量の贋作が出回り始めたことは、「2000点の油彩画を描き、そのうち5000点はアメリカにある」という有名な言葉に示されるように、現在でも世界中で、彼が描いたと推定される数倍の絵が、彼の絵として展示されているという事態を招いている。

ミレー (1814-1875)	▼「落穂拾い」「晩鐘」などで有名で、特に日本での人気は圧倒的なものがある。画家になってから死ぬまでフランスの寒村バルビゾンに住み、農民の労働風景を描いて自然主義風景画に新たな局面を開く。またバルビゾンに住んだ彼らの活動から、フランスの自然主義風景画家を、バルビゾン派と呼ぶようになった。40代半ば過ぎまでその絵は認められず、妻と9人の子を抱えてひどい貧乏に苦しめられ、一時は自殺を覚悟するほどであったが、以後ようやく生活も安定した。日本では農民の画家、労働者の画家として崇高なイメージに祭り上げられたこともあったが、彼自身は農民とは一定の距離を置き、また人間的弱点も多分にあったことが知られるようになった。もちろん、そのような生身の人間の苦悩こそが、作品の魅力を生むのである。
ドーミエ (1808-1879)	▼19世紀半ば以降フランスにおこった社会の現実を客観的に描写しようとする写実主義運動の、絵画面での代表の一人。1830年代に国王ルイ＝フィリップを揶揄する政治漫画を多く発表したのが、そのために6か月の禁固刑を受けている。しかし政治漫画家としては有名であったが、その油彩の絵は当時はほとんど売れず、晩年は盲目状態となり、コローの提供してくれた小さな家で死ぬ。
クールベ (1819-1877)	▼フランス写実主義を確立した画家。「石割り」は名も無い石割り人夫の仕事の様子を描いて、伝説や歴史上の人物を描くだけであった従来の絵画に対し、絵画の主題としては、歴史上の人物であろうと一般の労働者であろうと平等であることを主張した作品。もちろんその背景には、フランス産業革命の進展による、ブルジョワとプロレタリアートの地位向上とそれによる共和主義、社会主義の盛り上がりがある。自身共和派でしかも「無政府主義の父」プルードンの友人であり、パリコミューンにも参加して、その崩壊後は6か月の禁固処分を受けてもいる。
マネ (1832-1883)	▼1863年の「草上の昼食」65年の「オランピア」で、その絵の風俗上のスキャンダラスな内容と、日本の浮世絵の影響を受け、ヨーロッパ絵画の伝統であった「遠近法」の克服を試みた平面的描写で、フランス画壇に衝撃を与える。やがてモネ、ドガ、ルノワールらが彼の周囲に集まるようになり、光の描写を追及する印象派の運動が始まったため、印象派の祖とされたが、マネ自身は印象派運動に直接加わっていたわけではなく、実生活では勲章と名声にあこがれる世俗的な社交家であったといわれる。
モネ (1840-1926)	▼フランス印象派を代表する画家で、“印象派”の名称も、彼らのグループの第一回展覧会に出品された彼の「印象・日の出」と題された絵に由来する。もっともその絵は、線の描写に重点を置く従来の画壇になかなか認められず、第一回展覧会も批評家からは酷評され、先の“印象派”の言葉も、ある批評家によって嘲りの意をこめて使用されたのが始まりである。マネやルノワールも描いた美しいモデルカミーユを妻としたものの、その絵は売れず生活は苦しく、日々の食事にも事欠くことがあったと言う。しかも79年に最愛のカミーユは、32歳で病に倒れてしまう。その時瞬間瞬間に移ろいゆく情景を描きとめることを追及し続けた彼は、死にゆく妻を克明に描き続けた。画家の業を感じさせるエピソードである。20世紀に入って認められるようになった時には、視力の低下によって細部の認識が不可能になっていたが、その半盲の状態を逆用して、網膜に映るかすみ状の映像を色彩が解け合う光線として表現。特にセーヌ川より水を引き入れた自宅の睡蓮の池を描いた連作が有名である。その死の時には、首相となっていた友人クレマンソーによって国葬に準じた葬儀が営まれた。
ドガ (1834-1917)	▼踊り子や競馬などの動きのあるものの一瞬の姿を、逆光や人工照明の演出の下で捉えた印象派の画家。代表作に「踊り子」。晩年はモネと同様視力を弱め、パステル画を愛用して傑作を残した。モネやルノワールが若年の頃生活に苦労したのちに、成功の証として裕福な暮らしを手に入れていったのとは対称的に、富裕な銀行家の子として生まれた彼は、不遇時代にも比較的恵まれた環境で製作を続けることができたが、1874年に父が負債を残して死に、加えてアメリカで事業に失敗した弟の負債も肩代わりする羽目になって経済的に苦境にたち、結局死ぬまでそこから脱却することが出来なかった。もともと鋭く激しい性格で一生妻を持たず親しい友人もほとんどいなかった彼は、訪れる絵の賛美者やインタビューの記者を手荒く追い返すなど、晩年はますます孤独の中に閉じこもって生涯を終えた。
ルノワール (1841-1919)	▼「水浴女」など晩年の裸婦を描いた絵で有名な印象派の画家。職人の子として生まれ、陶器の絵付師として出発。モネと知り合い、おなじ主題をしばしばともに画架をならべて描いて切磋琢磨しながら、印象派の手法を見いだしていく。後半生は変形リウマチに苦しめられ、腕や脚を満足に動かすことが出来なくなった。そのため時には絵筆を手にとり縛りつけてまで描いたという。日本の梅原龍三郎が師事している。
セザンヌ (1839-1906)	▼19世紀末印象派から出発して、物体や自然の根源的形態の把握を求めた後期印象派を代表する画家。代表作は故郷の名山を描いた「サン＝ヴィクトワール山」の連作。自然物を、円錐・球・円筒として捉えようとするその絵画理論は、ピカソら立体派の原点となり、20世紀絵画はセザンヌに始まると言われるほどの決定的影響を現代美術に与えた。が、その大胆で自由な独創性ゆえに当初は「ピストルで描いた絵」などと評価されてまったく認められず、また第一回印象派展にも出品して印象派運動に初期からかかわっていたにもかかわらず、印象派内部にも彼の絵については否定的な見方が強かった。長い不遇時代には、幼少からの親友であった自然主義作家ゾラとの喧嘩別れも経験している。ドガと同じく富裕な銀行家を父としたが、その父とも摩擦が絶えなかった。ところが皮肉なことに、ドガとは逆に反抗していた父が死んでその遺産が転がり込み、生活の安定を得るようになってきた1886年頃から時代の先駆者として評価されはじめ、死の翌年の回顧展が大成功に終わって、前衛芸術の英雄としての名声が確定する。
ゴーギャン (1848-1903)	▼「タヒチの風景」など、太平洋のフランス領タヒチ島で多くの独特な傑作を描いたことで知られるフランス後期印象派の画家。有能な株仲間買人として社会的な成功をおさめ、良き妻と5人の子に恵まれ、家庭においては善良な夫であり、日曜画家として時たま絵筆をとるほか、印象派の絵の収集をするだけであったのが、35歳にして突如それまでの生活を捨て、職業画家として立つことを決意。しかし彼の絵はまったく売れず結果として妻と5人の子を捨てることになる。赤貧の生活の中で絵を描き続け、一時ゴッホと共同生活を送ったもののゴッホと喧嘩してゴッホに耳を切らせる事件をおこして破綻。43歳の時タヒチにわたる。そこで膝の痛み、貧困、孤独に悩まされながら現地の女性と同棲して数々の傑作を描いたが、やはりほとんど認められることなく55歳で死んだ。サマセット＝モームが代表作「月と6ペンス」でモデルとした。
ゴッホ (1853-1890)	▼「太陽」「ひまわり」など強烈な色彩と線の絵で知られるオランダ生まれの後期印象派の画家。日本の浮世絵に大きな影響を受け、そのタッチは、油絵の具で安藤広重の浮世絵版画を模写する中で得られたものだという。生前その絵はまったく認められず、買い手がついたのはわずか一枚だけである。美術店員や学校教員や牧師見習いなどの職についたが、いずれも解雇され、幾度かの恋愛もすべてうまくいかず、みじめさのどん底で画家として生きるしかないことと決意し、深い信頼で結ばれた弟のテオドルの経済的援助を受けながら画家としての生

涯をおくる。が、画家としての生活も悲惨な色合いに満ちている。彼には精神病の資質があり、その上アルコール中毒であった。彼が死の2年前に住んでいた南仏アルルの市民たちは、彼を家族のもとにひきとらせるか、精神病院に入院させてもらいたいと市長に嘆願書を出している。それからまもなくの1889年12月共同生活を送っていたゴーギャンと喧嘩して自分の左の耳を剃刀でそぎ落とし、馴染みの娼婦に送るという異様な事件をおこしてアルルの精神病院に収容。そののちパリ北方のオーヴェル村で最後の絵を残した後、ピストル自殺を計り、二日後駆けつけてきた弟テオドルの見取る前で死んだ。なお弟のテオドルも悲しみのあまり錯乱して精神病院にいれられ、その6か月後に死んでいる。死後その絵は、現代絵画運動の高揚で高く評価されるようになり、特に野獣派のマティスに影響を与えた。

ロダン

(1840-1917)

▼近代彫刻を確立したと言われるフランスの写実主義彫刻家。代表作は「地獄の門」（有名な「考える人」はこの中の一作品）40歳過ぎてから国民的彫刻家として認められ、大きな尊敬を受け、カミーユ＝クロードル（後に駐日大使となった詩人ポール＝クロードルの姉）という美と天才を兼ね備えた女弟子を愛人とする。一方で彼は世間からは隠そうとしていたものの、20代半ばから事実上の妻としていた農民出身の愚直な女性ローズがあり、結局はカミーユを捨ててローズをとった。事実上彼の共同製作者でありながら、いやそれゆえに自己の発表する作品をオリジナリティーの欠如した師の模倣とみなされて芸術上でも傷ついていたカミーユは、捨てられてついに発狂し、精神病院にいれられる。その生涯はフランスの女優イザベル＝アジャニーの主演で「カミーユ＝クロードル」として映画化され話題となった。

シューベルト

(1797-1828)

▼「未完成交響曲」を作曲したオーストリアの作曲家でロマン派音楽家。近代歌曲の創始者。代表作は「美しい水車小屋の娘」など。終生ベートーヴェンを尊敬し、その葬儀では棺をかついだ一人である。またその墓は遺言によりベートーヴェンの隣にある。

シューマン

(1810-1856)

▼ドイツのロマン派音楽家。代表作「子供の情景」哲学博士号を持ち、文学の才にも恵まれ、音楽批評家としてもロマン派の運動を推進。メンデルスゾーン、ショパン、ブラームスの音楽の価値を広く紹介したことで知られる。が、彼の作曲家・音楽批評家としての出発はピアニストとしての挫折に始まっている。「シューマンが指の強化装置に熱中した余り、それで筋肉を痛めピアノを断念し作曲家になったのは有名な話である。シューマンは右手の中指を壁に固定した紐でしばり、他の四本の指が弾いているあいだその中指がつられて動くことがないようにした。これを熱心に続けているうち、その縛った中指がマヒして動かなくなってしまった。それだけでなく、やがてマヒは右手全体に及んで、全く使いものにならなくなってしまったのである」一中村紘子「ピアニストという蛮族がいる」にもかかわらず、その後多くのピアノ曲を作曲するとともに近代的ピアノ技術を開拓した。しかしその障害に加えて、繊細な神経ゆえの精神病に悩まされ、1854年、急速に悪化した病のため、友人の集まっていた部屋を抜け出し、ライン川に身投げする。この時は救出されたものの、以後精神病院に療養生活を送り、それもむなしく1856年に46歳で死んだ。

ショパン

(1810-1849)

▼ピアノの詩人と称されるポーランド出身のロマン派音楽家。ピアノ音楽の完成者。幼少より天才を発揮し、ポーランドのモーツァルトと称賛された。国外留学を決意し恩師と親友たちの捧げる別離の歌におくられ、ポーランドの土を入れた銀杯を受けて祖国を去ったのは1830年20歳の時であるが、まさにその20日後、フランスの七月革命に始まるヨーロッパの革命の波はポーランドに及び、ロシアからの自立を求める独立革命がおこる。しかし共に出国した親友が独立軍に参加するために帰国し、ひとり残って孤独と焦燥の中で戦況を見守っていた彼に届いたのは、独立軍がロシアのニコライ1世に鎮圧され、ウィーン体制で成立していたポーランド立憲王国そのものも、消滅させられたという知らせであった。この時、気も狂わんばかりの悲憤の中で作曲したのが「革命」であるといわれる。この体験はポーランド独立を恋願うロマン主義者として彼を決定づける。31年よりフランスに居を定め、ロマン主義絵画の代表者ドラクロワなどと交流する一方で、女流作家ジョルジュ＝サンドとの運命的な出会いと離別を経験。ピアノの名手にして天才的な作曲家としての名声を確立し、熱狂的な女性ファンを獲得するが、生来虚弱で早くも25歳の時に最初の咯血をし、1849年39歳で死んだ。

ワーグナー

(1813-1883)

▼楽劇を創始し、多くの北欧神話にもとづく歌劇を作曲してドイツ＝ロマン派を大成した音楽家。代表作は「神々のたそがれ」「トリスタンとイゾルデ」など。51歳の時南独バイエルンの青年王ルードヴィヒ2世（狂王として有名）に国賓としてミュンヘンに招かれた頃から、大作曲家としてようやく世に認められるようになる。以後リストの娘にしてハンス＝フォン＝ビューローの妻コジマを不倫の恋愛の末に奪ったり、ニーチェとの交流と決別を経験するなど様々なエピソードを残しながら精力的に傑作を発表。バイロイトに専用の劇場を建設し、年に一度開かれるバイロイト音楽祭は現在にいたるまで続いている。ただ、反ユダヤ主義者でもあり、ドイツ民族の音楽家としてナチスドイツで称揚されたため、イスラエルでは公式の上演は事実上禁止されている。

チャイコフスキー

(1840-1893)

▼民族的伝統を表現しようとする国民音楽の、ロシアを代表する作曲家。特に「白鳥の湖」が有名。同性愛的傾向があり、結婚生活は不幸でわずか三週間で破局をむかえ神経衰弱となって自殺未遂事件をおこしている。全ヨーロッパに名声をとどろかせ、称賛を受けるようになった後も厭世癖は強まっていっていった。1893年ペテルスブルクで大流行していたコレラに感染して死んだが、それは周囲の制止をふりきってネヴァ川の生水を飲んだ結果であり、実質自殺というべきである。死因については、同性愛の暴露を恐れてヒ素で自殺した、あるいはある公爵の甥との同性愛が発覚し、両者の名声と社会的地位から秘密弾劾裁判が行われ、名誉を守るべく自殺の判決が下されてそれに従った、との説もある。

ドビュッシー

(1862-1918)

▼現代音楽の源流である印象派音楽を創始したフランスの作曲家。小市民の家に生まれ、音楽教育を受ける環境になかったが、象徴派の詩人ヴェルレーヌの義母に才能を見いだされて無料でピアノレッスンを受けられるようになり、11歳の時にはパリ音楽院に入学を許可。その後チャイコフスキーの保護者として有名なフォン＝メック夫人の家庭ピアニストとなったり、マラルメの主催する象徴派詩人のサークルに出入りしたりしながら、次第にそれまで圧倒的であったワーグナーの影響を脱し、自己の立場を確立していった。代表作「牧神の午後への前奏曲」は1991年の日本で紀子様が胎教に使用しているというので話題になった。直腸癌のため、1918年第一次大戦でドイツ軍の爆撃を受けるパリで死亡。

ベンサム

(1748-1832)

▼“最大多数の最大幸福”という言葉掲げ、個人の幸福の追及と社会全体の福利の調和を目指す功利主義哲学を創始。第一次選挙法改正にも努力した。看守の人数が少なくてすむ円形刑務所の設計に熱中したり、自らの遺体をミイラとしてロンドン大学に残すなどの奇行でも知られる。もちろんそのミイラは現存している。

J.S. ミル

(1806-1873)

▼父はベンサムの門弟兼友人で、功利主義派あるいはベンサム派とよばれる一派を確立したジェームズ＝ミルである。幼少より父の厳しい教育を受け、3歳でラテン語、8歳でギリシア語を学んだ。功利主義者としては幸

	福に量だけでなく質的な差があるとし、“満足した豚であるより、不満足なソクラテスであった方がいい”という言葉を残す。またコントの実証主義を導入し、古典派経済学を集大成した業績も重要。20代半ば頃よりテレー夫人と知り合い交際を続けたが、結婚できたのは彼女の夫が死んだ20年後である。しかしこのことが世人ばかりか家族や友人の非難を受けたために二人だけの生活に閉じこもり、彼女の示唆と協力で代表作『自由論』を書き上げるも、夫人は結婚7年目に死んでしまう。この経験を基に書かれた『婦人の隷従』は、婦人解放史上の記念碑的作品とされている。1873年に「私の仕事はなし終えた」の言葉を残して死んだ。
コント (1798-1857)	▼経験によって確かめられた事項にのみ知識の源泉を見いだそうとする実証主義哲学を創始し、社会学の祖とされる。空想的社会主義者サン＝シモンの弟子である。「はじめて『社会学』を打ち立てた哲学の天才オーギュスト＝コントは背低く足短く、その醜さの自覚から27歳のとき売春婦と結婚した。彼は『実証哲学講義』の大著にとりかかりながら、貧しさのため妻が昔の商売で金を稼いでくるのをとめることが出来ず、その矛盾した生活の苦悶から精神異状を呈して、いちどセーヌ川に投身したほどであった」―以上人間臨終図鑑より引用。
スペンサー (1820-1903)	▼ダーウィンの進化論を社会現象にもあてはめ、社会進化論を説いたイギリスの哲学者。科学と宗教を調停して科学者を宗教の呪縛からときはなつたことでも有名である。しかし進化論の社会現象への適応は、特に19世紀末の欧米において俗化されて広まり、例えば適者生存や生存競争などの考えが、富める者の貧しいものへの優越、白色人種の有色人種への優越、ヨーロッパによるアジア・アフリカ植民地化の正当性などを弁護するものとして一般化されて、多大な悪影響を今に残している。
キェルケゴール (1813-1855)	▼『『あれか・これか』『死にいたる病』などで余りにも有名なデンマークの哲学者。ニーチェとともに実存主義哲学の先駆者とされる。ヘーゲルの哲学体系が個人の救済につながらないことを批判し、全体の真理でなく個人の真理こそが重要であるとした。内面的な葛藤から1840年レギーネ＝オルセンと婚約しながら、翌年それを破棄。以後独身のまま42歳で死んだ。
ショーペンハウエル (1788-1860)	▼インド哲学の影響を受け、『意思と表象としての世界』を著して“世界の本質は盲目的な生への意思である”とし、厭世哲学を展開。しかし彼は厭世哲学の帰結として自殺を称賛しながら、自身の生活はカントにならった規則正しいもので、昼と夜を街のレストランでとり、冷水摩擦をかかさず繰り返して72歳まで長命した。
ニーチェ (1844-1900)	▼19世紀最大の哲学者にして現代思想にもっとも大きな影響を与えている人物。“神は死んだ”と、キリスト教を弱者の道徳として否定。ニヒリズムを克服する超人を説いて超人哲学を樹立『ツァラトストラはこういった』は青春の必読書。実生活は不器用でルー＝サロメ（後に恋人として詩人リルケに多大な影響を与える）と友人パウ＝レーとの奇妙な三角関係は不幸な結末を迎え、生涯を独身でとおす。あわれみこそが、精神的悪の根源であるとしながら、1890年の1月、御者によってむち打たれる馬を見て激高し、馬の首を抱きしめて失神。昏睡から醒めた後は完全に発狂し、生涯の最後の10年を廃人として過ごした。原因は遠い青年期にかかった梅毒が、脳にまで進行した脳梅毒ではないかといわれている。
リスト (1789-1846)	▼古典派経済学に対し、民族の歴史的特殊性を重視する立場から歴史学派経済学を創始。主著は『政治経済学の国民的体系』。自由貿易を説くイギリスの古典派経済学に対して、産業革命がイギリスより遅れたドイツ経済を先進国から守るため、発展段階の遅れた国民経済は国家の保護を必要とするとして保護関税貿易を主張。またドイツ関税同盟の結成にも尽力した。しかし彼はその自由主義思想ゆえに故国に入れられず、一時アメリカに亡命を余儀なくされ、晩年もその政策に対する理解を得られずまた官僚主義を批判し続けたために迫害され、孤独と病苦の中でピストル自殺をとげた。
サヴィニー (1779-1861)	▼法は各民族に固有なものであるとして、人類に普遍的な法を考える自然法思想や啓蒙主義思想を排撃し、歴史法学を主張。主著は『現代ローマ法の体系』。ドイツにおけるロマン主義の高まりと民族主義の高揚、そこから由来する歴史研究の傾向を代表する人物であり、時代の旗手としてプロイセンの立法大臣やベルリン大学の総長などの要職を歴任した。
ランケ (1795-1886)	▼19世紀最大の歴史家と言われ、史料を厳密に科学的な手法で分析して“それは本来いかにあったか”の解明をめざす近代歴史学を確立し、『世界史』を著す。ただ、彼の歴史学は宮廷中心の政治史に終始するもので、民衆がいかに生き、何を考えていたのか、というような視点は欠如している。
マイヤー (1814-1878)	▼ドイツの物理学者。エネルギー〈不滅〉保存の法則の発見者の一人。もともと医者で、ラヴォワジエの質量不変の理論から考察をすすめて、エネルギー不滅の着想を得る。独力で研究に没頭し、1842年には早くもエネルギー不滅の理論を明らかにしている。しかし彼の研究はなかなか認められず、研究誌におくる論文もほとんど掲載されなかった。そして1850年代になってその先駆的研究が評価され始めた時には、彼は家庭の不幸が原因の精神病で精神病院での生活をおくっていたのである。
ヘルムホルツ (1861-1894)	▼1847年『力の保存について』という画期的な論文を著し、マイヤーとともにエネルギー不滅の法則の発見者とされる。マイヤーがこの理論に没頭し、次々と論文を著しながらほとんど相手にされなかったのに対し、彼は物理学者であるとともに生理学者であり、というよりも自然科学のあらゆる分野に独創的な研究をおこなう指導的な科学者で、エネルギーの不滅の法則は、彼の広範な業績のごく一部に過ぎない。
ファラデー (1791-1867)	▼19世紀前半に電磁気学の基礎を確立した物理学者。中学の理科の授業で、左手の法則・右手の法則をやったはず。デビューした頃のビートたけしがネタに使っていた。ロンドン郊外の鍛冶屋の子として生まれ、13歳で製本屋の小僧に出され、そこで仕事のかたわら本を読みふけて自然科学に志し、苦学の末、王立研究所の助手に採用。優れた業績をあげて教授にまで進んだ。科学入門の書に名著『ろうそくの科学』がある。

文化史人物編：中国編

孔子 (前 551 頃 - 前 479)	▼魯の国の年代記『春秋』を編纂して（もっとも近年の研究では、『春秋』は直接孔子が関与したものではないというのが定説になっている）春秋時代の言葉を残し、死後弟子が編纂した『論語』で知られ、後世聖人としておおいに尊敬されたが、その一生は不遇の一生である。50 を過ぎて内紛により官を辞し、自分の理想を受け入れてくれる名君を求めて、弟子を連れて諸国を放浪するも、ついにどこからも受け入れられず、70 過ぎて故国に帰り、弟子の教育に専念。このあたりはギリシアのプラトンとよく似た境遇である。しかしプラトンは弟子アリストテレスを持ったが、孔子はその最も頼みとし「一を聞いて十を知る」と絶賛した弟子顔回を晩年に失い、「天は我を滅ぼした」と悲嘆ししなければならなかった。さらに追い打ちをかけるようにその翌年には最も愛していた弟子子路が衛の国のクーデターに巻き込まれ、殺されてシオカラにされてしまう。
孟子 (前 372 頃 - 前 289 頃)	▼戦国時代の儒家。仁義孝悌を重んじ、性善説を唱え、王道政治を説いて易姓革命を認めた。孔子と同じく諸国を遊説したが、孔子と同じく用いられず、やはり孔子と同じく晩年は故郷で弟子の教育に専念した。彼の言行を記録した『孟子』は『論語』『中庸』『大学』と共に宋代朱子によって四書とされた。「五十歩百歩」「仰いで天に愧じず」「去るものは追わず、来るものは拒まず」「みずからかえりみて縮くんば千万人といえどもわれ往かん」などが『孟子』出自の言葉である。
荀子 (前 298 頃 - 前 235 頃)	▼戦国時代の儒家。孟子の性善説に対して性悪説を唱え、悪である人間の性を礼によって矯正することを主張して、孔子の教えのうち特に礼を強調した。その説は法家への道を開くもので、門下から韓非や李斯などの代表的法家が出た。
墨子 (前 480 頃 - 前 390 頃)	▼墨家の祖。伝記は不明。『墨子』という書で、その思想が伝えられている。儒家の仁を人為的と批判して兼愛（無差別の愛）・交利（相互扶助）・非攻を説いた。ところどころの非攻は反戦平和主義とよく誤解されているが、専守防衛主義と考えたほうがいい。墨家は戦国時代最強の戦闘集団であり、ろう城戦などの防衛戦争に雇われては活躍していたことが今日明らかになっている。ちなみに酒見賢一がその辺りの事情を『墨攻』に描き、森秀行がマンガ化して小学館漫画賞を受賞した。傑作である。何と中国で映画化された。またこの派は庶民・奴隸からも人材を登用する「尚賢」を説き、下層出身者が多かった。
老子 (前 579 頃 - 前 499 頃)	▼字は李耳。孔子の同時代の人とも、戦国時代の人とも言われる。実在を疑う説もある。儒家の思想を批判し、無為自然を説き、儒教と並んで中国の二大思潮となる老荘思想の祖となり、後世道教の祖とされた。また、唐王朝は本来鮮卑系貴族の出自であるが、自らを老子の末裔と称し、漢民族の名門出身に出自を改竄した。そのため、唐では老子を祖と称した道教を帝室が保護することになった。
莊子 (前 4 世紀後半 - 前 3 世紀)	▼老子の思想を受け継ぎ発展させて、自由に遊ぶ真人を理想とした…という従来の説にたいし、実はその思想は孔子の弟子顔回の系譜に連なるものであり、むしろ孟子よりも孔子本来の思想をよく伝えているのであるとの説がある。著作に『莊子』“胡蝶の夢”の話は余りにも有名。
商鞅 (？ - 前 338)	▼法家理論の基礎を確立。秦の孝公に仕えて富国強兵政策を行い、連帯責任制である什伍の制・郡県制などを制定。秦の強国化に貢献した。しかし孝公の死後秦の貴族に憎まれ、自ら制定した極刑車裂きの刑で処刑された。
韓非 (？ - 前 234/233)	▼韓の王族に生まれ、李斯とともに荀子に学び、法家理論の完成者となった。いにしえを尊しとし、周の政治を理想とした儒家に対して、今の世は必ず昔より勝っていると考え、人々は現実の必要に応じて政治改革を行うべきで、必ずしも古代の伝統に従うものではないと主張。世襲の宗族による政治から、君主が任用する役人による中央集権国家建設への改革を説いた。李斯の仕えていた秦に招かれ、秦王政（後始皇帝）に認められて用いられようとしたが、李斯に妬まれ毒殺された。
李斯 (？ - 前 210)	▼韓非と共に荀子に学ぶ。秦王政に仕え、法家思想を実践。秦の中国統一がなると丞相となり、郡県制を施行し、焚書坑儒を実施した。始皇帝の死後宦官超高と計って2世皇帝を擁立し、他の公子・公女を虐殺。また將軍蒙恬を獄死させた。が、後に趙高の術策にはまって罪をとわれ、腰斬の刑で処刑され、その一族も3世代にわたって処刑された。
孫子	▼「敵を知り己を知れば百戦危うからず」は、古来兵法書の名著とされる『孫子』の言葉。もっともこの著作は呉王闔閭に仕え、春秋呉を強国にした孫武とその孫の著作があわさったものらしい。したがって本来“孫子”と呼ばれてきた人物も二人いることになる。
呉子 (前 440 頃 - 前 381 頃)	▼戦国時代中期の人。“孫呉の兵法”と孫子と並び称される兵法家として有名であり、宰相としても実績をあげたが、もともとは孔子の弟子曹子に学んだ人で、孔子の孫弟子にあたる。
蘇秦 (？ - 前 317)	▼戦国時代の縦横家であるが、存在を疑う説もある。鬼谷先生のもとで学び、舌一つで秦に対抗する合従策をといて六国の同盟をまとめ、一時は六国の宰相を兼ねたと言われる。同門の張儀の連衡策に破れると、斉に逃れ、そこで暗殺された。
張儀 (？ - 前 310)	▼戦国時代の縦横家。蘇秦と鬼谷先生のもとで共に学んだ同門である。楚の国の食客であった時に、宰相の家宝を盗んだ疑いをかけられ、ひどいリンチにあう。その時半死半生となった彼が家人に問うて言った言葉が「俺の舌はまだあるか」であり、この言葉は己の弁舌だけを武器に世の中を動かそうとする縦横家の気概を示したものである。蘇秦の合従策に対して秦の意を受けて、六国がそれぞれ別々に秦と同盟すべきであるとする連衡策を説き、秦の中国統一への道を開く。しかし反対派に憎まれ、魏に逃れてそこで死んだ。
公孫竜 (前 320 頃 - 前 250 頃)	▼言葉と物との関係を迫及し、論理を重視して論理学を展開した名家の代表的人物。名家は詭弁の学に陥ったと非難されるが「白馬非馬論」（白い馬は馬ではない）など、そうみられてもしかたのない側面はある。しかし名家はそもそもは社会の秩序維持をめざすものであり、彼も非戦論を説いたことでも有名である。
鄒衍 (前 305- 前 240)	▼天地万物は陰陽二つの性質を持ち、その消長によつて変化する（日・春・南・男などが陽、月・秋・夜・女・北などが陰）とする陰陽説と、万物組成の元素を土・木・金・火・水とする五行説とをまとめ、自然現象から世の中の動き、男女の仲まであらゆることをこの陰陽五行説によって説明。その説は占いや呪術とも結びついて後世に多大な影響を与えた。
屈原 (前 343 頃 - 前 277 頃)	▼戦国時代末期の楚の王族、政治家、詩人。強大化する秦に対抗するために、政治改革の実施と他の諸国との連合を唱えたが、楚国内の親秦派との政争に敗れて追放。衰えゆく楚の国を憂えながら汨羅江に身を投げて自殺した。憂国の詩人として知られる。流浪生活の間に民の苦しみに触れて、その生活に同情をよせるとともに楚の方言を用い、民間歌謡の形式を取り入れた詩歌の形式を作り出した。彼や彼の弟子の作品を集めた『楚辞』は北方の詩を代表する『詩経』に対して南方の韻文を代表するものである。
司馬遷 (前 145 頃 - 前 86)	▼「累卵」「燕雀いづくんぞ鴻鵠の志を知らんや」「禍福はあざなえる縄のごとし」「曲学阿世」「先んずれば人を制す」「死命を制す」「四面楚歌」「雌雄を決す」「酒池肉林」「敗軍の将は兵を語らず」「日暮れて道遠し」「百發百中」「傍

若無人」「満を持す」「命は天にあり」以上全て『史記』出自の故事成語である。いかに『史記』が古来より、人々に愛されてきたかがわかる。そういえばペンネームを司馬遼太郎とした日本人作家もいたっけか。以下、その司馬遼太郎とよく対比される山田風太郎の『人間臨終図鑑』より引用

中国の黄帝時代から前漢の武帝までの通史を、竹簡木簡による百三十巻の大著『史記』としてはじめて書いた漢帝室の御用記録官司馬遷は、この仕事にとりかかってから五年目に運命の大悲劇を迎えた。彼の仕える武帝は、時あたかも北方匈奴を討伐すべく將軍李広利（大宛遠征による汗血馬獲得で出題されることがある）の大軍をさしむけていたが、その一将勇猛無比の李陵は、突出してはるか敵の本拠地をつこうとして逆に全滅状態となり、李陵もまた捕虜となった。この敗報に、漢廷あげて李陵の失敗を責める中に、司馬遷はあえて李陵を弁護した。李陵は彼の親友だったのである。それは同時に大将李広利を非難することになり、李広利は武帝の寵妃の兄であったから武帝の怒りを買ひ彼は宮刑(男根切断)を受ける羽目になった。彼が四十六歳の時である。司馬遷はこの死以上の屈辱に耐えて生き抜いた。その目的はただ一つ、彼がとりかかっているお未完の『史記』を書き続けるためであった。男根を失った彼は五十五歳のころ、ついに『史記』を完成し、宦官としての余生を五十九歳で閉じた。

董仲舒

(前 176- 前 104)

▼前漢の儒学者で、儒学の經典五經の教授と普及を目的とする五經博士を置くことを武帝に献策し、儒学の官学化に成功。この結果漢以降の王朝で儒学が官学として、社会の指導理念として保護されていくことになるため、その意義は限りなく大きい。個人の思想としては、『春秋』の注釈書のうち『春秋公羊伝』を重視し、『春秋』の記述の中に深い意義を読み取るべきであるとする公羊学派の祖となる。公羊学は清末康有為らによって復活し、清末変法運動の支柱となったことで重要。また陰陽五行説を儒学にとりこんで天の自然現象と人の社会の社会現象は相関関係にあるとする天人相関説を唱えた。著作に『春秋繁露』がある。

班固

(32-92)

▼司馬遷の『史記』と並び称され後世の史書の手本となった前漢一代の歴史『漢書』の著者であり、後漢第一と後世称されて『文選』の巻頭を飾った賦の名手であり、なおかつ西域都護としてその名も高い班超の兄でありながら、司馬遷と同じく彼もまた不遇の一生を送った。中傷を受けて官位はすすまず、しかも「国史の改作をしている」との訴えで投獄。弟班超の無実の弁明でこの時は許されたものの、後に將軍實憲の匈奴討伐に従軍したさい、匈奴軍に敗北して責任をとわれて免官。更にその数年後、實憲が宦官に計られて謀反の疑いを受けて自殺すると、巻き込まれてまたもや投獄され『漢書』完成途上で獄死するのである。しかし彼の遺志は博学多才のほまれ高い、妹の女流作家班昭に受け継がれ、父班彪以来の悲願であった『漢書』の完成を見る。

鄭玄

(127-200)

▼後漢の学者。馬融に師事し、仕官をさけて野にあって儒学の古典の研究に生涯をささげ、訓詁学を完成して唐代までの儒学の本流を形成。また彼の学問は遠く清朝の考証学にも大きな影響を与えた。ただ、董仲舒と同じく、彼も漢代に隆盛を極めた陰陽五行説と讖緯説の影響は避けられず、この点は儒学に迷信を持ちこんだとして非難されることがある。

蔡倫

(? -121)

▼後漢の宦官。樹皮・麻屑などを棒切れ・魚網などを用いて紙を漉く製紙法を開発した。（現在ではより以前の紙が発見されていて、製紙法の改良とされるが）人類史上の大発明である。それ以前は木簡・竹簡・絹布などが用いられていた。この製紙法はようやく 751 年のタラス河畔の戦いをきっかけにイスラム世界に伝わり、そしてヨーロッパへと西伝していく。彼自身は宦官として皇帝の擁立に暗躍し、班超を用いて北匈奴征伐や西域経営にあたらせたことで知られる和帝を帝位につけることに成功して栄華を誇った。しかし安帝の時には、かつて安帝の祖母を罪に落とした陰謀の張本人であったために帝に嫌われ、自殺に追い込まれてしまう。

陶淵明

(365-427)

▼「帰りなんいざ、田園まさにあれなんとす、なんぞ帰らざる」の帰去来の辞で知られる東晋から南朝宋にかけての田園詩人。桃源郷のユートピア物語『桃花源記』の作者としても有名で、これは諸星大二郎がひねりを加えてちょっと怖いマンガ作品に仕立てている。束縛を嫌い、田園で酒を愛し、菊を愛して暮らす隠逸の人…と紹介されることが多いが、実はなかなかそれだけの人ではないぞ、この人は。「願わくは衣にありてはえりとなり、華首の余芳をうけん。願わくは裳にありては帯となり、美人の織身を束ねん（なれるものなら、上着ならば襟となって貴女のかぐわしい髪の匂いにつつまれていたい。なれるものなら下着ならば、帯となってあなたのたおやかな腰をしめていてあげたい）のような煩惱につつまれた恋の詩をつくっていたりもする。意外とすげべである。また、彼には有名な「成年重ねてきたらず、一日再びあしたなりがたし。時に及んでまさに勉励すべし、歳月は人を待たず」の句がある。これは若いときは二度とこない。一日に二度朝はこない。だから一生懸命勉強しなさい。時は人を待ってはくれないよ…と勉強を勧めたものであるとされて、よく先生が教訓たれるのに引用される。君たちも小学校か中学校か高校かで校長先生の朝の朝礼で聞かされたことがあると思う。でもホントはこの句の前に「飲を得てはまさに楽しみをなすべし、斗酒比隣を集めよ」とあり、意味は、うれしい時にはこころゆくまで楽しみ、酒をたっぷり用意して近所の仲間と飲むがいい。若いときは二度とはこない。一日に二度目の朝はこない。楽しめるときにはせいぜい楽しもう。時は人をまってはくれないよ…というのが正しい。つまり、実は若者に勉強ではなく酒を勧める詩だったんだな。

謝靈運

(385-433)

▼南北朝時代の南朝宋の詩人。晋の名門の一族で、祖父は前秦苻堅を 383 年の &T2230C7; 水の戦いで破った謝玄であるが、宋の代となって政治的には不遇であったため、官を辞し、自然を友として詩作に耽った。もっとも陶淵明がつつましやかに、むしろ晩年は困窮の中で暮らしたの対して、彼は父祖の財力をたのみに多くの奴婢を使用し、大荘園を開いて豪華な生活を営み、また山水でしばしば大宴会を開いた。その生活が妬まれ恨まれ謀反の疑いありということで訴えられて処刑された。

昭明太子

(501-531)

▼仏教の保護者として有名な南朝梁の建国者武帝の長子で皇太子であったが、数え年 31 歳の若さで没している。博学で知られ、周以来の優れた詩文を集めた『文選』を編纂。この書は中国知識人の必読書となり、日本にも奈良時代に紹介されて、以後大きな影響を与えた。

顧愷之

(344-405)

▼東晋の文人画家で中国画画の祖とされる。しかし彼の直筆の絵は現在伝わっておらず、大英博物館所蔵で代表作とされる『女史箴図』（女教師が宮女に教える訓言集『女史箴』の一節一節を図示し、原文をつけたもの）は唐代の模写であるといわれる。ピカソやダリなど現代の画家も随分奇行で有名であるが、彼も画の技量と才能の卓絶ぶりとともに、奇矯な言動で知られており、洋の東西を問わず、画家というのは変な人種である。

王羲之

(307-365)

▼東晋の書家。名門貴族の出身で、大官を歴任した後引退して悠々自適の生活を送った。楷書・行書・草書の三体を完成した中国書道の祖であると同時に、古今第一の書家であるとされ、“書聖”と称される。『蘭亭序』が有名。実際に書道をやった人、高校の芸術で書道をとった人は彼の書を手本に練習したことがあるはず。ただし、『蘭亭序』は、王羲之の熱狂的な収集家であった唐の太宗李世民が、とある寺院から部下を使って盗み

出させたうえに自分の墓に副葬させたので、この世から姿を消してしまったと伝えられる。マニアな権力者には困ったものである。

阮籍 (210-263)	▼竹林の七賢の第一の人物とされるが、彼をはじめとする七人が竹林で清談にふけったというのは伝説である。彼の生きた時代は魏から晋への王朝交替期であり、権謀術数が渦巻く世俗の世から離れ、偽善に墮した儒教の礼教主義を批判し、老荘思想にもとづいて脱俗をよしとする風潮が高まった。嵇康（魏室の女婿であり、司馬氏と対立してついに刑死）とともに、この風潮を代表する人物である。礼法の士（儒家）は白眼で迎え、超俗の士は青眼で迎えたと伝えられており、ここから白眼・白眼視の言葉が生まれた。
仏図澄 (? -348)	▼シルクロードの天山南路北道の要衝クチャの人。大乘仏教を中国に布教せんと来申し、西晋末期の混乱期に洛陽で民衆救済のための活動と布教をおこない、神通力をふるって王朝の支配者の支持を獲得し、華北仏教の基礎を築いた。117歳で没したと伝えられる。弟子の育成にも力を注ぎ、その数1万人といわれる。その中には後に浄土教の祖慧遠の師となる名僧道安がいる。
鳩摩羅什 (350-409)	▼インド人を父とし、クチャの王の妹を母とする。九歳の時母と共に出家してインドのガンダーラ地方に留学し、最初当時クチャで有力だった小乗仏教を学んだのち、竜樹＜ナーガルジュナ＞の完成した大乘仏教の教えに接して大乘に転向。クチャ帰国後は大乘仏教の教えの普及に努め、名僧としての評判を中国にまで響かせる。その結果、道安の示唆を受けた苻堅は西域に派遣した遠征軍に彼を捉え、連れ帰ることを厳命。前秦の遠征軍がクチャを攻略するや、捕虜となり、中国に連れ去られてしまう。中国では特に仏典の漢訳を積極的におこない、中国仏教、ひいては日本の仏教の確立に最大級の貢献をなした。
慧遠 (334-416)	▼ブドチンガの弟子道安の弟子である。東晋の僧で南朝の仏教の隆盛に多大な影響を与えた。念仏三昧を説き、念仏行者の組織白蓮社を結成。浄土宗の祖とされる。陶淵明とも交際があり、またクマラジーヴァとも文通して仏教教義の疑問を問うなどの交流があった。
法顕 (337-422)	▼東晋の僧。60歳を過ぎてから、戒律の原典を求めて長安から陸路シルクロードをインドへと旅立ち、西域諸国をへて6年かかってチャンドラグプタ2世（超日王）全盛期のグプタ朝へ入る。仏典を求め仏跡を巡り、セイロン島より海路帰国。出発から13年の歳月が流れており、この老齢でよくこれだけの大旅行をしたものである。旅行記『仏国記』も重要。
達磨 (5世紀頃 -6世紀頃)	▼南インドのバラモン出身の僧。6世紀初頭、海路南北朝時代の中国を訪れ布教活動を開始。南朝の梁の武帝（昭明太子の父）の尊信を得て、小林寺に入って禅による修業を指導。中国禅宗の祖といわれる。壁に向かって座禅を続けること九年、ついに悟りを啓いたという伝説から作られたのが、選挙の時など我々が目にするあのダルマ人形である。
張陵 (生没年未詳)	▼後漢末期に太平道とともに道教の源流となった五斗米道（天師道）を創始。始め儒学を学んだ後、長生を求めて四川に赴き、山中で修業する一方で道書を著す。祈祷と呪術で病氣治療をおこない、農民の間に信者を獲得すると教団を組織。病氣治療の謝礼として米五斗を要求したことが教団名の由来である。道教の伝承では不老長生の薬を飲んで仙人となったと伝えるが、仏教側の資料ではうわばみにのまれて死んだことになっている。その子孫に受け継がれて教団は更に発展し、後に民衆反乱五斗米道の乱をひきおこすことになる。
寇謙之 (363-448)	▼仏教の隆盛に刺激され、中国古来の神仙思想、老荘思想、陰陽五行説、易、呪術、占トなどを結びつけ、更にそれに仏教の儀礼をとりいれて天師道を改革した新天師道として道教を大成。河南の嵩山に20余年こもって修業し、ついに天帝の啓示を受けたと称して宣教につとめ、華北を統一した北魏の太武帝の信仰を獲得。道教を国教とし国師としての待遇を受け、ついに太武帝をして三武一宗の法難の最初である仏教大弾圧を行わせた。
王維 (701-761)	▼盛唐の詩人・画家。「詩中に画在り」と称され、李白と杜甫に並び称される一方、墨の濃淡で立体感を表す画風を完成し、後世文人画（南画）の祖として尊敬された。山西省に生まれ、少年時に都長安に移り、その美貌と詩・音曲の才で早くから評判となる。安史の乱に際しては反乱軍に捕われて、その宮廷に仕えることを強要されたが、唐王朝の復活を願う至誠の詩作をなし、そのため乱鎮圧後も罪を免れている。仏教に帰依し、31歳で妻を無くした後は独身を通してよく母につかえ、純情高潔な人柄で人々の尊敬をあつめ、慕われたという。
李白 (701-762)	▼盛唐の詩人。「白髪三千丈」といった奔放な表現を特徴とし詩仙と称されて唐の詩人中最も人気がある。各地を放浪し、酒を愛し、酒に酔って多くの詩作をなした。その行状は親友杜甫に「李白は一斗／詩百遍／長安市上／酒家に眠る／天子呼び来たれども／船に上らず／みずから称す／臣はこれ酒中の仙と」とうたわれたほどである。楊子江で船を浮かべて遊んでいたとき、酔って水面に映った月をとらえようとして誤って転落し、溺死したという伝説がある。
杜甫 (712-770)	▼盛唐の詩人。「国破れて山河あり／城春にして草木深し」で殆まる『春望』は安史の乱に臨んで作ったものである。玄宗皇帝の時代に生き李白と親友であった彼は、後世詩聖と呼ばれて高く評価されたが、その一生は放浪の一生であった。それも政治に志しを持ちながら、官につく機会がなかったり、官についても首になったり、あるいは安史の乱のために地方に難を避けるなど、自ら望んでではない放浪の生涯を余儀なくされた。その最後の二年も長安への帰還を望みながら、湖北・湖南の船の上で漂泊生活が続け、ついに湖江を漂う船の上で死んでいる。また彼の詩も当時の混乱した世相から一般には知られず、中国第一の詩人との評価が確立したのは、ようやくその死後40年を経た中唐の時代である。
白楽天 (772-846)	▼中唐を代表する詩人。玄宗皇帝と楊貴妃をモデルとした『長恨歌』や日々の感傷を綴った『琵琶行』を始め、唐代最多の3000余首の詩作を行い、晩年には自ら『白氏文集』を編んだ。平安期の日本で最も愛された中国詩人であり、それは『枕草子』の一エピソードに、清少納言が雪の日皇后に「少納言よ、香炉峰の雪はいかならん」と問われ、黙って御格子をあけ、御簾を高くかかげて見せてその才気感嘆されたことが、とりあげられていることからもうかがえる。皇后の問いは『白氏文集』の詩の一節「遺愛寺の鐘は枕をそばだてて聞き、香炉峰の雪は簾をかかげて見る」を踏まえたものであったのである。さてその詩人の生涯といえば貧しい家に生まれながら、29歳で一族ではじめて進士に合格し、地方官を振り出しに勤勉な官吏生活を経て出世を重ね、途中一時政治の乱れを糾弾して左遷されるというようなことがあったものの、最後は行部尚書（司法長官）の地位まで登り、引退後は洛陽郊外で酒と詩を供に、悠々自適の生活を送るという、詩人には珍しい順風満帆の一生であった。
韓愈 (768-824)	▼「韓白」と白居易と並び称され、中唐を代表する詩人でもあるが、六朝以来の四六駢儷体の技巧に流れた文体を嫌い、漢以前の古文復興運動を提唱し、様々な人生の形を描く『墓誌銘』に優れた散文作品を残して唐宋八大家のはじめに数えられる文章家としてより重要である。思想家としては儒教の優越を主張し、道教と仏教を

柳宗玄 (773-819)	▼異端として激しく排撃したことで知られる。政治家としては、上官の不正糾弾や、時の天子の仏舍利宮中導入への反対などで二度に渡って左遷されるも屈せず、性剛直との評を残した。面倒見のいい親分はだの性格であつたらしく、柳宗元を始めとする文人が彼の周りに集まり、当時の文壇の巨頭であった。
閻立本 (? -673)	▼叙景・叙情に優れ韓愈とならび称される中唐の詩文の大家。唐宋八大家の一人。屈原に傾倒したが、詩には六朝の自然詩入、陶淵明の影響がある。21歳で進士に合格し、順調に政治家としてのキャリアを重ね、32歳の頃、徳宗の死を契機に政治改革派が政権を握るとその中心人物として活躍。しかし一年後、改革派が政争に破れ弾圧されると地方に左遷。10年後長安に呼び戻されたものの、すぐにさらに遠方の柳州（現広西省）におくられ、47歳でその地に没した。一方で家庭生活では30歳頃までに父・妻・二人の姉を次々に失っている。このような政治面での不遇・家庭生活の不幸は、皮肉なことに彼の作品をよりすぐれたものにしたといわれている。同僚でもあった韓愈は、古文復興運動の盟友であったが、韓愈が仏教を毛嫌いしたのに対して、彼は特に左遷後は、禪に親しんだことが知られている。
呉道玄 (生没年未詳)	▼唐初期の画家で、官僚としても優れており、太宗・高宗に仕えて中書令まで出世した。人物画で知られ、漢から隋までの歴代の皇帝の肖像を描いた代表作『歴代帝王図巻』は、教科書の挿し絵で目にしているはずである。
欧陽詢 (557-641)	▼玄宗に仕えた唐の画家。没落貴族の家に生まれ、小役人となったものの貧苦と孤独の生活であったが、その画才が玄宗の目に留まり、宮廷画家となる。様々な画題をこなしたが、特に山水画に秀で、墨での岩肌の描写などの技術を生みだし、従来の非現実的・空想的な山水画を、現実感覚に溢れた山水画に一変。後の中国、および日本の絵画に決定的な影響を与え、〈画聖〉と称賛された。もっともその真作は伝わっていない。
褚遂良 (596-658)	▼隋末唐初の書家・学者・政治家。はじめ隋につかえ、のち唐の高祖・太宗の二代に仕える。王羲之の圧倒的な影響下にあったが、次第に嚴整美を特徴とする独自の書風を加えて、特に楷書に秀でた。初唐三大家の一人。
顔真卿 (709-785)	▼唐初の書家・政治家。欧陽詢・虞世南とともに初唐三大家と称される。虞世南の後を継いで太宗李世民の書道顧問となり、太宗の王羲之の書跡収集事業の管理を担当。この時王羲之の書風を研究し、婉美を加えて自己の書風を確立。書道の第一人者とみなされるようになった。政治家としても太宗の信任を得て、中書令（宰相）にまで出世。太宗の死にあたっては後事を託された。しかし太宗の息子高宗が、太宗下級の妃であった武妃（後の則天武后）を皇后にしようとした時、反対して左遷され、不遇のうちに地方で没した。
孔穎達 (574-648)	▼中国書道において六朝の書聖王羲之とならび称される書道の大家。王羲之の典雅に対して素朴で力強い書風で知られる。実際にも彼は安史の乱勃発に際し、文官でありながら義勇軍を募って乱軍に抗し続け、唐王朝の復興に大きな貢献をなした剛直の忠臣であった。安史の乱後は、乱鎮圧の功労者として唐宮廷に重きをなしたが、監察を担当する御史台の長御史大夫として宰相や権勢家としばしば対立。ついに784年の李希烈の反乱にさいして彼を好まない宰相の策略により、希烈説得の役目を与えられ、死を決しておもむき、結局その陣営に拘留されたあと殺された。
玄奘 (602-664)	▼煬帝の時に科挙に合格し、はじめ儒学者として隋に仕えた。隋末の大乱後、唐の太宗李世民に招かれて唐に仕え、太宗の信任を得た。『隋書』の編纂の後、五経注釈の集大成を目指した『五経正義』編纂の中心となり、各巻の序文を書いている。もっとも彼の責任ではないが、『五経正義』は科挙に用いられたため儒学の固定化を招いたことでも有名である。
義浄 (635-715)	▼明の呉承恩の『西遊記』の三蔵法師のモデル。建国当初の唐は外国への出国を禁じていたが、仏教研究の情熱やみがたく、夜陰に乗じて単身国境を越え出国。西域の高昌国で高昌王の知遇を得て、西域各国への紹介状と往復20年分の経費を獲得。インドに渡ってはヴァルダナ朝のハルシャ＝ヴァルダナ王の厚遇を得てナーランダ僧院に留学とつきにも恵まれた。仏教研究と仏典収集の年月を過ごした後に、仏典や仏骨を携え、また陸路帰国の旅に出る。途中インダス川で、仏典をつんだ像が溺死することがあったため、しばらく西城南道の要衝ホータンに滞在して仏典を集めていたが、彼の名声は唐に及び、唐の太宗は彼の帰国を歓迎するとの親書を届けた。国禁を破った犯罪者として出国した彼はここに唐随一の名僧として榮譽の帰国を果たすのである。しかしその時、彼のインドへの旅を援助した高昌国は、唐に滅ぼされて既になかった。旅行記は『大唐西域記』。
鑑真 (688-763)	▼法顕や玄奘の業績に憧れ、37歳の時、単身海路広州よりインドへ渡る。この時既にヴァルダナ朝は崩壊していたが、ナーランダ僧院に留学して仏教を研究。さらに海路帰国途中に立ち寄ったジャワ島のシュリーヴィジャヤ王国で大乘仏教が盛んなのを見て、都パレンバンに10年間にわたって滞在。この間にインド各地や東南アジアでの見聞をもとに『南海寄帰内法伝』・唐より仏典を求めてインドに向かった僧たちの伝記『大唐西域求法高僧伝』を執筆。帰国した時は則天武後の時代で、玄奘と同じ三蔵の称号を与えられ、仏典翻訳にあたった。
阿倍仲麻呂 (701-770)	▼唐の高僧。当時の日本には授戒を授ける資格のある僧侶がいなかったため、請われて日本にわたることを決意。しかし、当時の航海術には問題があり、渡航は命がけだった。日本にわたろうと試みて、失敗すること12年の間に5回。その間に盲目になるなどの苦難を重ね、ついに754年来日した。その死に先だって弟子達に作らせた『鑑真像』は、最大級の国宝としていまもゆかりの唐招提寺に安置されている。
司馬光 (1019-1086)	▼遣唐使の一員として唐にわたり、玄宗皇帝に仕えてついに節度使にまで出世した。しかし望郷の思いやみがたく、753年玄宗皇帝の許しを得て帰国の旅に上ることになった。その時作った歌が有名な「あまのはら／ふりさけみればかすがなる／みかさのやまに／いでしつきかも」である。しかしこの渡航は失敗して船は安南（ヴェトナム）まで漂流し、そこで180余名のうち、170余名までが殺されるという惨劇にあった。この時、彼も死んだという情報が伝わり、親交があった李白が、彼の死を悼む詩を作っている。しかし彼は危うく難を逃れて2年後にやっと長安に帰ったものの、安史の乱の勃発もあってついに日本に帰ることはかなわず長安で没した。
徽宗 (1082-1135)	▼『春秋』の後の時代、すなわち前432年の晋の分裂による戦国時代の開始から、960年の宋の建国までの歴史を年代順に記した編年体の通史『資治通鑑』を完成したことで知られる。書名は、治世に利益があって歴代為政者の鑑とするに足る通史の意である。『資治通鑑』はその考証のきわめて正確なこと、今では失われてしまった根本資料からの抜粋を多く含んでいることから、歴史書として重要である。司馬光は王安石の新法に反対して、政府を辞している時に『資治通鑑』を完成し、神宗にささげた。王安石の新法は、青苗法や市易法など政府による低利の融資政策を含んでいたが、司馬光は、儒学の価値観から政府が利子をとる商行為を行うことを忌避し、新法に反対したといわれる。神宗の死にともない旧法党の首領として政府に復帰し、何の準備もとまなわれないまま新法の廃止と旧法の復活をおこなって大混乱を招き、その8か月後に病死。
	▼新法の改革をおこなった神宗の子。芸術に探い造詣をもち、画院に書家を集めて花鳥風月を彩色で写実的に描く院体画を完成。自ら最も優れた画家として『桃鳥図』などの傑作を残し「風流天子」と称された。しかし自

	己の風流を追及するために、当時の宋の国情を無視して民に重税をかけ、これを苦しめた。また遼を討つために新興の金と手を結んで挾撃策をとって遼を滅ぼしながら、金との協定を無視してその怒りを買い首都開封を包囲されて、息子の欽宗に帝位を譲って退位。この時は一年後の賠償金を約すことでなんとか危機を切り抜けたものの、現実はその約した賠償金を払う能力は無く、翌年、またしても背信に怒った金によって、ついに開封を占領され、息子の欽宗や高官、宮廷の秘宝などとともに、東北地方に連行された。これが靖康の変である。
周敦頤 (1017-1073)	▼唐代までの儒学は訓詁学が中心であったが、それに反発し、仏教や道教の影響も受けて、宇宙の根本原理は何かを明らかにし、そこから人間として何をなすべきかを追及しようとした。彼によれば学問は格物致知から誠意正心、修身齐家、治国平天下にすむ。その目的は聖人である。聖人は天理そのものであり、爽雜のない人格である一とその昔、青学の入試問題の文中に出てきていた。地方官としての生活が長かったため、生きている間はあまり知られなかったが、朱子が彼を道学の祖として、その著『太極図説』を紹介したため有名になった。
朱子（朱熹） (1130-1200)	▼『大学』『中庸』『論語』『孟子』を『四書』と称して儒教の根本經典とし、周敦頤&T267326; やその弟子の程顥・程頤兄弟の学説を集大成して、儒学として空前絶後の思弁哲学・実践倫理学である朱子学を築いた。その学問はまた、宋学とも、道学とも、性理学とも言われる。宇宙万物は理（宇宙の根本原理）と気（宇宙の根本物質）からなるという理気二元論を説き、人間に宿った根本原理が性であるとして、性即理（性はすなわち理である）とする。ところが人間は人欲にじゃまされて、自分の中の根本原理である性に従う、すなわち宇宙の根本原理である理に従って行動することが出来ない。では、人欲を去って天理につくす、性即理の境地に達するためにはどうすべきか。それは格物致知（事物に即してその理を極めることで認識を完成する）によるのである…とした。理をブラフマン・性をアートマンとウパニシャッド哲学の用語に置き換えてみるとこの性と理は理解しやすくなる。また、性即理の境地にいたった、つまり仏教で言う悟りを啓いて仏陀になることが、朱子学という聖人になることであるが、そのために精神的修業よりも、学問研究（格物致知）を強調したことから、朱子学の主知主義的傾向が言われるわけである。一方で彼は実際面では、華北の地を女真族の金に占領され、反撃もままならない当時の南宋の屈折した雰囲気を代表して、華夷の別を激しく強調し、また君臣間、親子間の道徳を強調する大義名分論を唱えるという、なかなか反動的な主張も展開している。彼の学問は生前には政敵によって偽学として禁じられもしたが、後に儒学の正統となって朝鮮・日本にも伝わり、日本では特にその大義名分論が評価されて江戸幕府で官学となった。イエズス会士によって欧州にも紹介され、ヴォルテールによってその合理主義が高く評価された。
陸九淵 (1139-1192)	▼南宋の儒学者で、朱子の理気二元論に対して理の存在だけを認め、人間の心と理の一致をとく唯心論（観念論）の立場から理一元論を説き、朱子の性即理に対して心即理を唱え、自分の心を理解するためには座禅を勧めた。朱子とは学説の違いを越えて、深く尊敬し合う仲であったというが、弟子は対立。その説は明の時代になって王陽明（王守仁）の陽明学の成立に影響を与えた。
欧陽脩 (1007-1072)	▼北宋の政治家・学者・唐宋八大家の一人。学者としては『新唐書』の編纂で有名。また韓愈に私淑して宋代の古文復興運動の中心となり、科挙の試験官となった時に四六駢儷体の影響を受けた文章の答案をことごとく没とする荒唐治で四六駢儷体にとどめをさした。唐宋八大家のうち、宋代の残り5人はいずれも門下である。政治家としては、文章の弟子である王安石の新法に反対し、辞任した。
王重陽 (1113-1170)	▼陝西の莊園地主の子に生まれ、幼い頃より勉学に励んで、金の科挙に合格。ところが期待したほどの出世がえられなかったために官を辞し、俗世を批判して、一時仏教に帰依した後に道士となった。金朝支配下の華北で腐敗墮落して単なる迷信と化した従来の道教を批判し、儒教と仏教、特に禅宗の教えを取り入れて革新道教の全真教を確立。もともと預言者故郷に入れられずで、故郷の近くで教えを説いた時は狂人あつかいされ、山東地方で布教してはじめて成功を治め、従来の道教（正一教）と道教界を二分する大勢力となった。弟子をつれて故郷に帰ろうとして果たせず、途中開封で病没。
郭守敬 (1231-1316)	▼中国元代の科学者。世祖フビライに仕えて水利・土木事業に功績を上げて信任される。やがて当時使用されていた大明暦のずれが大きくなってくると、1276年、改暦の責任者に任命。イスラムの天文学の成果をとりいれ、計算に加えて、各種観測器具も使い、ついに1280年、中国王朝史上最も正確な授時暦を完成した。授時暦は日本でも研究されて、江戸時代の貞享暦に大きな影響を与えている。
馬致遠	▼元初の元曲の作家。生没年不詳。伝も未詳。代表作『漢宮秋』は、漢の時代、和蕃公主として匈奴の呼韓邪単于に嫁いでいった王昭君の故事にちなんだもので、王昭君物の決定版とされ、元曲随一の評判をとる。
王陽明 (1472-1529)	▼明代の儒学者。北宋の程顥の「万物一体の仁」の思想と南宋の陸九淵の「心即理」説とに影響を受け、陽明学を創始。代々続く学者の家に、明の高級官僚の子として生まれる。科挙合格のために幼少より朱子学を学ぶも、官学的形式的な朱子学になじめず、一時仁俠・兵法・詩文・道教・禅宗などに耽溺。28歳で進士に及第して官僚となるも、35歳の時、悪宦官を批判して、貴州省の山奥の竜場に左遷。ここで心即理・知行合一・致良知（全ての人間の中に存在する＜良知＝是非の判断能力＞を実行すること）の陽明学の思想の原型を得る。これを竜場の一悟という。致良知の思想は、心の奥底にたしかめて非である時は、孔子の言葉でも是とはしない、というものである。主知的な朱子学は、一部のエリートしかできないが、致良知の思想は誰にでも実行できる。陽明学はこれにより最底辺の人にもまで広がっていく。中央政界に復帰後は、主に軍事畑をあゆみ、天才的な軍略家として、流賊の取り締まりや反乱の鎮圧に活躍し、ことごとく勝利をおさめて、ついに兵部尚書となった。
李卓吾 (1527-1602)	▼明代の儒学者で陽明学左派の最後を飾る人物。泉州の出身で、その家の信仰は、イスラム教であった可能性がある。童子の濁りの無い心を最も価値ありとみなす童心説を唱え、五経や四書の儒学の經典と『西廂記』や『水滸伝』を同列に論じ、男女平等も主張。そのあまりの革新性ゆえにたびたび迫害を受け、ついに投獄されて自殺した。幕末維新の思想家吉田松陰が最も傾倒した人物としても有名。
羅貫中	▼元末明初の小説家・戯曲家。生没年不詳。北宋末期、山東の梁山泊によった豪傑の物語『水滸伝』を元の施耐庵の原作から編纂。正史の『三国志』を種本に、『三国志演義』を著す。『三国志演義』は全24巻。横山光輝のマンガだと60巻である。
宋応星 (1590-1650)	▼明末の学者で代表的技術書『天工開物』の著者。江西省の出身で科挙のうち、郷試に合格して地方官となる。地方官としてははなはだ優秀で、業績を上げ、庶民の人気も高く、なんと肖像が作られて神様として祭られたというエピソードが知られている。『天工開物』は、キリスト教宣教師たちにより西洋科学書が次々に翻訳されていた時代背景のもとで生まれたが、内容に関しては西洋科学の影響はあまりなく、中国在来の産業技術のほとんど全てに関し、豊富な挿し絵とともに説明を加えたものであり、当時の産業技術の資料として貴重な。

李自珍 (1523-1596)	▼明末の薬草学者で『本草綱目』の著者。代々続く医者の子に生まれ、科挙に三回失敗した後本草（薬学）・医学にこころざす。30 歳ころから従来の本草書を整理して誤りを正し、自説を加える作業をするうち、本草書の集大成を思い立ち、以後 30 年、都合 3 回稿を改めてついに完成。死の直前南京から出版されて、日本の農学者や物産学者にも大きな影響をもたらした。
徐光啓 (1562-1633)	▼明朝末の政治家・農学者。上海の人で、イエズス会宣教師マテオ＝リッチの著した世界地図、『坤輿万国全図』を見て西欧の学問に憧れ、マテオ＝リッチの滞在する南京に赴き、1600 年南京でマテオ＝リッチにより、キリスト教の教義を授けられ、1603 年には洗礼を受けた。翌年進士に及第して官につく一方マテオ＝リッチに西欧諸学を学び、エウクレイデスの幾何学書の前半を漢訳して出版。のち一時官を辞して農学の研究につとめ、中国の農学を集大成しさらに西欧の知識を加え、大作『農政全書』を完成。一方でサツマイモなどの普及につとめる。後金のヌルハチが率いる女真軍の勢力が増大し明軍が劣性になると、砲術を中心とする西洋兵学の導入を進言し、マカオより大砲を購入。大戦果を上げている。崇禎帝の即位により重用され、礼部尚書（文部大臣）になり、アダム＝シャルルらと西洋暦法を導入した崇禎暦書作成に従事した。
仇英 (生没年不明)	▼16 世紀前半頃に活躍した院体画（北宗画）の画家である。院体画は南宋の画院の流れを組む画風であり、その画家は出身身分の低い者が多く、文人画の画家からは、画家というよりも職人的な画工として一段低く見られていた。彼も低層の出身であったが、古画の模写などを通じて刻苦して技術を高め、筆力を尊重しながら正確無比な描線を駆使する画風を完成。20 歳の頃より識者に認められ、同時代の代表的文人画家の文徵明からも画仲間として遇されたという。人物描写、特に美人画に優れ、明末から清初にかけて流行した「士女風俗図」に大きな影響を与え、さらにわが国の浮世絵にも影響を与えた。40 代で没したとみられている。
董其昌 (1555-1636)	▼南宗画を大成した明代の画家。南宗画・北宗画の命名者でもあり、書家としても明代第一とされ、「芸林百世の師」と仰がれた。政治家としても高官を歴任したため、その南宗画の画風と理論は後世決定的な影響を与えた。著書に『両禅室随筆』など。
黄宗義 (1610-1695)	▼明末清初の学者で浙江省の出身。経世致用を唱える考証学の祖の一人。陽明学を学んだが、空論化した明末の陽明学左派には批判的であった。父は政治改革を目指した東林党に属したが東林党への弾圧で刑死。師の陽明学者劉宗周は、明朝滅亡に絶食して殉死。彼も明朝滅亡後は復明運動に加わり、長崎まで援軍を求めに来て果たせず、復明の希望が断たれた後は、清朝からの仕官の勧めを断って帰郷。以後は学問に没頭し、徹底的な政治制度改革を唱えた。宰相制度の復活、学校制度の充実、学校における意見の中央政治への吸収などを唱えた彼の改革案は、一種の民本主義に基づいており、専制君主政治を痛烈に批判したその著『明夷待訪録』は清末の改革運動に大きな影響を与えて、中国のルソーと称賛された。もっとも本物のルソーよりも更に 100 年ほど早い人である。
顧炎武 (1613-1682)	▼明末清初の儒学者。明末の陽明学の空理空論化を批判し、経世致用を唱え、厳密な考証を重視する考証学を確立。代表作『日知録』は、日々の読書研究の際の随想録の形をとり、政治・経済・天文・地理・制度など広い範囲を該博な知識を背景に、厳密な考証と鋭い批評で論じたものである。明が滅亡すると母をともなうて各地を転々とする一方、復明運動にも加わったが、復明はならず、母は清朝に仕えて節操をけがしてはならぬと遺言して絶食 20 余日で明朝に殉じる。彼の学問見識を惜しむ清朝のたびたびの仕官の申し出を断り、引退生活をおくった。
錢大昕 (1728-1804)	▼乾隆帝期の考証学者。神童の名を轟かせ、西洋数学・天文学と中国暦算書を比較研究した著作を著した後に、27 歳で進士に及第。その後は勅撰集の編纂事業に携わっていたが、20 年の後、父の喪を期に故郷に帰り、以後 30 年、官吏生活とは縁を切って故郷の紫陽書院などの主任教授として後進の指導にあたる一方、多くの学問的業績を上げた。なかでも『二十二史考異』を始めとする史学の考証には特に傑出している。
魏源 (1794-1857)	▼清末公羊学の先駆者。進士及第は 1844 年と遅かったが、その以前に前漢で董仲舒が説き、清末になって政治改革実践の学として復活した公羊学を学び、中国社会の矛盾と外国勢力の圧力が表面化してきた時代の先覚者として執筆活動にはいつていた。1840-42 年のアヘン戦争にも参加し清朝の敗北に直面。この時、盟友であった林則徐に、彼が進めていた外国研究の成果を託された。その体験をもとに、42 年には、清朝の盛衰を描いた『聖武記』44 年には近代制軍の必要を訴えて、世界地理や、西欧諸国の実情を紹介した『海国図志』を著す。官について後は、地方官として各州の知事を歴任し、太平天国の乱でも従軍している。変法思想の先駆者でもあり、その著作は吉田松陰など、日本の幕末維新運動にも大きな影響を与えている。
八大山人 (1625-1705)	▼清初の南宗画を石涛と共に代表する画家。明の王族出身で、明滅亡後は出家して高僧として名をなしたが 55 歳の頃狂人を装って還俗し、画作を始める。唾者のふりをしたり、酒に酔いながら作画したりと、数々の奇行で知られ、またその絵の多くは子供や貧乏人に与えてしまったといわれる。70 歳を過ぎて石涛と交遊したことが知られているが、晩年は明らかでなく、80 歳頃没したらしい。
石涛	▼八大山人と並び称される清初の代表的南宗画家。生没年不明であるが、八大山人より 14-5 歳年少と見られている。やはり明の王族出身であったらしく、独自の風格を持つその絵は、前王朝に連なるものとしての鬱屈した抵抗精神の反映であろうといわれている。

